

南原遺跡Ⅻ

埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

埼玉県戸田市教育委員会

はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口13万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が求められています。

今回報告いたします南原遺跡第12次発掘調査は、宅地造成工事に伴い、平成25年に緊急発掘調査が行われたものです。この発掘調査により、古墳時代前期から平安時代に生活を営んだ人たちが遺した貴重な痕跡を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を確認することができました。

本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、ご尽力、ご協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

戸田市教育委員会

教育長 戸ヶ崎 勤

例 言

1. 本書は、埼玉県戸田市南町 2314-1, 2 に所在する南原遺跡第 12 次発掘調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社アーネストワン（代表取締役 西河洋一）による宅地造成工事に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が株式会社東京航業研究所の支援を受けて実施した。また、整理作業、報告書作成作業は、戸田市教育委員会が株式会社東京航業研究所の支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は、平成 25 年 3 月 18 日から平成 25 年 6 月 28 日まで行い、整理作業・報告書作成作業は平成 25 年 7 月 3 日から平成 28 年 3 月 15 日まで株式会社東京航業研究所事務所で実施した。
4. 発掘調査および整理作業、報告書作成に要した経費は、全て事業者および土地所有者の負担による。
5. 本書は、埼玉県戸田市教育委員会が刊行した。
6. 本書は、岩井聖吾が監修した。編集は柏山滋（株式会社東京航業研究所）が行った。執筆は第 1 章第 2 節を柏山滋が、第 2 章第 4 節、第 3 章を宅間清公が、その他の部分を岩井聖吾が行った。
7. 発掘現場および出土遺物の写真撮影は、柏山滋・村井健三が行った。
8. 本書の版權は、戸田市教育委員会が保有する。
9. 発掘調査成果の周知と活用または学術研究、教育等を目的とする場合は、本書の一部を無償で複製して利用できるものとする。
10. 出土遺物及び発掘調査に伴う各種データ等はすべて戸田市教育委員会が保管し、活用を図るものとする。
11. 本事業は、以下の組織により実施した。

【埼玉県戸田市教育委員会】

教 育 長	羽富 正晃（平成 27 年 3 月 31 日まで） 戸ヶ崎 勤（平成 27 年 4 月 1 日から）
教 育 部 長	奥墨 章（平成 25 年 3 月 31 日まで） 山本 義幸（平成 25 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日まで） 中川 幸子（平成 27 年 4 月 1 日から）
次 長	江添 信城（平成 26 年 3 月 31 日まで） 小沼 利行（平成 26 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日まで） 鈴木 研二（平成 27 年 4 月 1 日から）
生涯学習課長	頼所 博行（平成 27 年 3 月 31 日まで） 津田 孝一（平成 27 年 4 月 1 日から）
生涯学習課主幹	津田 孝一（平成 27 年 3 月 31 日まで）
生涯学習課副主幹	雨宮 博子（平成 27 年 4 月 1 日から）
生涯学習課主事	池上 裕康（平成 27 年 3 月 31 日まで） 田中 聡（平成 27 年 4 月 1 日から） 長澤 有史（平成 27 年 4 月 1 日から） 岩井 聖吾（調査担当者）

【株式会社東京航業研究所】

調 査 員 宅間清公

柏山 滋

発掘調査および資料整理参加者

阿部清美 家永 隆 石割裕次郎 伊東 豊 榎本 昇 大川亜弓 大熊福太郎 加藤千恵子
神山道子 菊池久美子 木村俊夫 日下部稔子 佐藤昌子 島田真紀子 高橋照子 立川英二
殿井貴代子 富永義昭 中島民男 中嶋千世子 長江陽子 永田正博 中信節子 野口芳孝
野村果央 畠山真紀 平野由美子 古瀬 誠 古齒一枝 前澤由香 三木駿介 山本通泰
横溝晴枝

12. 調査および本書を作成するにあたり、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。

記して謝意を表すものである。






大網信良 大谷 徹 神沼幹夫 小坂延仁 小島清一 齋藤瑞穂 齊藤弘道 坂上直嗣
城倉正祥 鈴木正博 田中明昭 土井翔平 富田和夫 長井光彦 平原信崇 福田 聖
的野善行 的野美佐 山田俊輔 吉田幸一 若松良一

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 戸田市立郷土博物館

(敬称略 五十音順)

凡 例

1. 挿図中の地図、検出遺構実測図等の方位は、図中に真北の方位を示した。
 2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。
 3. 遺構番号は調査の進捗過程で、そのプランの確認された順に遺構の種別ごとに付したが、整理・報告書作成作業の過程で遺構番号を振り直している。
なお、遺構略号は下記のとおりである。
SI：住居跡 SD：溝跡 SK：土坑 SE：井戸跡 SZ：方形周溝墓 SS：古墳
FP：火葬墓 P：ピット
 4. 本調査では世界測地系に準拠した経緯線上に、10 m 正方のグリッドを設定した。グリッドの呼称については過去の報告書に従い、北西隅を基準点に東方向にアルファベット、南北方向にアラビア数字を振り「A-1」のように表記する。
 5. 発掘調査時の土層観察における色調の記録及び遺物観察における色調は、『新版 標準土色帖』2013 年度版（小山正忠・竹原秀雄 編・著、農林水産省農林水産技術会議事務局 監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修、日本色研事業株式会社 発行）を参考にした。
 6. 遺物拓影図は、断面図の向かって左側に外面を、右側に内面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左側に外面を示した。また、底面は下に、天井面は上に示した。
 7. 遺物の種別のうち、弥生時代後期から古墳時代前期初頭に属する土器は、すべて「土師器」と表記した。
 8. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、その他の土器については断面を白抜きにした。
 9. 遺構図・遺物実測図中のトーン・線種は次の通りである。
焼土・赤彩…… 炭化物…… 粘土塊…… 黒斑…… 攪乱……
10. 遺物観察表法量の（ ）の値は残存部からの推定値、< >の値は残存高を示す。
 11. 遺物実測図および遺構実測図の縮尺はすべて挿図中に示した。
 12. 標高は、T. P（東京湾中等潮位）を基準とした。
 13. 出土遺物の註記は下記の原則に基づき行った。
例：MH、X II、S I - 1、2 5
遺跡地号 調査年度 遺構地号 遺構番号 遺物番号
 14. 単独のピットは P1、P2、遺構に付属するピットは P①、P②と表記した。
 15. 写真図版中の遺物写真の縮尺はすべて図版中に示した。

目次

はじめに

例言／凡例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2節 発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第2章 周辺環境と調査の概要

第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

第3節 遺跡・調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

第4節 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 住居・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

第2節 溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

第3節 土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

第4節 井戸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

第5節 方形周溝墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

第6節 古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74

第7節 火葬墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

第8節 ビット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78

第9節 その他の出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

第4章 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録／奥付

插图目次

第 1 图	埼玉県の地形	3	第 26 图	第 5 号住居跡出土遺物実測図 (2)	
第 2 图	戸田市域の地形	4		(SI05)	30
第 3 图	南原遺跡及び周辺の遺跡位置図	5	第 27 图	第 6 号住居跡実測図 (SI06)	31
第 4 图	南原遺跡周辺遺跡位置図	6	第 28 图	第 6 号住居跡粘土微細図 (SI06)	32
第 5 图	南原遺跡調査区位置図	10			
第 6 图	南原遺跡調査区域全体図・等高線図	11	第 29 图	第 6 号住居跡出土遺物実測図 (SI06)	33
第 7 图	遺構調査全体図 ①	12			
第 8 图	遺構調査全体図 ②	13	第 30 图	第 7 号住居跡実測図 (SI07)	34
第 9 图	遺構調査全体図 ③	14	第 31 图	第 7 号住居跡出土遺物実測図 (SI07)	35
第 10 图	遺構調査全体図 ④	15			
第 11 图	基本層序	16	第 32 图	第 8 号住居跡実測図 (SI08)	36
第 12 图	第 1 号住居跡実測図 (SI01)	18	第 33 图	第 8 号住居跡出土遺物実測図 (SI08)	36
第 13 图	第 1 号住居跡出土遺物分布図 (SI01)	18			
第 14 图	第 1 号住居跡出土遺物実測図 (SI01)	19	第 34 图	第 1・5・6 号溝跡実測図	38
第 15 图	第 2 号住居跡実測図 (SI02)	20		(SD01・SD05・SD06)	
第 16 图	第 2 号住居跡出土遺物実測図 (SI02)	21	第 35 图	第 2～4 号溝跡実測図 (1)・	39
第 17 图	第 3 号住居跡実測図 (SI03)	22		遺物分布図 (SD02・SD03・SD04)	
第 18 图	第 3 号住居跡出土遺物実測図 (SI03)	22	第 36 图	第 2～4 号溝跡実測図 (2)	40
第 19 图	第 4 号住居跡実測図 (SI04)	24		(SD02・SD03・SD04)	
第 20 图	第 4 号住居跡遺物分布図 (SI04)	25	第 37 图	第 1 号溝跡出土遺物実測図 (SD01)	41
第 21 图	第 4 号住居跡出土遺物実測図 (SI04)	25			
第 22 图	第 5 号住居跡実測図 (1) (SI05)	27	第 38 图	第 2 号溝跡出土遺物実測図 (SD02)	41
第 23 图	第 5 号住居跡実測図 (2) (SI05)	28			
第 24 图	第 5 号住居跡遺物分布図 (SI05)	29	第 39 图	第 3 号溝跡出土遺物実測図 (SD03)	42
第 25 图	第 5 号住居跡出土遺物実測図 (1)	29			
	(SI05)		第 40 图	第 4 号溝跡出土遺物実測図 (SD04)	43
			第 41 图	第 5 号溝跡出土遺物実測図 (SD05)	44
			第 42 图	第 7・8 号溝跡実測図・遺物分布図	47
				(SD07・SD08)	
			第 43 图	第 7・8 号溝跡実測図	48
				(SD07・SD08)	
			第 44 图	第 7 号溝跡ピット群実測図 (SD07)	49

第 45 図	第 7 号溝跡出土遺物実測図 (1) (SD07)	50	第 58 図	第 1 号方形周溝墓実測図 (2) (SZ01)	68
第 46 図	第 7 号溝跡出土遺物実測図 (2) (SD07)	51	第 59 図	第 1 号方形周溝墓実測図 (3)	69
第 47 図	第 7 号溝跡出土遺物実測図 (3) (SD07)	52	第 60 図	第 1 号方形周溝墓微細図 (SZ01)	69
第 48 図	第 7 号溝跡出土遺物実測図 (4) (SD07)	53	第 61 図	第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図 (1) (SZ01)	70
第 49 図	第 7 号溝跡出土遺物実測図 (5) (SD07)	54	第 62 図	第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図 (2) (SZ01)	71
第 50 図	第 7 号溝跡出土遺物実測図 (6) (SD07)	55	第 63 図	第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図 (3) (SZ01)	72
第 51 図	第 9・11 号溝跡実測図 (SD09・SD011)	60	第 64 図	第 1 号古墳遺物分布図 (SS01)	74
第 52 図	第 10 号溝跡実測図 (SD10)	61	第 65 図	第 1 号古墳出土遺物実測図 (1) (SS01)	75
第 53 図	第 10 号溝跡出土遺物実測図 (SD10)	62	第 66 図	第 1 号古墳出土遺物実測図 (2) (SS01)	76
第 54 図	第 1～3 号土坑実測図 (SK01・SK02・SK03)	64	第 67 図	第 1 号火葬墓実測図 (FP01)	77
第 55 図	第 3 号土坑出土遺物実測図 (SK03)	64	第 68 図	第 1・2 号ピット実測図 (P01・P02)	78
第 56 図	第 1 号井戸跡実測図 (SE01)	65	第 69 図	遺構外出土遺物実測図	79
第 57 図	第 1 号方形周溝墓実測図 (1)・ 遺物分布図 (SZ01)	67	第 70 図	時代別遺構図	85

挿表目次

第 1 表	南原遺跡周辺遺跡の概要	5	第 12 表	第 3 号溝跡出土遺物観察表	42
第 2 表	第 1 号住居跡出土遺物観察表	19	第 13 表	第 4 号溝跡出土遺物観察表	43
第 3 表	第 2 号住居跡出土遺物観察表	21	第 14 表	第 5 号溝跡出土遺物観察表	45
第 4 表	第 3 号住居跡出土遺物観察表	22	第 15 表	第 7 号溝跡出土遺物観察表	56
第 5 表	第 4 号住居跡出土遺物観察表	26	第 16 表	第 10 号溝跡出土遺物観察表	62
第 6 表	第 5 号住居跡出土遺物観察表	30	第 17 表	第 3 号土坑出土遺物観察表	64
第 7 表	第 6 号住居跡出土遺物観察表	33	第 18 表	第 1 号方形周溝墓出土遺物観察表	72
第 8 表	第 7 号住居跡出土遺物観察表	35	第 19 表	第 1 号古墳出土遺物観察表	77
第 9 表	第 8 号住居跡出土遺物観察表	36	第 20 表	遺構外出土遺物観察表	79
第 10 表	第 1 号溝跡出土遺物観察表	41	第 21 表	遺物集計表	80
第 11 表	第 2 号溝跡出土遺物観察表	41			

図版目次

図版1

- 1 遺跡遠景
- 2 遺跡全景

図版2

- 1 第1号住居跡全景（南西より）
- 2 第1号住居跡炉遺物出土状況（南より）
- 3 第1号住居跡ピット①遺物出土状況（東より）
- 4 第2号住居跡全景（北西より）
- 5 第2号住居跡炉（南より）
- 6 第3号住居跡全景（南西より）
- 7 第3号住居跡炉遺物出土状況（南東より）
- 8 第4号住居跡全景（A区南西より）

図版3

- 1 第4号住居跡全景（B区南東より）
- 2 第4号住居跡炉（南より）
- 3 第5号住居跡全景（北西より）
- 4 第5号住居跡掘り方遺物出土状況（南東より）
- 5 第5号住居跡焼土・炭化物（北西より）
- 6 第6号住居跡全景（南西より）
- 7 第6号住居跡粘土塊（南西より）
- 8 第6号住居跡粘土塊・遺物出土状況（北東より）

図版4

- 1 第7号住居跡全景（北西より）
- 2 第7号住居跡掘り方遺物出土状況（北東より）
- 3 第8号住居跡全景（南西より）
- 4 第1・5・6・10号溝跡全景（西より）
- 5 第1・5・6・10号溝跡全景（南西より）
- 6 第5号溝跡全景（南より）
- 7 第5号溝跡全景（北西より）
- 8 第10号溝跡遺物出土状況（東より）

図版5

- 1 第2・3・4号溝跡全景（南西より）

- 2 第4号溝跡遺物出土状況（東より）

- 3 第7号溝跡全景（A区北より）

- 4 第7号溝跡全景（B区東より）

- 5 第7号溝跡遺物出土状況（東より）

- 6 第7号溝跡遺物出土状況（東より）

- 7 第7号溝跡遺物出土状況（人物埴輪の腕）（北東より）

- 8 第1号土坑全景（南より）

図版6

- 1 第2号土坑全景（南より）

- 2 第3号土坑全景（東より）

- 3 第3号土坑遺物出土状況（B区北東より）

- 4 第1号井戸跡全景（A区西より）

- 5 第1号方形周溝墓全景（A区西より）

- 6 第1号方形周溝墓全景（B区東より）

- 7 第1号方形周溝墓全景（B区北東より）

- 8 第1号方形周溝墓全景（B区北より）

図版7

- 1 第1号方形周溝墓周溝くびれ部（北より）

- 2 第1号方形周溝墓遺物出土状況（勾玉）（東より）

- 3 第1号方形周溝墓遺物出土状況（A区南から）

- 4 第1号方形周溝墓遺物出土状況（A区北から）

- 5 第1号古墳遺物出土状況（西より）

- 6 第1号火葬墓全景（B区東より）

- 7 第1号ピット全景（南より）

図版8

- 第1号住居跡出土遺物

- 第2号住居跡出土遺物

- 第3号住居跡出土遺物

- 第4号住居跡出土遺物

図版9

- 第5号住居跡出土遺物

第6号住居跡出土遺物

図版 10

第7号住居跡出土遺物

第8号住居跡出土遺物

第1号溝跡出土遺物

第2号溝跡出土遺物

第3号溝跡出土遺物

図版 11

第4号溝跡出土遺物

第5号溝跡出土遺物

第7号溝跡出土遺物 (1)

図版 12

第7号溝跡出土遺物 (2)

図版 13

第7号溝跡出土遺物 (3)

図版 14

第7号溝跡出土遺物 (4)

第10号溝跡出土遺物

図版 15

第3号土坑出土遺物

第1号方形周溝墓出土遺物 (1)

図版 16

第1号方形周溝墓出土遺物 (2)

図版 17

第1号古墳出土遺物 (1)

図版 18

第1号古墳出土遺物 (2)

遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成24年9月、株式会社アーネストワン（以下「事業者」という）から戸田市教育委員会（以下「市教育委員会」という）に対し、戸市南町2314-1,2における1,655.00㎡の宅地造成および戸建分譲住宅建設事業計画と埋蔵文化財の取扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地（南原遺跡）およびその周辺地域内に所在しており、開発工事中に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するよう指導した。

これを受け、平成24年11月22日に事業者から市教育委員会に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教育委員会が平成24年12月17日・18日の2日間で実施し、古墳時代前期から後期の周溝状遺構、堅穴住居、古墳周溝、土坑、ピットとこれに伴う土師器、埴輪を確認した。

この調査結果に基づき、埋蔵文化財の検出範囲で周知の埋蔵文化財包蔵地外に所在する箇所については、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更・増補を行い、平成25年1月28日付戸教生第1000号にて埼玉県教育委員会（以下「県教育委員会」という）あてに報告し、遺跡分布地図、遺跡台帳への登載依頼を行った。

また、事業者、市教育委員会間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、開発工事により埋蔵文化財の破壊を免れない部分（1,527.00㎡）については記録保存のための緊急発掘調査、試掘確認調査で埋蔵文化財を検出していない部分（128.00㎡）については慎重工事の措置を実施することで合意した。

平成24年11月22日、事業者から文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成25年1月28日付戸教生第1002号にて県教育委員会あてに進達した。

文化財保護法第93条の届出を受けて、県教育委員会から事業者に対し、平成25年3月7日付教生文第4-1458号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

発掘調査の実施にあたり、事業者は市教育委員会に対し、平成25年3月12日付で発掘調査の依頼書を提出した。また、平成25年3月21日付戸教生第1173号にて二者による「戸建分譲住宅建設事業予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、文化財保護法第99条の規定に基づき、市教育委員会から県教育委員会あてに平成25年3月18日付戸教生第1157号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、南原遺跡第12次発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

1. 発掘調査

南原遺跡第12次調査は、平成25年4月2日から6月29日まで実施した。調査面積は1,527.00㎡である。調査で生じた排出土は調査区内に仮置きする必要があったため、まず調査区の東側半分

(A区)を調査し、後に反転して残りの西側半分(B区)を調査するという方法を採用した。

調査に先立ち、4月2日に調査区の設定と現場事務所となるユニットハウス、仮設トイレ、囲柵の設置を行った。翌3日は激しい降雨のため発掘器材の搬入のみを行った。晴天となった4月4日から重機を用いた表土掘削を開始した。表土掘削は調査区の北東隅から着手した。4月5日からは表土掘削と並行して、重機で遺構確認を始めて掘削し終えた場所から順に作業員を投入し、人力による遺構確認を開始した。4月9日に遺構検出状況の写真を撮影した後、調査区北東隅の第1号井戸跡から遺構の調査に着手した。その後は主に溝跡の調査を進めた。A区の西側で検出した溝跡は、その平面形と出土する遺物から、方形周溝墓の周溝跡と認識して調査を進めた(=第1号方形周溝墓)。また、4月4日の遺構確認中に検出した人物埴輪の頭部片や、第5号溝跡より浅い位置から出土した鳥形埴輪、第7号溝跡の北東部外周に沿って集中的に流れ込んでいた大量の埴輪片の状態から、埴輪は現存せず周溝の痕跡も不明確ではあるものの、ここに古墳が存在したものと判断した(=第1号古墳)。4月15日からは、それらの溝跡と重複する第1～4号住居跡の調査にも着手した。5月11日には現地説明会を開催し、市内外からの見学者100名に対して調査成果の説明を行った。また、5月17日に調査区の隣接地で火災が発生し、調査参加者中の数名が人命救助に加わった。5月23日まではA区の調査範囲内における全ての遺構の調査を完了し、反転して、重機で埋め戻しを行いながら西半B区の調査範囲の表土掘削を開始した。

B区も同様に、表土掘削と並行して人力による遺構確認を進めた。遺構の調査は5月31日に検出した第5号住居跡、第1号火葬墓から着手し、順次精査を進めた。6月5日に第1号方形周溝墓南西隅の周溝内から遺物の集中箇所を検出した。6月14日に実機ヘリを用いた空撮で調査区遠景写真を撮影した。6月18日には、第1号方形周溝墓の北西溝に接する位置にある第3号土坑の覆土上層から、ほぼ完形の土師器の甕を検出した。また主要な遺構の調査が完了していたため、ラジコンヘリを用いた空撮で調査区全景写真を撮影した。6月19日以降に調査した遺構については、ボールを用いた垂直撮影を行い、これを空撮での調査区全景写真に合成した。6月26日には残る全ての遺構の調査を完了し、基本層序を確認した。6月27日に調査区を埋め戻し、6月28日に囲柵を撤去、器材等の搬出を行い、6月29日にはユニットハウスと仮設トイレを撤去し、現地調査を全て完了した。

2. 整理作業

整理作業は平成25年7月3日より開始した。出土遺物については、7月3日より洗浄・註記を開始し、その後接合を行った。9月17日より報告書掲載遺物の抽出を行い、遺物実測図の作成を開始した。遺物実測終了後、観察表の作成と実測図のデジタルトレースを行った。検出遺構については、7月9日より遺構原図のデジタルトレースと、光波測定器の測定データや写真測量データを用いた各種遺構図版の作成を開始した。平成27年1月13日から掲載遺物の写真撮影を行い、8月17日より報告書レイアウトを開始した。報告書作成にはAdobe Photoshop、Adobe Illustrator、Adobe InDesignを用い、INDD形式ファイルにて入稿した。

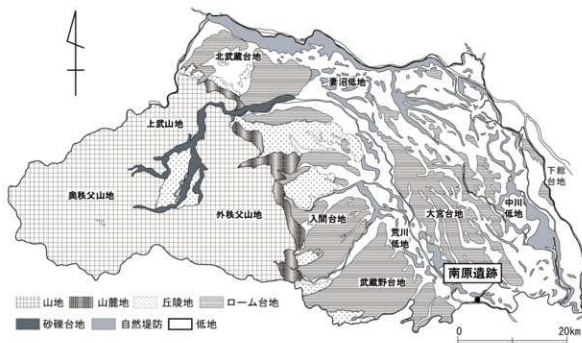
第2章 周辺環境と調査の概要

第1節 地理的環境

南原遺跡が所在する戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0km、面積18.17㎓の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市と川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市と和光市、南の東京都板橋区と北区には荒川を隔てて接している。市域には国道17号線(中山道)や新大宮バイパスが南北に走り、また首都高速5号線や東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により、交通の利便性が高まり急激な市街地化が進んでいる。また、都心に近い立地のため、工場や流通センターなども数多く所在する。

戸田市の地形は、埼玉県西部の山地に端を発する荒川によって形成された平坦な沖積低地(荒川低地)が全域を占める。荒川の氾濫や流路の変更によって、市域中央部の西から東にかけて自然堤防が形成されている。この自然堤防は荒川旧河道に沿うように発達し、戸田市域では美女木から笹目を通り、本町、上戸田を抜けて川口市へと断続的に延びている。

南原遺跡は、JR埼京線戸田公園駅から南西約500mの戸田市南町を中心に広がる遺跡である。遺跡の南側には戸田漕艇場が所在し、その約500m南には荒川が東流する。遺跡周辺は、昔から「高知原」と呼ばれ、遺跡の所在が確認された当時は戸田市域の中でも比較的起伏の見られる高所であったと言われている。遺跡の北側には、治水のために掘られた菖蒲川が東流するが、この周辺にはかつて「菖蒲沼」と呼ばれた低湿地が広がっていた。この低湿地は長年に渡り水田として利用されていたが、現在は土地区画整理に伴う埋め立てや整地が行われ、倉庫や工場、住宅などが立ち並ぶ平坦な市街地となっている。



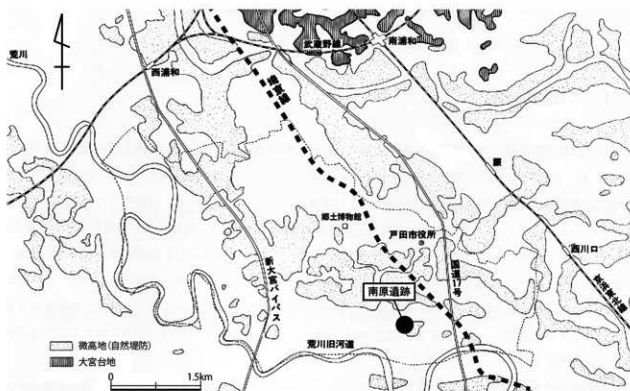
第1図 埼玉県の地形

過去の発掘調査では、遺跡の南東部に南西―北東方向に流れた旧河道（支流）が確認されており、遺跡が立地する微高地を東西に分断していることがわかっている。今回の調査地は西半分が新たに南原遺跡に加えられた範囲であり、南原遺跡の南西端に所在している。また本調査区では地山が北から南へと緩やかな傾斜で下がっており、南側ではグライ化が進んでいることから、調査区が南側の谷を臨む自然堤防の縁辺部に立地していることがわかっている。

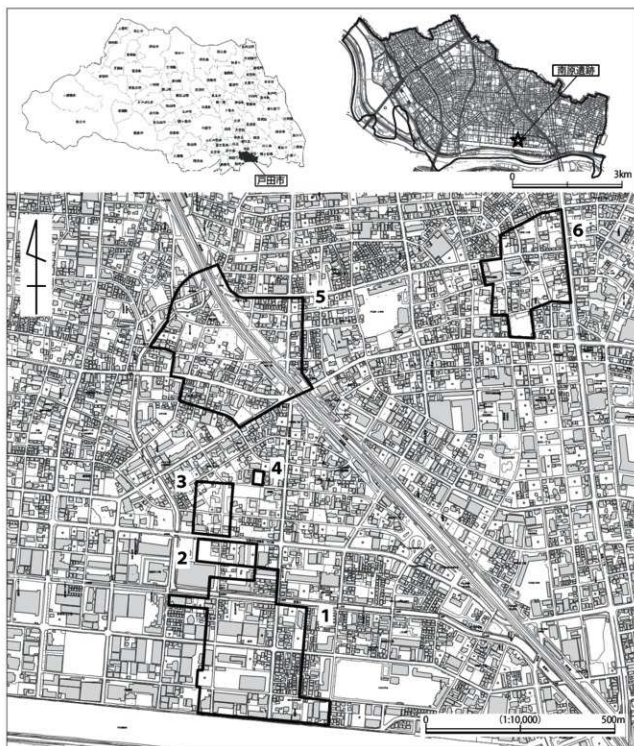
第2節 歴史的環境

戸田市では旧石器時代の遺構・遺物は確認されておらず、過去の生活の痕跡が見え始めるのは縄文時代からである。現在、縄文時代に帰属する遺跡は確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が確認されている。縄文時代前期では、堤外から前期後葉諸磯a式の破片資料1点が出土しており、本町からは前期末十三菩提式深鉢形土器の大型破片1点が出土している。縄文時代中期では、中葉から後葉にかけての遺物が出土している。鍛冶谷・新田口遺跡では勝坂式や加曾利E式の破片資料の出土が報告されており、南原遺跡でも阿玉台式や加曾利E式期の土器片が微量ながら検出されている。縄文時代後期は、前葉から中葉にかけての遺物が検出されている。鍛冶谷・新田口遺跡では堀之内式、加曾利B式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器破片が出土している。

縄文時代後期後葉から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期から古墳時代前期になると、戸田市域の自然堤防上に多くの遺跡が形成されるようになる。弥生時代後期から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡、



第2図 戸田市域の地形



第3図 南原遺跡及び周辺の遺跡位置図

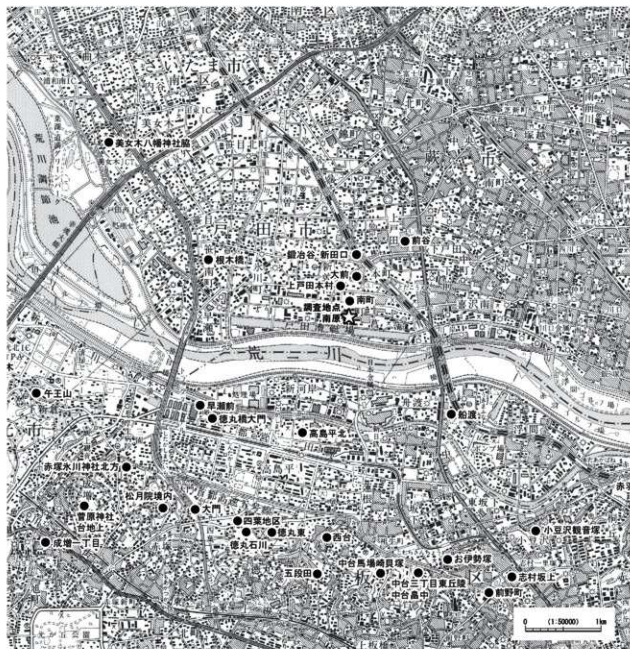
第1表 南原遺跡周辺遺跡の概要

NO.	遺跡名	所在地	種別	主な時代	立地
1	南原遺跡	伊田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前/後期・奈良・平安・鎌倉	自然埋没
2	南町遺跡	伊田市南町	集落跡	古墳前期	自然埋没
3	土戸日本村遺跡	伊田市本町3丁目	集落跡・円墳	古墳後期	自然埋没
4	大前遺跡	伊田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	自然埋没
5	網舌谷・新田口遺跡	伊田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新野	集落跡	弥生後期・古墳前期	自然埋没
6	前谷遺跡	伊田市上戸田2丁目	集落跡・城跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	自然埋没

根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や集落跡が検出され、弥生時代から古墳時代に低地に形成された稀有な集落遺跡として、昭和51年に埼玉県選定重要遺跡に選定されている。上戸田本村遺跡では、2次・3次調査において環濠と思われる溝状遺構と、溝の東部に密集する竪穴住居跡群を検出しているため、遺跡周辺に当該期の環濠集落が所在した可能性が高い。

古墳時代中期の遺構・遺物が検出された遺跡は少なく、南原遺跡2次調査B区で竪穴住居跡3軒、9次調査で井戸跡1基、10次調査で竪穴住居跡1軒と土坑2基が確認されたのみである。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内にはかつて「くまん塚」と呼ばれた古墳が所在した。「くまん塚」は円墳で、墳丘の盛土が僅



第4図 南原遺跡周辺遺跡位置図

かに残存していたとされ、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀2振が出土したと言われている。また、上戸田本村遺跡では1次調査において鬼高式期の住居跡2軒、4次調査において馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基（上戸田本村1号墳）検出され、南原遺跡では1・2次調査A区で円墳2基（南原1・2号墳）、3次調査D区で鬼高式期の住居跡1軒と屋外竈1基、4次調査F区で円墳2基（南原3・4号墳）、6次調査で円墳1基（南原5号墳）、8・9次調査で円墳2基（南原6・7号墳）が検出されている。なお、過去の調査で確認されている埴輪を伴う古墳は、上戸田本村1号墳、南原1号墳、南原7号墳であり、人物埴輪、馬形埴輪、家形埴輪、靴形埴輪、円筒埴輪が出土している。

平安時代では、南原遺跡や鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、ピット列等が検出されている。前谷遺跡では2・4次調査において瓦塔片が出土しており、9世紀頃に調査区周辺に仏堂施設を有する集落が存在していた可能性が指摘されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部の地域がかつての佐々日郷（篠目・笹目）に該当し、鎌倉鶴岡八幡宮の社領であったことが文献史料からわかっている。当該期では、大前遺跡や前谷遺跡、上戸田本村遺跡、南原遺跡、南町遺跡、美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡や溝状遺構、井戸跡が検出されている。前谷遺跡や南原遺跡、上戸田本村遺跡からは断面が葉研形の溝状遺構が検出されていることから、『新編武蔵風土記稿』の桃井播磨守の居城であったとされる「戸田の御所」との関連が指摘されるが、未だその明確な位置や検出された遺構との関係性については明らかになっていない。

近世は、戸田市域の大半の村々が幕府の直轄領であり、徳川家の鷹場として使用されていたことがわかっている。また、江戸五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡るための「戸田の渡し」が板橋宿と蔵宿を結ぶ交通の要衝として機能していたことが文献史料からわかっている。

第3節 遺跡・調査の概要

南原遺跡は、本調査を含めてこれまでに13回に渡る発掘調査が行われ、弥生時代後期後半から近世に渡る複合遺跡であることがわかっている。この中でも遺跡が形成された中心時期は、弥生時代後期後半から古墳時代前期、古墳時代後期の2つの時期である。特に、古墳時代後期では遺跡の西側に群集墳が築造され、小規模な円墳が合計8基検出されている。

第1次調査は、倉庫建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が昭和44年7月26日から8月4日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代後期の古墳周溝1基（南原1号墳）、中世の溝跡2条を検出した。周溝状遺構からは底部穿孔がなされた壺形土器などが出土しており、「攪乱」と報告がなされているが周溝内側に楕円形の窪みが確認されている。また、古墳周溝からは、鴻巣市生田塚輪窯で製作されたものと考えられる人物埴輪や靴形埴輪、円筒埴輪が出土し、戸田市における初めての埴輪出土事例として近隣住民の注目を集めた。

第2次調査は、戸田市教育委員会が昭和45年7月25日から8月5日までの期間で実施した。調査区は、第1次調査区の南方を拡張したA区、第1次調査区の南東にB区の2区が設定された。A区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構4基、竪穴住居跡5軒、第1次調査で検出し

た古墳周溝の続きを含め古墳周溝2基が検出された。竪穴住居跡5軒のうち2軒からは炭化材や焼土が広範囲から検出されているため、焼失住居であった可能性が考えられている。第1次調査で検出した古墳周溝（南原1号墳）の延長部からの遺物の出土はなかったが、第1号円形周溝墓（南原2号墳）からは鬼高式期の甕形土器が覆土中から2点、周溝周辺からは管玉1点と赤彩された土師器杯が並べて設置された状態で2点出土した。B区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代中期の竪穴住居跡3軒が検出された。竪穴住居跡からは和泉式期の台付甕形土器、高環形土器が出土している。なお、2次調査B区は第8次調査、第9次調査において再調査が行われている。

第3次調査は、下水道工事事務所の資材置場建設工事に伴う緊急発掘調査としてD区、今後の宅地化に先立つ事前調査としてE区の2区に渡り、戸田市教育委員会が昭和47年2月14日から2月23日までの期間で実施した。D区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代後期の竈をもつ竪穴住居跡1軒と屋外竈1基を検出した。周溝状遺構からは小型埴形土器や頸部に突帯を有する壺形土器などが出土している。また、竪穴住居跡、屋外竈からは土師器杯や輪羽口が出土している。E区からは、ピット列3列と土坑23基が検出された。これらの遺構の性格は不明であるが、第3・4・16・17号土坑からは平安時代の須恵器杯が出土している。

第4次調査は、昭和47年に戸田市教育委員会によって実施された。調査区からは古墳周溝2基（南原3号墳・4号墳）と薬研堀の溝跡1条が検出された。

第5次調査は、平成元年6月26日から9月7日までの期間で、戸田市遺跡調査会が実施した。調査区からは、古墳時代前期の竪穴住居跡11軒、土坑1基、周溝状遺構の可能性のある溝跡1条、中世の堀跡3条、その他時期不明の土坑1基、井戸跡1基、溝跡5条、ピット群3群が検出された。竪穴住居跡11軒のうち3軒からは、床面から多量の炭化物が検出されているため、焼失住居であった可能性が考えられている。また、周溝状遺構の可能性のある溝跡からはガラス小玉が出土している。中世の堀跡は薬研状の断面形状を呈する。常滑産の甕や東播産の甕・壺などが出土していることから、13世紀後半から14世紀に帰属するものであると考えられている。

第6次調査は、倉庫建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市遺跡調査会が平成4年6月24日から8月24日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、竪穴住居跡8軒、古墳時代後期の古墳周溝1基（南原5号墳）、中世の溝跡1条、堀跡2条が検出された。検出された竪穴住居跡のうち、3軒は焼失住居である。第2号住居からは赤彩された小型埴形土器が4点出土しており、第3号住居からは頸部に突帯を有する壺形土器が出土している。また、古墳周溝からは1,200点以上の土器片が大量に出土した。

第7次調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市遺跡調査会が平成15年11月10日から平成15年12月30日までの期間で実施したが、調査成果の詳細は未報告である。

第8次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成20年3月28日から同年7月31日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡80基以上、大型方形周溝墓1基、周溝状遺構7基以上、古墳時代後期の古墳周溝2基などが検出された。このうち、SZ1（南原7号墳）からは人物埴輪、馬形埴輪、円筒埴輪が出土しており、資料の一部を報告している。

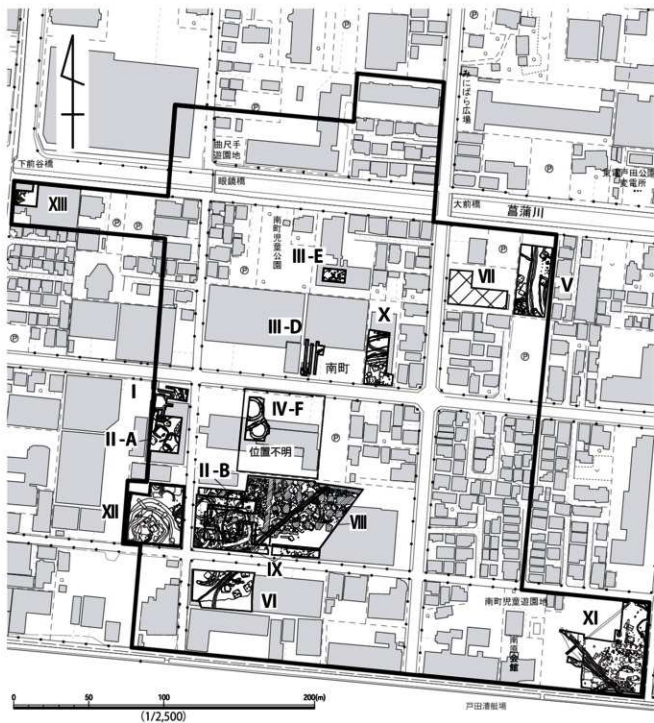
第9次調査は、工場建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成21年7月6日から9月30日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡28軒、周溝状遺構12基、大型方形周溝墓1基（8次調査検出のものと同じ）、古墳時代前期から中期の溝跡13条、井戸跡3基、古墳時代後期の古墳周溝2基、中世以降の溝跡4条などが検出された。古墳周溝は、8次調査で検出した古墳周溝2基の続き部分が検出され、1号墳（南原6号墳）からは須恵器楕円椀や壺形土器、2号墳（南原7号墳）からは人物埴輪、馬形埴輪（8次調査出土資料と同一個体）、家形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土した。

第10次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が平成23年10月1日から11月30日までの期間で実施した。調査区からは古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、土坑2基、平安時代の竪穴住居跡2軒、土坑3基、溝跡1条、中近世の掘立柱建物跡1棟、土坑3基、井戸跡5基、溝跡10条、ピット66基が検出された。古墳時代中期の竪穴住居跡では、壁溝周辺からまとまって高環形土器が6点出土した。また、平安時代の竪穴住居跡、土坑からは9世紀前半の須恵器が出土した。

第11次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成24年9月3日から10月31日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構3基、溝跡1条、平安時代から中世の掘立柱建物跡6棟、柵列跡4列、井戸跡8基、溝跡6条、土坑31基、ピット273基、近世以降の溝跡2条を検出した。出土遺物は少なかったが、検出された周溝状遺構3基は全てが南東方向に開口部を持つなどの規則性を有している。また、井戸跡からは、13世紀から14世紀を中心とした常滑産の陶器や中国磁器などが出土した。

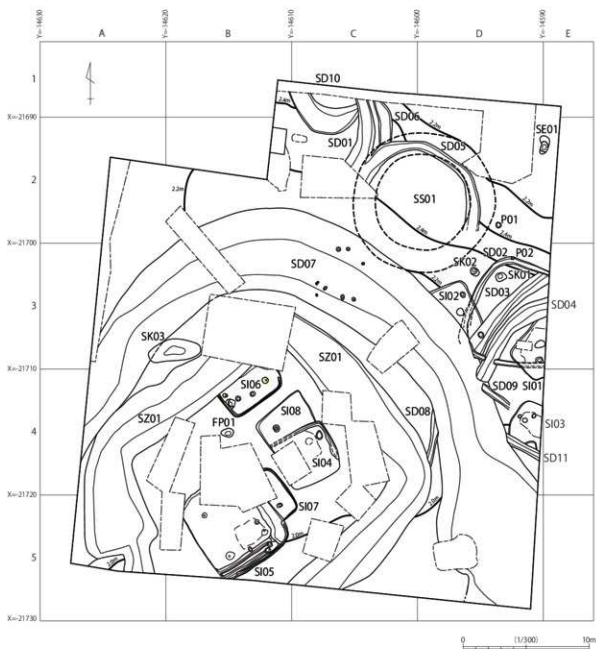
第13次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成26年8月20日から9月6日までの期間で実施した。調査区からは、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒、周溝状遺構3基、ピット6基を検出した。第1号住居跡は焼失住居であり、大型の炭化材が放射状に倒れ込んだ状態で検出された。

本調査は、第12次目の発掘調査となる。調査区からは古墳時代前期の竪穴住居跡8軒、溝跡6条、土坑2基、方形周溝墓1基、古墳時代後期の円墳1基、平安時代の溝跡5条、火葬墓1基を検出した。この他に時期は不明だが、土坑1基、井戸跡1基、ピット2基がある。また、これらの遺構に伴い、土師器、須恵器、陶器、勾玉、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土した。

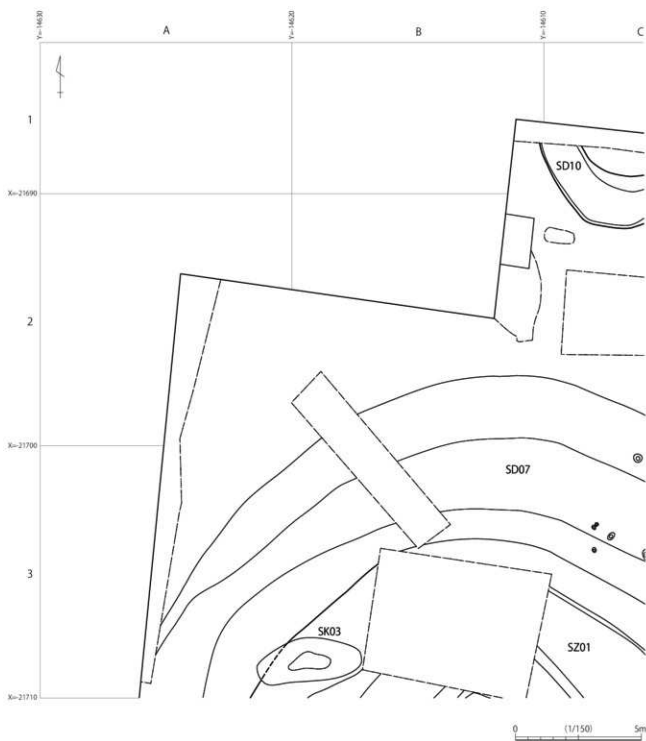


- | | |
|-------------------------------------|---|
| I 第1次調査(1969)：戸田市教育委員会調査（塩野 1969） | VII 第8次調査(2008)：戸田市教育委員会調査（岩井ほか2015） |
| II 第2次調査(1970)：戸田市教育委員会調査（塩野 1972） | IX 第9次調査(2009)：戸田市教育委員会調査（早田ほか 2010） |
| III 第3次調査(1972)：戸田市教育委員会調査（塩野 1972） | X 第10次調査(2011)：財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（赤橋 2012） |
| IV 第4次調査(1972)：戸田市教育委員会調査（塩野 1981） | XI 第11次調査(2012)：戸田市教育委員会調査（岩井ほか 2013） |
| V 第5次調査(1989)：戸田市道跡調査会調査（小島 1991） | XII 第12次調査(2013)：戸田市教育委員会調査（本報告） |
| VI 第6次調査(1992)：戸田市道跡調査会調査（小島 1996） | XIII 第13次調査(2014)：戸田市教育委員会調査（岩井ほか 2015） |
| VII 第7次調査(2003)：戸田市道跡調査会調査（未報告） | |

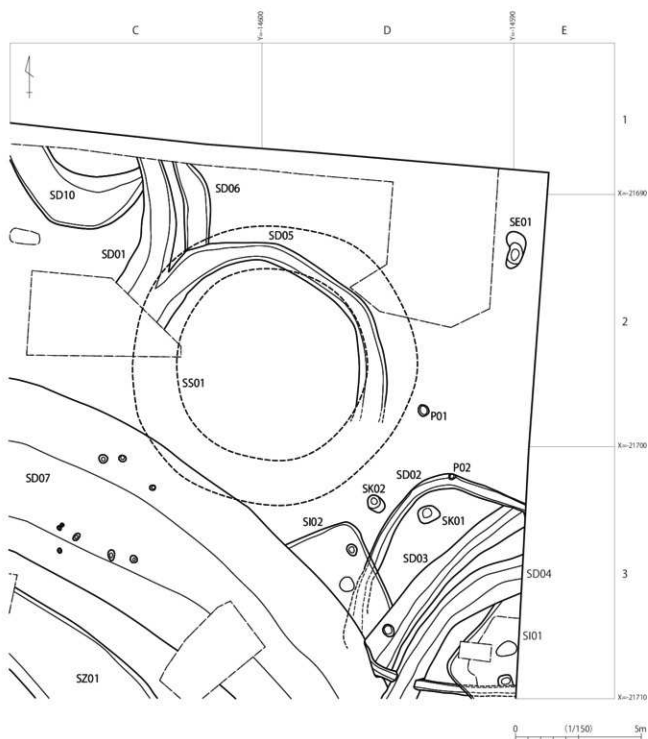
第5図 南原遺跡調査区位置図



第 6 图 南原遺跡調査区域全体図・等高線図



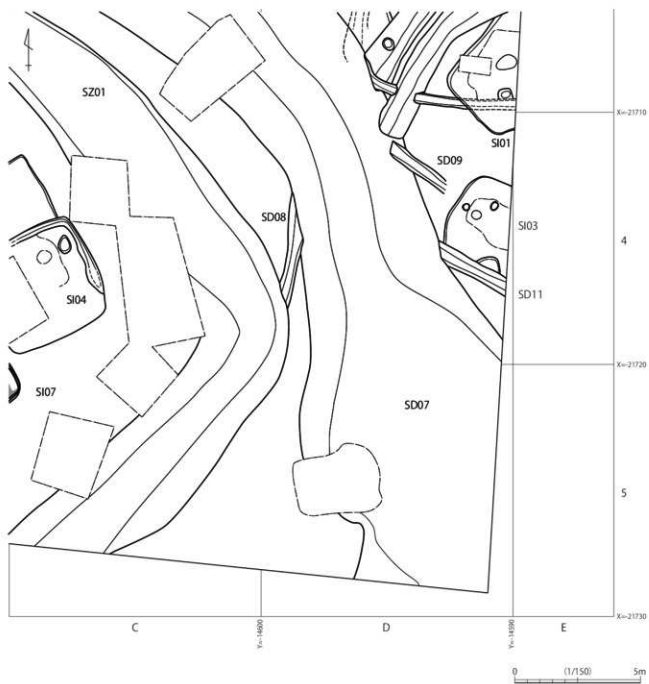
第7図 遺構調査全体図①



第8図 遺構調査全体図②



第9図 遺構調査全体図③



第 10 図 遺構調査全体図 ④

第4節 基本層序

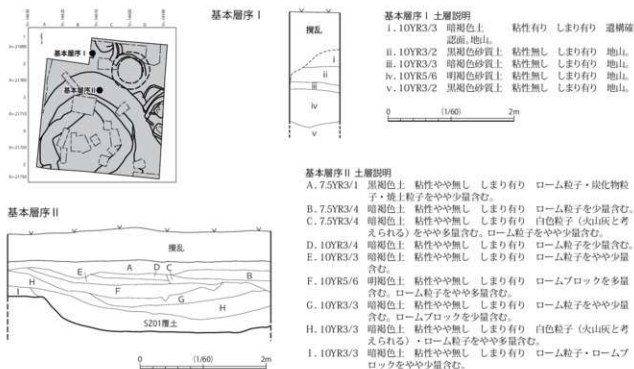
今回の調査地点は自然堤防から谷へと向かう場所に位置している。そのため、調査地点内の層序は場所により若干の違いが見られる。即ち、自然堤防上の調査区北側及び中央部と谷部にあたる南側とである。

谷部にあたる南側では、確認面は暗褐色土やグライ化し青灰色から緑灰色を呈していた。調査区南西端では遺構覆土自体もグライ化しており、遺構の立ち上がりを明確にできなかった。また、土層のグライ化は、第1号方形周溝墓の底面でも同様であり、確認面から1m以上にわたり認められ、分層できなかった。

以下では第11図に示した調査区北側及び中央付近の2箇所で確認した基本層序をもとに、今回の調査地点の概要を述べる。

北側にはぶい黄褐色の粘質土を確認面としたが、それより上は攪乱が激しく、遺構の起源となる土をプライマリーで確認することはできなかった。ただし、調査区中央付近では、底面で9世紀後半の遺物が出土している第7号溝跡や第1号方形周溝墓の上層で検出された土層が広く認められた。これらの土層は基本層序IIに見るように第7号溝跡のレンズ状の自然堆積層とは不連続な堆積を示している。このことからA～H層は後世に堆積した層であると判断した。その中で、F層はロームブロックを主体とすることから人為的な堆積（客土）であろう。色調や夾雑物からD・Eも同様と思われる。また、C・H層は火山灰状の白色粒子を含む。肉眼観察と第7号溝跡出土の土器とをあわせるると浅間A・B軽石を起源としたものと思われる。

最後にD・E・Fを除いた層の起源についてであるが、概ね小規模な洪水などで堆積した土と思われる。



第11図 基本層序

第3章 検出された遺構・遺物

第1節 住居

第1号住居跡—SI01

遺構（第12・13図 図版2-1～3）

位置：D・E-3・4グリッドに位置する。東側半分は調査区外に続く。重複関係：北東隅付近で第4号溝跡と南西辺で第2号溝跡と重複する。第4号溝跡より古く、第2号溝跡より新しい。長軸方位：長軸方位はN-44°-Eである。規模・形状：長軸4.23m以上、短軸3.48m、深さは0.09mと極めて浅い。平面形は隅丸長方形を呈するが、南北辺は調査区東端では外側に開き気味になることから、やや台形状になるものと思われる。床面は若干起伏が見られる。壁は西壁及び南壁では垂直に立ち上がる。北壁は若干緩やかに立ち上がる。壁溝は認められなかった。床面は硬化していない。覆土：単層である。人為的か自然堆積かは不明。

備考：炉は調査区際で検出され、平面形はやや楕円形を呈する。長軸0.84m、短軸0.55m、深さは0.06mで断面は皿状を呈する。掘り込みは浅く僅かに焼土粒子が炉内から出土したのみで、炉底は赤化していなかった。

ピットは3基検出された。P①とP②は接するように築かれているが、重複は認められない。P①とP③はP②に比べやや大きく径は0.63mである。底面は共に平坦で、自然堆積を示す。柱痕跡は見られないが、位置から考えて、柱穴と思われる。P①が北西壁に接して築かれることから、やや不整な4本柱の住居跡と思われる。

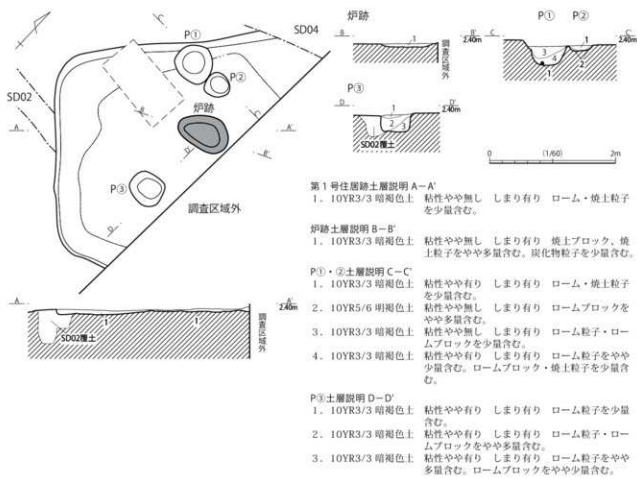
遺物（第14図 第2表 図版8）

出土状況：遺物は覆土中及び、炉跡・ピットから出土している。1はP①の底面から横倒して出土した。完形に近いことから、埋納の可能性もある。

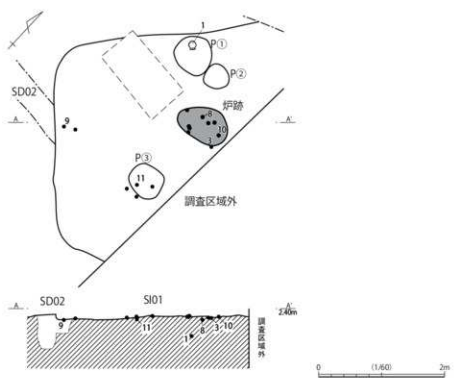
3・8・10は炉跡の底面から出土しているが、被熱していないことから住居廃絶に伴い遺棄されたものと思われる。同様に11はP③の上層より出土しており、ピット覆土に柱の根腐痕が確認できないことから、住居廃絶後に遺棄されたものと思われる。図示した遺物はいずれも古墳時代前期の土師器である。1は胴部と口縁部に黒斑が残る。2は文様はないが東海地方に出自をもつパレス壺の口縁部である。3は折り返し口縁の壺、4・5はおそらく台が付く甕。6は元屋敷系の高坏。7は鉢、9は小型の壺。8・11は器台。10は高坏である。

時期

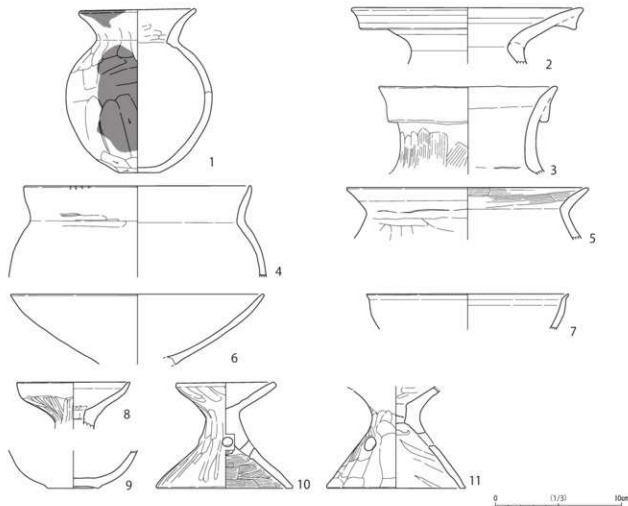
出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第12図 第1号住居跡実測図 (SI01)



第13図 第1号住居跡遺物分布図 (SI01)



第14図 第1号住居跡出土遺物実測図 (SI01)

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

探検番号 図版番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (推定) 口径 (cm)	底径 (推定) 底径 (cm)	器高 (推定) 器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
14-1 8-SI01-1	土師器	甕	95	9.3	3.2	13.0	口縁部内面及び外面ハケ調整後、ナデ。	白色粒子・赤色粒子・石英	良好	褐色 (5YR5/6)	古墳前
14-2 8-SI01-2	土師器	甕	5以下	18.4	—	4.4	全体的に着風が激しい。内外面強く腐ナデしたと思われる。所謂ハレス歯の口縁部。	赤色粒子・石灰・砂粒	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
14-3 8-SI01-3	土師器	甕	5以下	14.2	—	6.7	頸部外面腐ハケ。折り返し口縁部横ナデ。内面輪轆痕を残す。	白色粒子・黒色粒子・石英・長石・シャモット	良好	明黄褐色 (10YR5/6)	古墳前
14-4 8-SI01-4	土師器	甕	7以下	18.1	—	7.2	口縁部キザミ。内外面横ナデされる。	白色粒子・長石・シャモット	良好	にぶい褐色 (5YR5/4)	古墳前
14-5 8-SI01-5	土師器	甕	6以下	19.2	—	4.1	外面ハケ調整後、屈面部を横ナデ。内面横ハケ後、ナデ。	白色粒子・長石	良好	灰黄褐色 (10YR4/2)	古墳前
14-6 8-SI01-6	土師器	高杯	15	20.2	—	5.5	内外面磨面が激しい。元尻敷系高杯の形。	黒色粒子・赤色粒子・砂粒	良好	褐色 (7.5YR7/6)	古墳前
14-7 8-SI01-7	土師器	鉢	5以下	16.0	—	2.8	内外面ナデ。	白色粒子・長石・小礫	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
14-8 8-SI01-8	土師器	甕台	30	9.0	—	3.7	甕台の受け部、外面縦ミガキ。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	古墳前
14-9 8-SI01-9	土師器	甕	10	—	4.0	3.0	内外面斜位のナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
14-10 8-SI01-10	土師器	高杯	60	8.0	10.8	8.3	受け部外面ハケ調整後、縦ミガキ。内面ナデ。脚部外面縦ミガキ。透かし孔は円形で等間隔に4孔穿たれると思われる。	黒色粒子・シャモット	良好	明赤褐色 (5YR5/6)	古墳前
14-11 8-SI01-11	土師器	甕台	90	—	11.0	8.0	脚部外面斜位のミガキ及びナデ。透かしは円形で等間隔に3孔穿たれる。	赤色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前

第2号住居跡— SI02

遺構 (第15図 図版2-4・5)

位置：D-3グリッドに位置する。重複関係：第2・3・7号溝跡と重複する。第3・7号溝跡より古く、第2号溝跡より新しい。そのため第3・7号溝跡により北西側及び南東側を大きく壊されている。長軸方位：長軸方位はN-25°-Wである。規模・形状：長軸4.71m以上、短軸2.90m以上、深さ0.41mである。平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈すると思われる。床面は若干の凹凸が認められ、底面の高さは南東から北西に向かい若干傾斜している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は認められなかった。覆土：4層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。

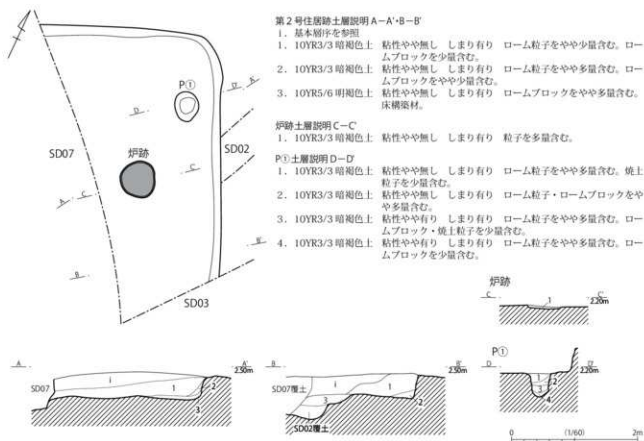
備考：炉は住居跡中央からやや東壁に寄った部分に築かれたものと思われる。平面形は略円形で径は0.58m前後である。掘り込みは浅い皿状で、覆土に焼土粒子を多量に含むが、底面はあまり赤化していなかった。北側隅付近にはピットが検出された。丸みを帯びる底面から直線的に立ち上がる。

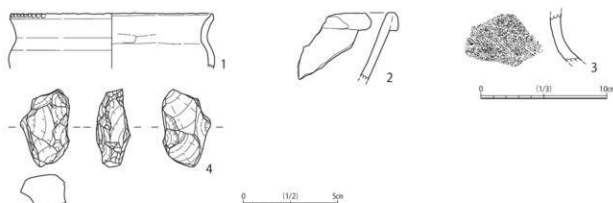
遺物 (第16図 第3表 図版8)

出土状況：遺物は覆土中から少量出土している。1は口縁部にキザミを持つ台付甕、2は口縁部が折り返される壺、3は頸部に帯縄文を持つ壺である。いずれも古墳時代前期の土師器である。4は石核状の玉類未製品である。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。





第16図 第2号住居跡出土遺物実測図 (SI02)

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表

検出番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (m)	底径 (測定底径) (m)	器高 (残存高) (m)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
16-1	土師器	甕	5以下	(18.2)	—	(4.3)	口縁部外面に棒状工具で刺突を施す。外面斜位のハケ調整後、横子打。内面横子打。	赤色粒子・小磯・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
8SI02-1	土師器	甕	5以下	—	—	(5.4)	口縁部を短く折り返す。口縁部は丸味を帯びる。内面に赤彩刷。	白色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
16-3	土師器	甕	5以下	—	—	(3.8)	頸部にR1とL1による羽状縄文を施す。R1の上端は磨端である。	黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	古墳前
8SI02-3	土師器	甕	5以下	—	—	(3.8)	頸部にR1とL1による羽状縄文を施す。R1の上端は磨端である。	黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	明黄褐色 (10YR6/6)	古墳前
16-4	玉類未製品	—	—	長さ (4.1)	幅 (2.6)	厚さ (1.7)	四隅がうちかかれ、石核状になる。	—	—	—	緑色燧石片

第3号住居跡— SI03

遺構 (第17図 図版2-6・7)

位置：D-4 グリッドに位置する。重複関係：南側で第11号溝跡と重複し、それより古い。長軸方位：長軸方位はN-61°-Wである。規模・形状：南側を第11号溝跡に壊され、東側は調査区外に続く。検出した範囲は全体の6割ほどと思われる。長軸3.25 m以上、短軸2.66 m以上、深さ0.18 mである。平面形態は隅丸方形を呈するが、各辺がやや弧を描く。床面は平坦で、北東壁は垂直に近く立ち上がり、北西壁は斜めに直線的に立ち上がる。覆土：単層である。人為的か自然堆積かは不明。

備考：炉は住居中央からやや北西壁に寄ったところに位置している。平面形は直径約0.36 mの円形で、浅い皿状を呈し、深さは0.05 mである。ピットは3基検出された。P①・②は炉付近で検出され、平面形状から柱穴と思われるが非常に浅い。P②は対になるピットは検出されなかったが、主柱穴の1本と思われる。住居の南側に位置するP③は土坑状を呈するが、過半を第11号溝跡に壊されている。掘り込みも浅いことから、住居掘削時の掘り方の一部と思われる。

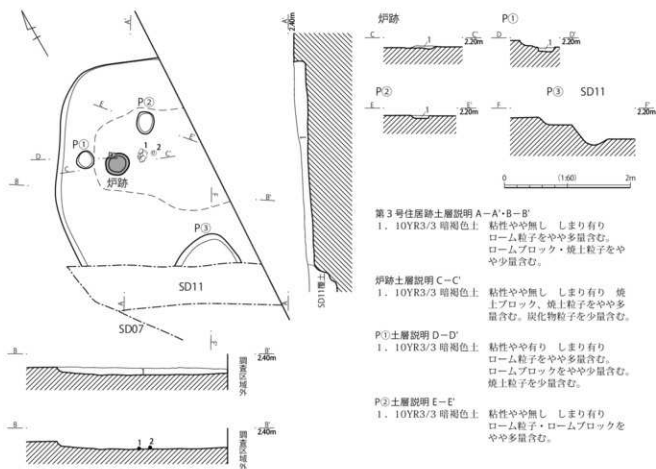
住居跡中央付近を中心に硬化面が認められた。

遺物 (第18図 第4表 図版8)

出土状況：遺物は覆土中より少量出土している。図示したものは硬化した床面上から出土している。1は口縁部にキザミを持つ台付甕、2は台付甕の脚部で、正位で出土した。いずれも古墳時代前期の土師器である。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第17図 第3号住居跡実測図 (SI03)



第18図 第3号住居跡出土遺物実測図 (SI03)

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表

採収番号	種類	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (測定底径) (cm)	底高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
18-1 8-SI03-1	土師器	(台付) 甕	50	(16.4)	—	(10.8)	口縁部に棒状工具によるキザミ目。外面頸部から胴部上平腹ハケ後、横ナデ。胴部下平肩位のナデ。内面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・小礫・シャモット	良好	灰黄褐色 (10YR5/2)	古墳前
18-2 8-SI03-2	土師器	台付甕	5以下	—	(8.8)	(6.1)	外面縦位のハケ調整、消滅しハケ目は見えない。内面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	古墳前

第4号住居跡—SI04

遺構（第19・20図 図版2-8、3-1・2）

位置：B・C-4グリッドに位置する。重複関係：北西側で第8号住居跡と重複し、それより新しい。住居中央付近から南東壁中央部分は攪乱されている。長軸方位：長軸方位はN-64°-Eである。規模・形状：長軸4.57m、短軸4.42m、深さ0.38mである。平面形態は隅丸方形を呈する。4辺はいずれも緩やかな弧を描くが、特に東辺は大きく湾曲した弧を描く。床面はやや凹凸が見られ、壁は直線的に立ち上がる。

北西壁と北東壁で壁溝が認められた。断面はU字状を呈する。北西壁は検出された西端では幅0.24mで、東側に向かい若干幅広になり、約0.31mである。北東壁はやや幅にひらきがあり、最大幅0.52m、最小幅0.24mである。北東壁に沿う壁溝は南東隅手前で途切れている。覆土：16層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

備考：炉は住居跡中央から北東側に寄った部分に作られている。平面形は略円形で径0.51～0.56m、断面は皿状で深さは0.10mである。焼土ブロック・粒子が見られたが、底面は赤化していなかった。炉の東側には長軸0.72m、短軸0.50mの略楕円形の土坑が認められる。凹凸の見られる底面から緩やかに立ち上がり、深さは0.16m程である。位置から考えて貯蔵穴と思われるが浅く、確証をもてない。

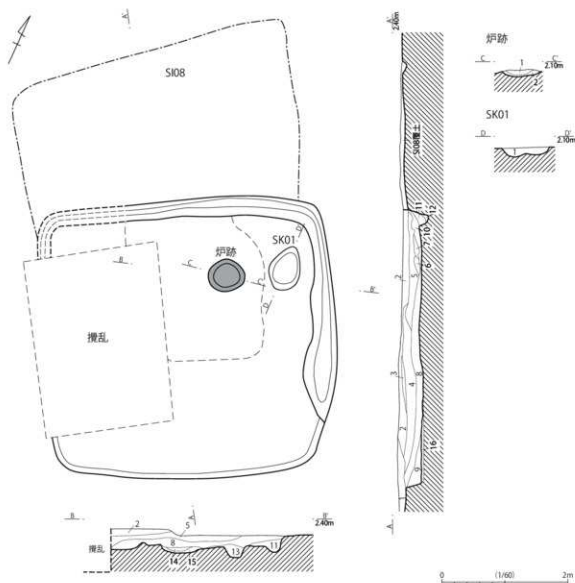
炉を中心とした部分に硬化面が認められる。形状は住居と相似形であるが、住居中央より北西側に寄っている。柱穴は検出できなかった。

遺物（第21図 第5表 図版8）

出土状況：覆土上層及び床面上から遺物が出土した。図示した1～4は覆土上層からの出土で、住居廃絶に伴い遺棄されたものであろう。1は口縁部が折り返される壺で内外面が赤彩される。2は広口壺で外面及び口縁部内面が赤彩される。3は小型壺、4は台付甕の脚部。いずれも古墳時代前期の土師器である。5は不明土製品であるが胎土から中世以降の遺物と思われる。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第4号住居跡土層説明 A-A'-B-B'

1. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を少量含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土	粘性やや無し	しまり有り	炭化物粒子をやや多量含む。ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや有り	しまり有り	ロームブロックをやや多量含む。ローム粒子を少量含む。炭化物粒子を少量含む。
5. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロック・焼土粒子を少量含む。
6. 10YR5/6 明褐色土	粘性無し	しまり有り	砂質ロームブロックを多量含む。
7. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。炭化物粒子を少量含む。
8. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや有り	しまり有り	ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。
9. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや有り	しまり有り	ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
10. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・炭化物粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
11. 10YR5/6 明褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックを少量含む。炭化物粒子を少量含む。
12. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を少量含む。
13. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子をやや少量含む。
14. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	焼土ブロック・焼土粒子をやや多量含む。炭化物粒子を少量含む。
15. 10YR3/3 暗褐色土	粘性無し	しまり有り	ロームブロックをやや多量含む。
16. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。床面下掘り方。

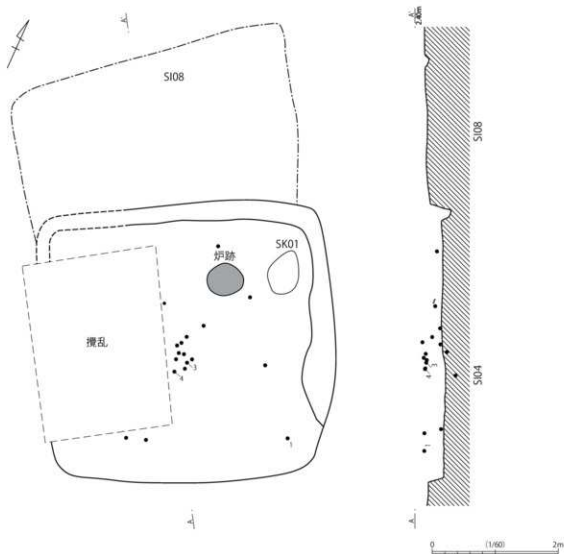
炉跡土層説明 C-C'

1. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	焼土ブロック、焼土粒子をやや多量含む。炭化物粒子を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土	粘性無し	しまり有り	ロームブロックをやや多量含む。

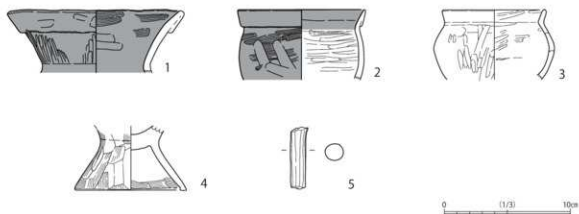
1号土坑土層説明 D-D'

1. 10YR3/3 暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子をやや少量含む。
-----------------	--------	-------	-----------------------------

第19図 第4号住居跡実測図 (SIO4)



第20图 第4号住居跡遺物分布图 (SI04)



第21图 第4号住居跡出土遺物実測图 (SI04)

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表

採回番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定 口径) (cm)	底径 (測定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
21-1 8S304-1	土師類	壺	5以下	(14.0)	—	(5.0)	口縁部を短く折り返す。頸部内外面ハケ調整後、縦ミガキ。内外面赤彩される。	白色粒子・黒色粒子・石英・長石	良好	にぶい褐色(7.5YR7/4)	古墳前
21-2 8S304-2	土師類	広口壺	10	(10.2)	—	(5.5)	口縁部を短く折り返す。頸部内外面ハケ調整後、ミガキ。口縁部内面及び外面赤彩。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色(10YR7/4)	古墳前
21-3 8S304-3	土師類	小型壺	20	(8.2)	—	(5.5)	外面縦ミガキ。内面ハケ調整後細かな横ミガキ。	白色粒子・黒色粒子・小礫・シャモット	良好	にぶい褐色(7.5YR5/3)	古墳前
21-4 8S304-4	土師類	白付壺	5以下	—	(8.9)	(5.1)	外面縦ハケ。内面下縁横ハケ。接合部から外反しながら下縁に至る。下縁は内側に短く突出する。	白色粒子・赤色粒子・小礫・シャモット	良好	にぶい赤褐色(5YR5/4)	古墳前
21-5 8S304-5	不明土製品	—	5以下	長さ(4.9)	厚(1.5)	—	両端を欠損する中央の棒状の土製品。外面長軸方向にミガキ。把手の一部か？	白色粒子・黒色粒子	良好	灰色(5Y5/1)	焼成から古墳時代前期ではない可能性あり。

第5号住居跡— S105

遺構 (第22～24図 図版3-3～5)

位置：B-4・5グリッドに位置する。重複関係：北東側で第7号住居跡と重複するが、それより新しい。長軸方位：長軸方位はN-35°-Eである。規模・形状：長軸7.51m、短軸6.77m、深さ0.37mである。北東隅及び北西隅付近が大きく攪乱される。また、住居跡中央や南東部分も床面下まで攪乱されている。南西隅も調査区外に位置するため、四隅のうち確認できたのは南東隅のみで、遺存状況は極めて悪い。平面形態は、隅丸長方形を呈し、四辺が弧を描く。床面は部分的に緩やかな起伏が認められるが概ね平坦で、壁は北西側でやや内湾して立ち上がるが、南西及び南東壁は直線的に立ち上がる。床面上及び覆土中には多量の焼土及び炭化物粒子が見られることから、所謂焼失住居である。

壁溝は南西及び南東側で認められ、特に南東側では一部重複するが3条の壁溝が巡っている。前述のように焼失住居であることから、壁溝上には焼土が纏まって検出された部分が認められる。壁溝が部分的ではあるが複数条認められることと合わせて、少なくとも住居の2回の拡張が考えられる。南西壁際では1条の壁溝しか認められないことと、この壁溝が南東側の壁溝と接することから、南西側への拡張は認められない。一方で南東隅付近では内側の2条の壁溝が北東壁まで延びていないことから、北東側への拡張の可能性を残しているが、主柱穴と思われるP①とP②から壁までの長さがほぼ等しいことから、北東側への拡張はなく、南東壁部分の部分的な拡張と考えておきたい。覆土：8層に分層した。貼床である第7・8層を除く遺構内の覆土は、堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。

備考：前述のP①・②及びP③が主柱穴で、攪乱部分に位置するものと合わせて、4本柱の住居跡であろう。P①・②は断面形の上部分が広がることから、住居廃絶にあたり柱は抜き取られたものと考えられる。P④は位置から入口部のピットであろう。

主柱穴が抜き取られていることと焼失住居であるという所見をあわせると、不慮の火災により焼失したのではなく、住居廃絶にあたり、故意に火をつけたものと思われる。

遺物 (第25・26図 第6表 図版9)

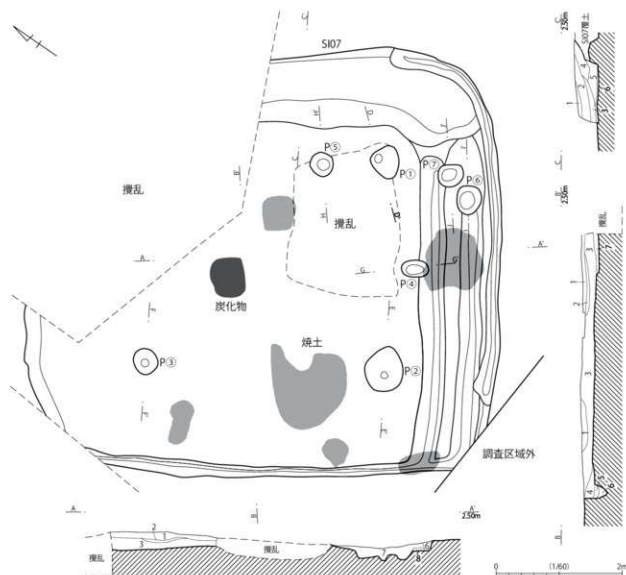
出土状況：遺物は、覆土中及び床面上から出土している。特に住居跡南東隅付近の床面上からは、

胴部破片のため図示し得なかったが、遺物が折り重なって出土している。

1～3・13・14は壺である。1は口縁部が折り返され内外面が赤彩される。2は折り返し口縁部に棒状浮文を持つ。3は口縁部が短く折り返される。13は底部に木葉痕が残る。4～6・12は甕である。5はS字状口縁台付甕である。6は口縁部にキザミを持つ。7は小型の甕で口縁部が短く直立する。8は鉢である。9・10は高坏で、9は外面及び坏部が赤彩される。10は脚部内面に赤彩痕が残る。11は器台の受け部である。14は統十王台式である。いずれも古墳時代前期の土師器である。

時期

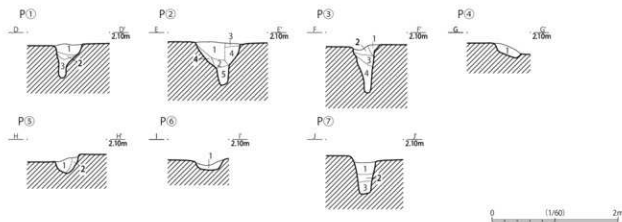
出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第5号住居跡土層説明 A-A'・B-B'・C-C'

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|--|
| 1. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックを少量含む。 |
| 2. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・炭化物粒子・焼土粒子をやや多量含む。 |
| 3. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックをやや少量含む。焼土粒子を少量含む。 |
| 4. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。 |
| 5. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性有り | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 6. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子を少量含む。 |
| 7. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子を少量含む。床面下掘り方。 |
| 8. 10VR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ロームブロックを多量含む。床面下掘り方。 |

第22図 第5号住居跡実測図(1) (SI05)



P① 土層説明 D-D'

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|---------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックをやや少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子を少量含む。 |
| 3. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。 |

P② 土層説明 E-E'

- | | | | |
|-----------------|--------|---------|---|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロック・焼土粒子を少量含む。柱を抜いた後の覆土。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまりやや無し | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。柱を抜いた後の覆土。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子を少量含む。柱穴の掘り方。 |
| 4. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを多量含む。柱穴の掘り方。 |
| 5. 10YR4/1 褐灰色土 | 粘性無し | しまりやや無し | 砂質。 |

P③ 土層説明 F-F'

- | | | | |
|-----------------|--------|---------|--------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。柱穴の掘り方。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまりやや無し | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまりやや無し | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 4. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまりやや無し | ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。 |

P④ 土層説明 G-G'

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|-----------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。 |
|-----------------|--------|-------|-----------------------|

P⑤ 土層説明 H-H'

- | | | | |
|-----------------|------|---------|------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性有り | しまりやや無し | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 2. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性有り | しまりやや無し | ロームブロックをやや多量含む。ローム粒子をやや少量含む。 |

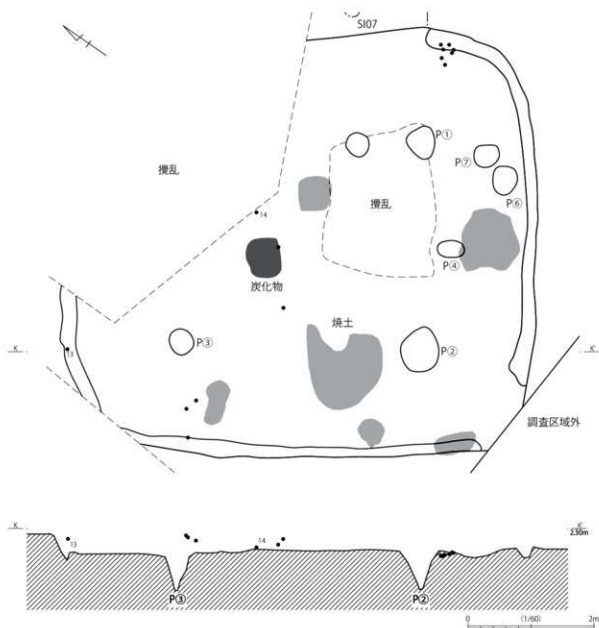
P⑥ 土層説明 I-I'

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|----------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。 |
|-----------------|--------|-------|----------------------------|

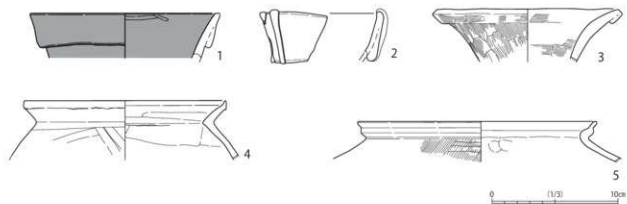
P⑦ 土層説明 J-J'

- | | | | |
|-----------------|------|---------|-----------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性有り | しまりやや無し | ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性有り | しまりやや無し | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性有り | しまりやや無し | ローム粒子を少量含む。 |

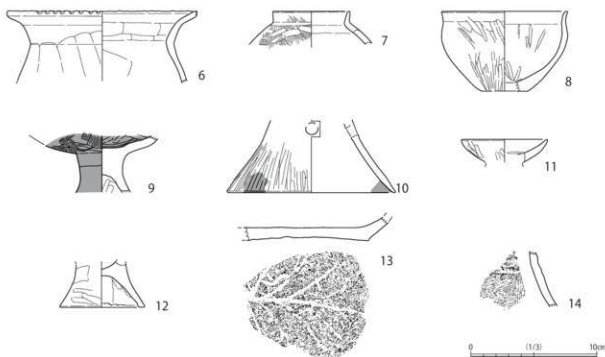
第23図 第5号住居跡実測図(2) (SI05)



第 24 図 第 5 号住居跡遺物分布図 (SI05)



第 25 図 第 5 号住居跡出土遺物実測図 (1) (SI05)



第 26 図 第 5 号住居跡出土遺物実測図 (2) (SI05)

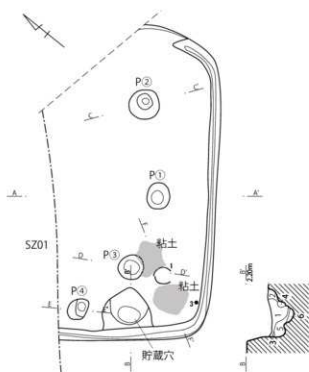
第 6 表 第 5 号住居跡出土遺物観察表

種別番号 陶器番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (推定口径) (cm)	底径 (推定底径) (cm)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
25-1 9-SI05-1	土師器	甕	5 以下	(15.0)	—	(3.5)	口縁部折り返される。口唇部面取りされる。内外面赤彩。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
25-2 9-SI05-2	土師器	甕	5 以下	—	—	(4.2)	口縁部折り返され、2本一単位以上の横状浮文が付される。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	灰色 (7.5Y6/1)	古墳前
25-3 9-SI05-3	土師器	甕	5 以下	(15.0)	—	(4.1)	口縁部折り返され、横ハケを残す。器部は縦ハケを残す。内面はハケ調整後横ナデ。	黒色粒子・赤色粒子・石英	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/6)	古墳前
25-4 9-SI05-4	土師器	甕	5	(16.0)	—	(4.7)	外面斜部横ナデ。口縁部ハケ調整後、内外面横ナデ。頸部は強く屈曲し、内湾気味に立ち上がる。口唇部強く横ナデさせ出る。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前
25-5 9-SI05-5	土師器	台付甕	5 以下	(12.2)	—	(3.5)	胴部外面斜位のハケ目後、軽い横ハケ。口縁部内外面横ナデ。5字状口縁付付登。	赤色粒子・黒色粒子・石英・小礫	良好	灰黄褐色 (10YR5/2)	古墳前
26-6 9-SI05-6	土師器	甕	5 以下	(15.2)	—	(5.7)	外面横ハケ。磨滅で見づらい。内面横ナデ。口唇部へラ状工具でキザミ。	黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前
26-7 9-SI05-7	土師器	小型甕	10	(6.0)	—	(2.6)	外面ハケ調整後、ナデ。内面輪筋を残す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前
26-8 9-SI05-8	土師器	鉢	25	(10.0)	(3.6)	(6.3)	胴部内外面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。	黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前
26-9 9-SI05-9	土師器	高环	10	—	—	(4.4)	环部内外面ハケ調整後、ナデ。胴部縦ミガキ。脚部を志にし环部を作っている。内外面赤彩。	白色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (5YR6/6)	古墳前
26-10 9-SI05-10	土師器	高环	10	—	(13.4)	(5.7)	外面縦ミガキ。脚部上位に円孔あり。元脚数低高环と思われる。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
26-11 9-SI05-11	土師器	器台	10	6.8	—	(1.8)	外面ハケ調整後、ナデ。内面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	古墳前
26-12 9-SI05-12	土師器	台付甕	10	—	6.7	(3.4)	内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前
26-13 9-SI05-13	土師器	甕	5 以下	—	(11.0)	(1.8)	底部外面に木炭面を残す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
26-14 9-SI05-14	土師器	甕	5 以下	—	—	(4.8)	直胴部。口縁部との境を土層が指図押圧される際帯で区切り、そのトを8本一単位の横状工具により、器面を縦位に区画した後、横位の波状文を充填している。内面は強くハケ調整される。	白色粒子・黒色粒子・金雲母	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	続王台式古墳前

第6号住居跡—SI06

遺構 (第27・28図 図版3-6~8)

位置：B-3・4グリッドに位置する。重複関係：北西側の大半を第1号方形周溝墓により壊されている。長軸方位：長軸方位はN-51°-Wである。規模・形状：長軸5.00m、短軸2.52m以上、深さ0.43mである。平面形は隅丸方形を呈すると思われるが北東辺は他の辺に比べ丸味を帯びる。床面は平坦で壁もほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は南西・南東壁沿いに認められる。覆土：7層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。



第6号住居跡土層説明 A-A'

- | | | |
|-----------------|--------------|---------------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し しまり有り | ローム粒子・焼土粒子を少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し しまり有り | ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子をやや少量含む。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒を少量含む。 |
| 4. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。焼土粒子・炭化物粒子を少量含む。 |
| 5. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや無し しまり有り | ロームブロック・炭化物粒子をやや多量含む。 |
| 6. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 7. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |

第6号住居跡土層説明 B-B'

- | | | |
|--------------------|--------------|----------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性無し しまり無し | 焼土粒子・炭化物粒子・ロームブロック粒子を少量含む。 |
| 2. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性無し しまりやや有り | ロームブロック(φ2-3cm)を多量含む。 |
| 3. 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | 粘性無し しまり無し | ロームブロック・砂粒を多量含む。壁が崩れたもの。 |
| 4. 10YR6/4 にぶい黄褐色土 | 粘性無し しまり無し | 砂粒を多量含む。地山が崩れたもの。 |
| 5. 10YR4/4 褐色土 | 粘性無し しまり無し | 炭化物粒子・ロームブロック粒子を少量含む。 |
| 6. 10YR5/6 黄褐色土 | 粘性無し しまり無し | ロームブロックを多量含む。 |

P2土層説明 C-C'

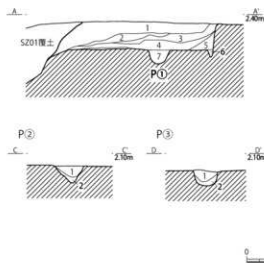
- | | | |
|-----------------|--------------|---------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |

P3土層説明 D-D'

- | | | |
|-----------------|--------------|--------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子や少量含む。ロームブロックを少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。 |

P4土層説明 E-E'

- | | | |
|-----------------|--------------|----------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。柱穴の掘り方。 |



第27図 第6号住居跡実測図 (SI06)

備考：南西隅付近には、貯蔵穴が南西壁に接して築かれている。長軸 0.78 m、短軸 0.64 m、深さ 0.41 m で平面形は不整形円形を呈し、断面は底面に凹凸が見られる。貯蔵穴と P③の南側から白色粘土が纏まって検出されている。

P②・③が主柱穴の一部で、恐らく 4 本柱の住居跡と思われる。P①は位置から考えて入口部のピットであろう。

遺物（第 29 図 第 7 表 図版 9）

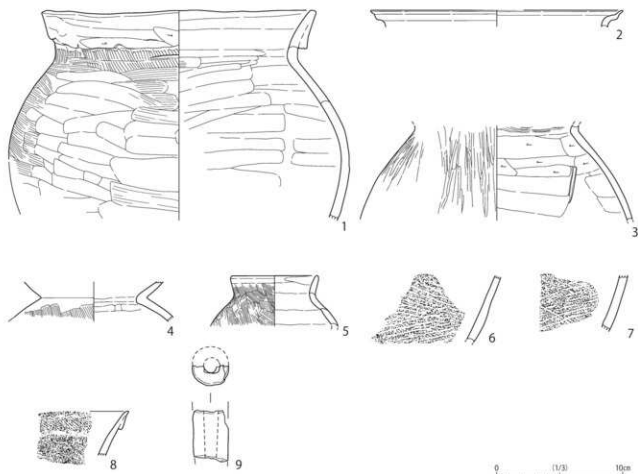
出土状況：1 は貯蔵穴東側の床面上から粘土に挟まれ、伏せられて出土している。その他の遺物は覆土中より出土している。1 は口縁部が折り返される甕で、おそらく台は付かないものと思われる。2 は S 字状口縁台付甕である。4・5・8 は壺で、8 は折り返し口縁部に RL を横位施文する。6・7 は続十王台式壺である。9 は管状土鍾である。時期はいずれも古墳時代前期のものであろう。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第 28 図 第 6 号住居跡粘土微細図 (SI06)



第 29 図 第 6 号住居跡出土遺物実測図 (SIO6)

第 7 表 第 6 号住居跡出土遺物観察表

検出番号 図版番号	種別	器種	残存率 (%)	口徑 (測定 口徑) (cm)	底径 (測定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
29-1 9.SIO6-1	土師器	甕	50	(21.8)	—	(16.6)	外面ハケ調整後、横ナデ。口縁部折り返される。口縁部は横ハケ後下端が部分的に押しされる。赤彩地が見られる。内面横ナデ。口縁部内外面横ナデ。5字状口縁台付甕。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
29-2 9.SIO6-2	土師器	甕	5 以下	(8.0)	—	(1.3)	口縁部内外面横ナデ。5字状口縁台付甕。	白色粒子・黒色粒子	良好	赤褐色 (10R5/4)	古墳前
29-3 9.SIO6-3	土師器	甕	10	—	—	(7.5)	外面縦ミガキ後、胴部大径部付近横ミガキ。内面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
29-4 9.SIO6-4	土師器	甕	5 以下	—	—	(3.1)	胴部が強く屈曲する。口縁部縦ミガキ。胴部ハケ調整後、横ミガキ。赤彩される内面が道痕を残す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
29-5 9.SIO6-5	土師器	甕	5 以下	(7.0)	—	(4.0)	外面斜位のハケ後、口縁部幅狭に横ナデ。内面輪轆痕を残す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	古墳前
29-6 9.SIO6-6	土師器	甕	5 以下	—	—	(5.3)	外面附加条 2 種により羽状横文 (LR-L と RL-R) を強く。内面深いハケ調整。	白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	畿上王台式古墳前
29-7 9.SIO6-7	土師器	甕	5 以下	—	—	(4.4)	外面附加条 2 種により羽状横文 (LR-L と RL-R) を強く。内面深いハケ調整。	白色粒子・黒色粒子・長石・石英	良好	淡黄色 (2.5YR/4)	畿上王台式古墳前
29-8 9.SIO6-8	土師器	甕	5 以下	—	—	(3.5)	口縁部折り返され、RL を強く。内外面赤彩される。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
29-9 9.SIO6-9	土製品	土師	40	長さ (4.1)	厚 (2.8)	—	管状を呈する土師。外面滑潤する。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前

第7号住居跡-SI07

遺構 (第30図 図版4-1・2)

位置: B・C-4・5グリッドに位置する。重複関係: 南西側で第5号住居跡と重複し、これより古い。長軸方位: 長軸方位はN-36°-Wである。規模・形状: 北西側は攪乱により、南西側は第5号住居跡により壊される。調査できた範囲は全体の半分以下であろう。長軸4.26m以上、短軸1.86m以上、深さ0.21mである。平面形は隅丸方形を呈すると思われるが、北東辺がやや弧状になる。床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁に沿って壁溝が巡る。壁溝幅は北東壁で0.20m、南東壁で0.15mと南側がやや幅狭になる。床面上には、焼土の分布が認められる。覆土中にも焼土や炭化粒子が認められることから、焼失住居であろう。覆土: 9層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

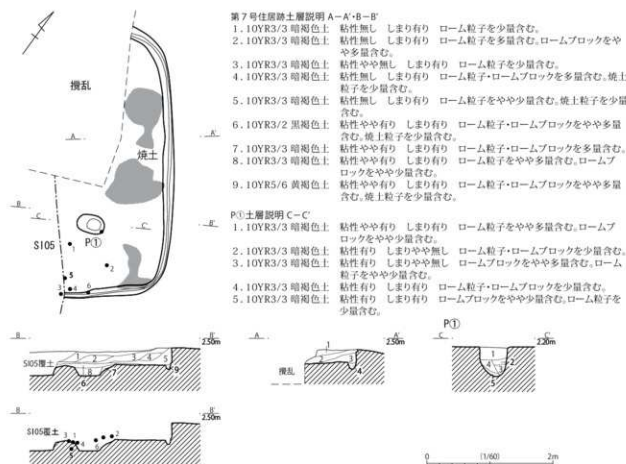
備考: P①は支柱穴の1本であるが、他の支柱穴は攪乱及び第5号住居跡により壊され不明である。

遺物 (第31図 第8表 図版10)

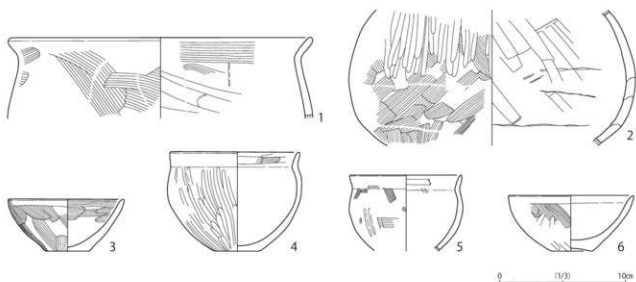
出土状況: 南東壁際から纏まって出土している。1は甕。2は壺の胴部である。3~6は鉢である。いずれも古墳時代前期の土師器である。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第30図 第7号住居跡実測図 (SI07)



第31図 第7号住居跡出土遺物実測図 (SI07)

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表

採回番号 図版番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (推定底径) (cm)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
31-1 10-SI07-1	土師器	甕	5	(24.2)	—	(6.4)	内外面ハケ調整。磨滅が激しく器面が荒れている。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	古墳前
31-2 10-SI07-2	土師器	甕	10	—	—	(10.7)	外面ハケ調整後、胴部上半縦ミガキ。内面輪筋痕を残す。肩位のナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	黄褐色 (2.5Y4/1)	古墳前
31-3 10-SI07-3	土師器	鉢	100	9.2	3.5	4.1	外面ハケ調整。口縁部横ナデ。口縁内面横ハケ後、体部から底部ナデ。内外面に焼成時の黒斑を残す。	白色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
31-4 10-SI07-4	土師器	鉢	70	10.3	3.6	7.8	外面ハケ調整後、縦ミガキ。胴部から口縁部強い横ナデ。内面縦ミガキ。口縁部横ハケを残す。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
31-5 10-SI07-5	土師器	鉢	10	(9.0)	—	(6.0)	外面ハケ調整後、ミガキ。口縁部内外面横ナデ。	黒色粒子・赤色粒子・小礫	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
31-6 10-SI07-6	土師器	鉢	60	10.0	3.2	4.4	外面ハケ調整後、縦ミガキ。内面縦ミガキ。口縁部内外面横ナデ。内面黒色化。	黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前

第8号住居跡—SI08

遺構 (第32図 図版4-3)

位置：B・C-4グリッドに位置する。重複関係：南東側を第4号住居跡により壊される。長軸方位：長軸方位はN-52°-Wである。規模・形状：長軸4.48m、短軸2.92m以上、深さ0.08mである。平面形は残っている北西辺と北東・南西辺が直角に交わらないことから、台形を呈するものと思われる。床面はやや起伏が認められる。壁は北西隅付近がやや緩やかに立ち上がるが、それ以外は短くほぼ垂直に近い。覆土：2層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。

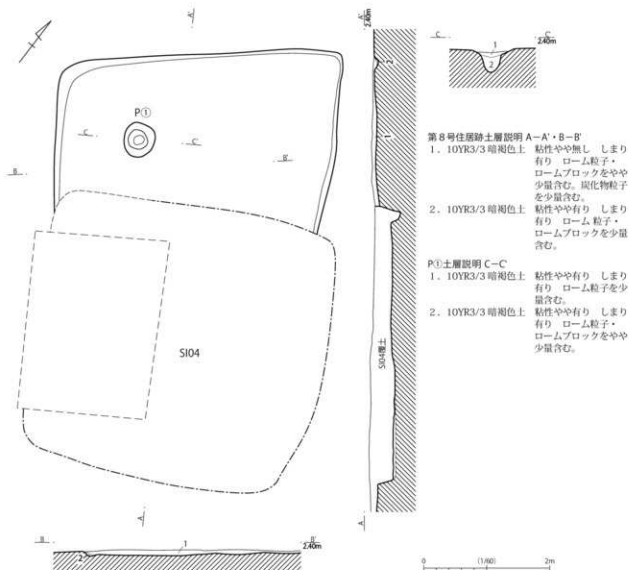
備考：P①は主柱穴と思われるが、対応するピットは不明である。

遺物 (第33図 第9表 図版10)

出土状況：遺物は覆土中より出土している。1は高坏で内外面赤彩される。2は台付甕の接合部である。3は高坏の脚部である。いずれも古墳時代前期の土師器である。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第32図 第8号住居跡実測図 (SI08)



第33図 第8号住居跡出土遺物実測図 (SI08)

第9表 第8号住居跡出土遺物観察表

検出番号	種類	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (測定底径) (cm)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
33-1 10-SI08-1	土師器	高杯	5以下	(14.2)	-	(3.6)	内外面ミガキ、赤彩される。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	古墳前
33-2 10-SI08-2	土師器	台付甕	5以下	-	-	(4.4)	外面縦ハケ。内面同色のナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にがい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
33-3 10-SI08-3	土師器	高杯	25	-	-	(4.2)	外面縦ミガキ。口孔は等間隔に3ヶ所あけられる。	黒色粒子・シャモット	良好	にがい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前

第2節 溝跡

第1号溝跡—SD01

遺構（第34図 図版4-4・5）

位置：C-1・2グリッドに位置する。重複関係：第5・10号溝跡と重複するが、先後関係は不明である。長軸方位：不明。規模・形状：緩やかな弧を描きながら、北側は調査区外へと続く。南側は攪乱により壊されている。確認できた長さは5.90mほどで、上幅は1.01～1.87mで、深さは0.46m程である。断面は幅広の平坦な底面から南側ではやや緩やかに立ち上がり、北側の調査区際では、斜めに直線的に立ち上がる。溝底は、北から南に向けて若干傾斜している。覆土：2層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。

備考：南側で重複する第5号溝跡と本溝とでは底面の高さがほぼ同じである。その事から両溝は、同時期に使用されていた一連の溝であった可能性がある。

遺物（第37図 第10表 図版10）

出土状況：遺物は覆土中より出土している。1・2は壺である。1は折り返し口縁上にLRを横位施文し、棒状浮文を付す。2は頸部にRLを横位施文し、円形浮文を付す。3～6は甃である。3は口縁部にキザミを付す。5はS字状口縁台甃の口縁部である。7・8は高坏である。7は内外面赤彩される。いずれも古墳時代前期の土師器である。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。

第2号溝跡—SD02

遺構（第35・36図 図版5-1）

位置：調査区東端のD・E-3グリッドに位置する。重複関係：第1・2号住居跡、第3・4号溝跡、ビット2と重複する。第1・2号住居跡、第3・4号溝跡より古く、ビット2より新しい。長軸方位：不明。規模・形状：形状は隅丸方形に巡る溝跡と考えられるが東側は調査区外へと続く。検出された全長は約18.28mで、幅は0.32～0.79mである。深さは0.32～0.55mである。断面形は平坦な底面から直線的に立ち上がる。覆土：3層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。

備考：溝が巡る内部は、他の遺構により壊されているので詳細は不明であるが、確認面では掘り込みを伴う住居跡は認められなかった。ただし、掘り込みを伴わない平地式住居跡の可能性は否定できない。その場合、第1号土坑が貯蔵穴に当たる可能性があろう。

遺物（第38図 第11表 図版10）

出土状況：1は小型壺の口縁部で、覆土中から出土している。時期は古墳時代前期であろう。

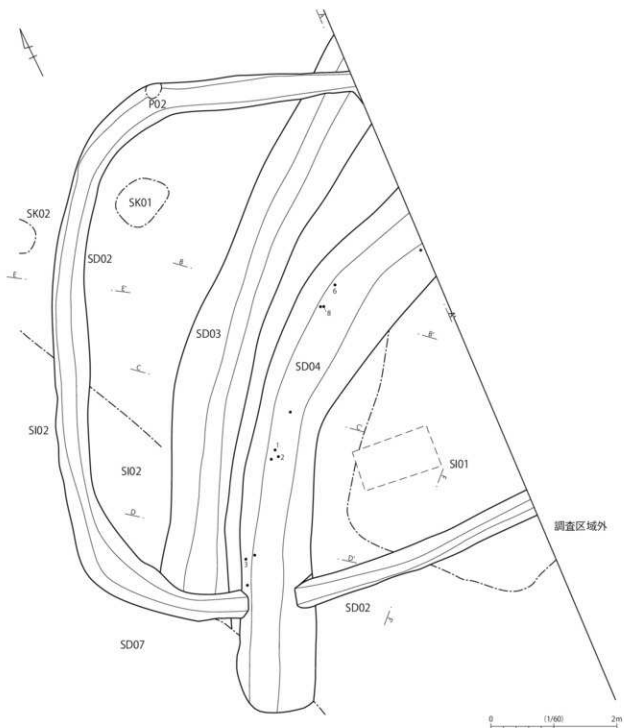
時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。

況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

備考：第4号溝跡とほぼ平行して弧を描くように走行する溝跡で、北東側は調査区外へと続き、南側は第7号溝跡により壊され不明である。第7号溝跡対岸の第8号溝跡、あるいは東側に曲がり第11号溝跡と繋がる可能性が考えられるが、溝幅は極端に狭くなる。溝底面の標高では、本溝跡南端が1.82 m、第8号溝跡の北端が1.78 m、第11号溝跡の西端が1.58 mで、北側から南側に向かい傾斜している様子が見て取れるが、いずれの溝に接続するかは決し得ない。

遺物 (第39図 第12表 図版10)

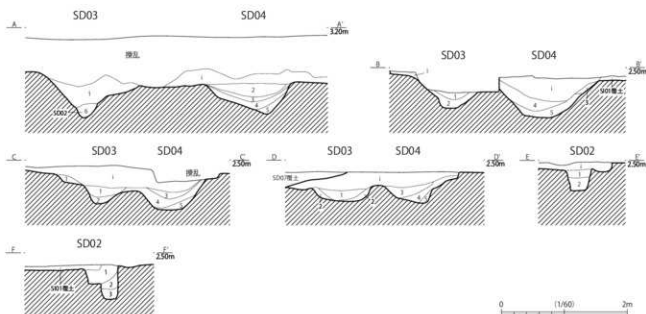


第35図 第2～4号溝跡実測図(1)・遺物分布図(SD02・SD03・SD04)

出土状況：遺物は覆土中から出土している。1は須恵器の環、2は土師器の環である。3は常滑窯産の甕の胴部である。1・2は平安時代、3は中世の所産である。

時期

出土遺物及び重複する他の遺構との先後関係から、平安時代と考えられる。



第2・3・4号溝跡土層説明 A-A'

1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を少量含む。
2.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を少量含む。
3.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
4.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロック・焼土粒子を少量含む。
5.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
6.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックをやや少量含む。
6.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を少量含む。ロームブロックをやや少量含む。

第3・4号溝跡土層説明 B-B'

1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム・焼土粒子を少量含む。
2.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
3.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックをやや少量含む。
4.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。ロームブロック・焼土粒子を少量含む。
5.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
5.	7.5YR4/3	褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を多量含む。ロームブロックをやや多量含む。

第3・4号溝跡土層説明 C-C'

1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。
2.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックをやや少量含む。
3.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
4.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや多量含む。ロームブロックをやや少量含む。
5.	10YR3/2	黒褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を多量含む。ロームブロックをやや多量含む。

第2・3・4号溝跡土層説明 D-D'

1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
2.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子を多量含む。ロームブロックをやや多量含む。
3.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。
4.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
5.	10YR4/3	にぶい黄褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ロームブロックを多量含む。地山が崩れたもの

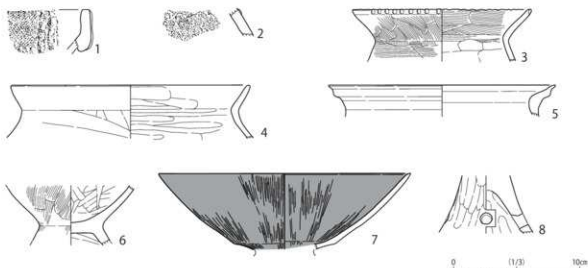
第2号溝跡土層説明 E-E'

1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
2.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや有り	しまり有り	ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。

第2号溝跡土層説明 F-F'

1.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。
2.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや無し	しまり有り	ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
3.	10YR3/3	暗褐色土	粘性やや有り	しまり有り	ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。

第36図 第2～4号溝跡実測図(2) (SD02・SD03・SD04)



第 37 図 第 1号溝跡出土遺物実測図 (SD01)

第 10 表 第 1号溝跡出土遺物観察表

検出番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (測定底径) (cm)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
37-1	土師器	甕	5以下	—	—	<3.3>	複合口縁を呈する。口縁部に LR、口縁部外面に引状縄文を施す。縄文施文後縦位の稀状浮文を付す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
10SD01-1	土師器	甕	5以下	—	—	<2.6>	外面細かな RL 施文後、円形浮文を付す。縄文上縁は閉鎖である。	白色粒子・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
37-2	土師器	甕	5以下	—	—	<4.1>	口縁部内外面にハケ目を明確に残す。口縁部に棒状工具により、キザミが施される。	白色粒子・黒色粒子・石英	良好	灰黄褐色 (10YR5/2)	古墳前
10SD01-2	土師器	甕	5以下	(14.2)	—	<4.1>	口縁部内外面にハケ目を明確に残す。口縁部に棒状工具により、キザミが施される。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	古墳前
37-3	土師器	甕	5以下	(19.0)	—	<4.2>	口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	古墳前
10SD01-3	土師器	付台費	5以下	(10.8)	—	<2.6>	口縁部内外面横ナデ。5字状口縁台付費。	白色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (2.5Y3/2)	古墳前
37-4	土師器	付台費	5以下	—	—	<4.7>	外面ハケ目を残す。内部内面黒色化。	白色粒子・赤色粒子	良好	暗灰黄色 (5YR5/4)	古墳前
10SD01-4	土師器	高坏	25	(20.0)	—	<6.0>	高坏の坏部、下部に轆を持ち内湾しながら立ち上がる。内外面縦ミガキ。内外面赤彩。	白色粒子・シャモット	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	古墳前
10SD01-5	土師器	高坏	5以下	—	—	<4.5>	外面縦ミガキ。円形の透かしが3ヶ所あけられる。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前



第 38 図 第 2号溝跡出土遺物実測図 (SD02)

第 11 表 第 2号溝跡出土遺物観察表

検出番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (測定底径) (cm)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
38-1	土師器	小型甕	5以下	—	—	<3.0>	外面ハケ調整後、ミガキ。	黒色粒子	良好	褐色 (5YR6/6)	古墳前



第 39 図 第 3 号溝跡出土遺物実測図 (SD03)

第 12 表 第 3 号溝跡出土遺物観察表

種別番号 図版番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (推定) (cm)	底径 (推定) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
39-1 10-SD03-1	須恵器	杯	5 以下	(11.8)	—	(1.1)	内外面ロクロナデ。	白色粒子・小礫	良好	灰色 (10Y5/1)	東金子産 平安
39-2 10-SD03-2	土師器	杯	5 以下	—	(6.8)	(2.1)	内外面ロクロナデ。底部外面回転糸切り痕。 回転ヘラケズリ。	白色粒子・黒色粒 子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	平安
39-3 10-SD03-3	陶器	甕	5 以下	—	—	—	外面に縦長の格子目状に押印される。内面 は指頭痕を残す。	白色粒子・黒色粒 子	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	常滑窯 中世

第 4 号溝跡—SD04

遺構 (第 35・36 図 図版 5-1・2)

位置：D・E-3・4 グリッドに位置する。重複関係：第 1 号住居跡、第 2・7 号溝跡と重複する。第 1 号住居跡、第 2 号溝跡より新しく、第 7 号溝跡より古い。長軸方位：不明。規模・形状：検出された長さは約 8.40 m、上幅は 1.01 ~ 1.54 m、深さは 0.45 ~ 0.65 m である。丸みを帯びる幅広いの底面からやや角度を持って立ち上がるが、南側では緩やかな立ち上がりになる。覆土：5 層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

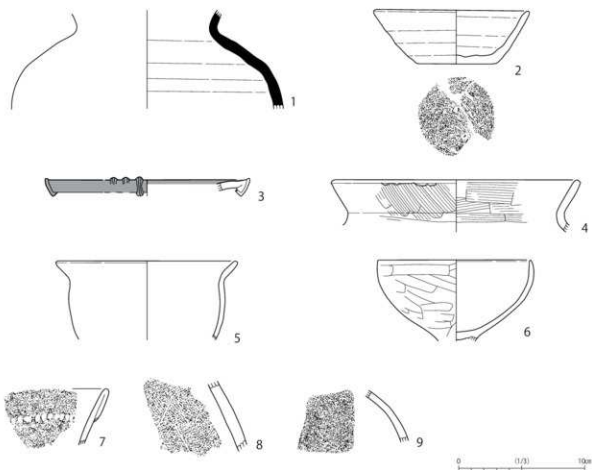
備考：第 3 号溝跡とほぼ平行に弧を描くように走行する溝跡で、北東側は調査区外へと続き、南側は第 7 号溝跡により壊され不明である。

遺物 (第 40 図 第 13 表 図版 11)

出土状況：遺物は覆土中から出土している。1 は湖西産の須恵器壺と思われる。2 はロクロ土師器で底部に回転糸切り痕を残す。3 は複合口縁上に棒状浮文を付す。4・5 は甕である。6 は坏部が内湾する高坏。7~9 は壺で 7 は折り返し口縁下端にキザミを持つ。8 は縄文を地文に連続山形文を描く。9 は縄文の側圧痕で弧線文を描く。1・2 は平安時代、3~9 は古墳時代前期の所産であろう。

時期

出土物及び重複する他の遺構との先後関係から、平安時代と考えられる。



第 40 図 第 4 号溝跡出土遺物実測図 (SD04)

第 13 表 第 4 号溝跡出土遺物観察表

種別番号 図録番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定 口径) (cm)	底径 (測定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
40-1 11-SD04-1	須虫器	甕	10	-	-	(7.8)	外面に空母が張られたものが付着し、被熱により発固している。	白色粒子・黒色粒子	良好	灰オリーブ色 (5Y4/2)	瀬西産か 平安
40-2 11-SD04-2	土師器	杯	75	12.3	6.2	4.3	内外面口ケロナデ。底部外面回転削り後、ナデ。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (7.5YR5/6)	平安
40-3 11-SD04-3	土師器	甕	5 以下	(16.3)	-	(1.4)	口縁部を複合口縁状にし、棒状浮文を付す。内外面赤彩される。	白色粒子・シャモット	良好	褐色 (2.5YR5/6)	古墳前
40-4 11-SD04-4	土師器	甕	5 以下	(19.8)	-	(4.1)	口縁部外面斜位のハケ目。内面横ハケを残す。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・長石	良好	明赤褐色 (5YR5/6)	古墳前
40-5 11-SD04-5	土師器	甕	5 以下	(14.5)	-	(6.2)	外面ハケ調整後ナデ。磨滅が激しい。	白色粒子・黒色粒子・石英・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	古墳前
40-6 11-SD04-6	土師器	高杯	60	12.2	-	(6.4)	内湾しながら立ち上がり、口縁部が直立する高杯。器壁は薄い。内外面磨滅し調整不明。	白色粒子・小礫	良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	古墳前
40-7 11-SD04-7	土師器	甕	5 以下	-	-	-	口縁部を折り返し、下端に棒状工具でキザミを付す。	白色粒子・黒雲母・チャート・小礫	良好	褐色 (7.5YR5/6)	古墳前
40-8 11-SD04-8	土師器	甕	5 以下	-	-	-	Lを地文に連続山形文を置く。山形文の外側は赤彩される。	白色粒子・黒色粒子・長石・シャモット	良好	赤褐色 (2.5YR4/6)	古墳前
40-9 11-SD04-9	土師器	甕	5 以下	-	-	-	胴部上部に縄の副注痕により連続する縦線文を施す。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (2.5YR5/6)	古墳前

第5号溝跡—SD05

遺構（第34図 図版4-4～6）

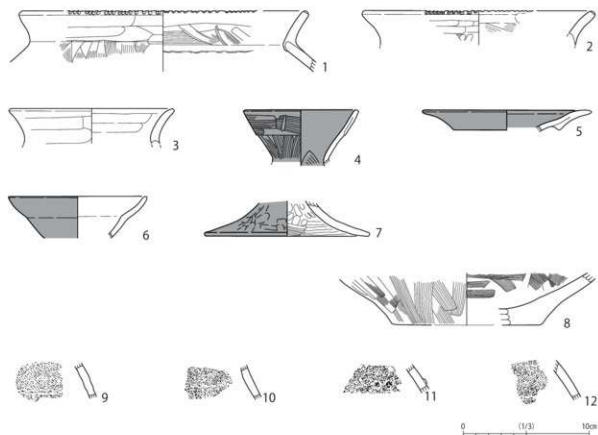
位置：C・D-2グリッドに位置する。重複関係：第1・6号溝跡と重複するが、その先後関係は不明である。なお第1号古墳の周溝とも重複し、その周溝は僅かな痕跡しか確認できないが、それより古い。長軸方位：不明。規模・形状：円を描く溝跡と考えられるが、南側は攪乱により確認できなかった。検出された長さは約14.10mで、上幅は南西側で幅広く1.19m、北側の中央付近が細く0.69mである。深さは0.30～0.45mである。北側から北東側では、幅広の平坦な底面から斜めに直線的に立ち上がる。南西側では立ち上がりに乱れが認められる。覆土：3層に分層した。1層は前述した第1号古墳周溝の覆土の可能性がある。人為的か自然堆積かは不明。

遺物（第41図 第14表 図版11）

出土状況：遺物はいずれも覆土中から出土している。1～3は甕で1・2は口唇部にキザミを持つ。4・5・8～12は壺である。9～11は壺の頸部で結節の伴う縄文が見られる。4・5は内外面が赤彩される。6は埴で外面が赤彩される。7が高坏の脚部で外面が赤彩される。いずれも古墳時代前期の土師器。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第41図 第5号溝跡出土遺物実測図（SD05）

第 14 表 第 5 号溝跡出土遺物観察表

探出番号 採取番号	種類	器種	残存率 (%)	口径 (推定) (cm)	底径 (推定) (cm)	高さ (推定) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
41-1 11SD05-1	土師器	甕	5 以下	(22.8)	—	(5.1)	外面にハケ目を残す。口縁部にハケ状工具でキザミを付す。	白色粒子・長石・小礫	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
41-2 11SD05-2	土師器	甕	5 以下	(18.5)	—	(2.7)	内外面ハケ調整後、口縁部横ナデ。口縁部に木口によるキザミ。	白色粒子・赤色粒子・長石	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	古墳前
41-3 11SD05-3	土師器	甕	5 以下	(13.2)	—	(2.8)	口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・赤色粒子・石莖	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
41-4 11SD05-4	土師器	甕	5 以下	(9.2)	—	(4.4)	外面縦ハケ後、口縁部折り返し横ハケ後、軽いミガキ。内外面赤彩される。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	古墳前
41-5 11SD05-5	土師器	甕	5 以下	(17.2)	—	(3.0)	二重口縁部の口縁部内外面ミガキが施され、赤彩される。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	古墳前
41-6 11SD05-6	土師器	埴	5 以下	(11.0)	—	(3.3)	内外面磨面が美しい。外面赤彩釉を施す。	黒色粒子・小礫	良好	にぶい赤褐色 (10YR6/4)	古墳前
41-7 11SD05-7	土師器	高杯	5 以下	—	(13.2)	(2.8)	脚部に円孔を持つ。外面は縦ミガキ。赤彩される。内面横ナデ。	白色粒子・シャモット	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	古墳前
41-8 11SD05-8	土師器	甕	5 以下	—	(12.0)	(4.1)	外面縦ハケ。内面褐色のハケ目を残す。外面に黒刷が見られる。	白色粒子・赤色粒子	良好	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	古墳前
41-9 11SD05-9	土師器	甕	5 以下	—	—	—	外面縦かな R を備す。無文部との境は S 字状結節で区画される。下端に軸の狭い溝が落ちる。無文部は赤彩される。	白色粒子・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	古墳前
41-10 11SD05-10	土師器	甕	5 以下	—	—	—	S 字状結節を伴う R を帯状に備える。その下に磨消を伴う縦溝文を配する。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄色 (2.5Y6/3)	古墳前
41-11 11SD05-11	土師器	甕	5 以下	—	—	—	外面 S 字状結節文が落ち、その上に 2 個一單位の円形浮文が付される。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	褐色 (7.5YR7/6)	古墳前
41-12 11SD05-12	土師器	甕	5 以下	—	—	—	上下を S 字状結節で区画する LR の縦文部が落ちる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前

第 6 号溝跡—SD06

遺構 (第 34 図 図版 4—4・5)

位置：C—1・2 グリッドに位置する。重複関係：第 5 号溝跡と重複する。第 5 号溝跡より新しいと思われる。なお第 1 号古墳の周溝とも重複し、その周溝は僅かな痕跡しか確認できないが、それより古い。長軸方位：不明。規模・形状：弧を描く溝跡で第 1 号溝跡とほぼ平行する。検出された長さは 3.50 m で、上幅は調査区北端で狭く 0.69 m、その他はほぼ一定で 1.04 m である。深さは 0.16 m である。平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。覆土：単層。人為的か自然堆積かは不明。

遺物

出土状況：土師器の小片が出土しているが、図示し得るものは無かった。

時期

重複する他の遺構との先後関係から、古墳時代前期と考えられる。

第7号溝跡—SD07

遺構（第42～44図 図版5-3～7）

位置：A～D-2～5グリッドに位置する。重複関係：東側で第2号住居跡、第2～4・9・11溝跡と、南側で第8号溝跡と、南西側で第1号方形周溝墓、第3号土坑とそれぞれ重複するが、そのいずれよりも新しい。長軸方位：不明。規模・形状：第1号方形周溝墓を囲むように見られる溝跡である。検出された長さは54.37m、上幅6.88～9.11mで、深さは0.38～0.95mである。溝跡の西南端部は土壌がグライ化していることと、谷部と一体化しているため、平面では確認できない状態であった。断面で確認した結果、谷部に接する部分で急激に幅が広がっていた。覆土：5層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。部分的に覆土上層からは基本層序のH以降の土が認められる。

備考：本溝の北部の底面から一群を成す9基のピットを検出した（P①～⑨）。本溝内からはここだけでピットが検出された点、溝の側面寄りのピットは断面形が溝の中央に向かってやや内傾する点から、これらのピットは橋脚痕の可能性はある。

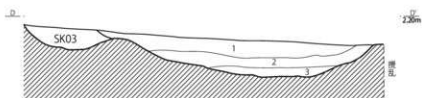
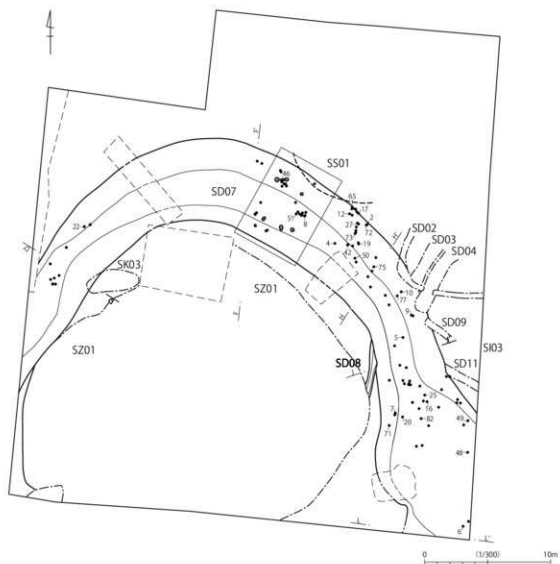
遺物（第45～50図 第15表 図版11～14）

出土状況：遺物は上層から底面に至る各層の覆土中より出土している。1は縄文土器である。2～7は古墳時代前期の土師器である。2は壺であり上層から出土している。3・5は器台であり、5の坯部内外面及び脚部外面には赤彩痕が残る。4は台付甕の台部であり下層から出土している。6は小型壺で上げ底の底部であり、下層の底面近くから出土した。7は脚部が中実で畿内系高坏であり上層から出土した。8は提瓶であり、下層の底面近くから出土した。9は内面に同心円状の当て具痕を残し外面をタタキで成形した南比企産の壺で上層から出土している。いずれも6世紀末の須恵器である。10・11は東金子産の坏で、9世紀後半の須恵器である。10は上層から出土した。11及び小片につき図示しえないが9世紀後半の須恵器の坏片が底面に近い下層から出土している。12は上層より出土した高台付坏で10世紀前半の土師器であろう。13は13世紀前半の常滑の甕である。14は火鉢であり、15は羽釜のミニチュア土器と思われる。いずれも中世以降の土師質土器である。

埴輪は、重量で見れば土師器に次ぐ出土量で、本溝跡出土遺物全体の4割以上を占める。そのいずれも、本溝が自然堆積で埋没する過程の後半に堆積した上層及び埋没後に堆積した基本層序のH層から出土した。平面的な分布を見ると、本溝の北東部の外周に沿って集中し、そこから南東へと広がっている。したがって、これらの埴輪片は本溝の北東側にあり後述する第1号古墳が由来であり、本溝がある程度埋没してから流れ込んだものと考えられる。16～22は形象埴輪である。中でも16～19は人物埴輪の腕であり、16・19には赤彩痕がある。21は鶏と考えられる。23～86は円筒埴輪である。中でも47は朝顔形である。また、36・42・61・64・65・67は内面に、60は外面にヘラ描き記号が見られる。いずれも6世紀前半の埴輪である。

時期

覆土中より中世以降の遺物も認められるが、下層及び底面からは6～9世紀後半の遺物が出土している。このことから、ここでは溝の埋没時期を9世紀後半と考えたい。

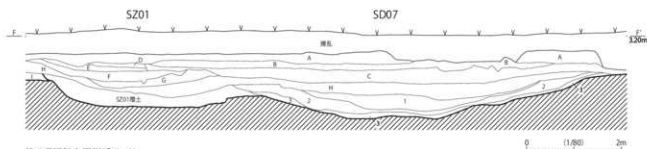


第7号溝跡土層説明 D-D''

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|---------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 3. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |

0 (1/60) 2m

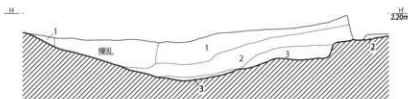
第42図 第7・8号溝跡実測図・遺物分布図 (SD07・SD08)



第7号溝跡土層説明 F-F'

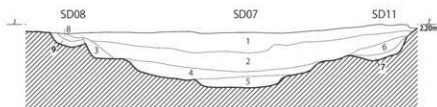
- A. 基本層序を参照
 B. 基本層序を参照
 C. 基本層序を参照
 D. 基本層序を参照
 E. 基本層序を参照
 F. 基本層序を参照
 G. 基本層序を参照
 H. 基本層序を参照
 I. 基本層序を参照

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子をやや少量含む。白色粒子（火山灰と考えられる）少量含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子を少量含む。
 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや有り しまり有り ロームブロックをやや多量含む。ローム粒子をやや少量含む。



第7号溝跡土層説明 H-H'

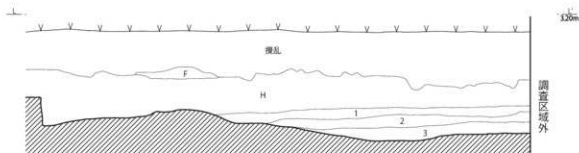
1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子を少量含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子をやや少量含む。
 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや有り しまり有り ローム粒子を少量含む。



第7・8・11号溝跡土層説明 J-J'

1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子を少量含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム・粘土粒子を少量含む。
 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。
 4. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
 5. 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや有り しまり有り。

6. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。
 7. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。
 8. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子を少量含む。
 9. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ロームブロックをやや多量含む。ローム粒子をやや少量含む。



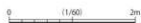
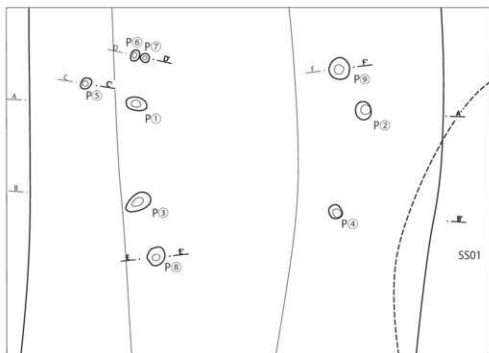
第7号溝跡土層説明 L-L'

- F. 基本層序を参照
 H. 基本層序を参照

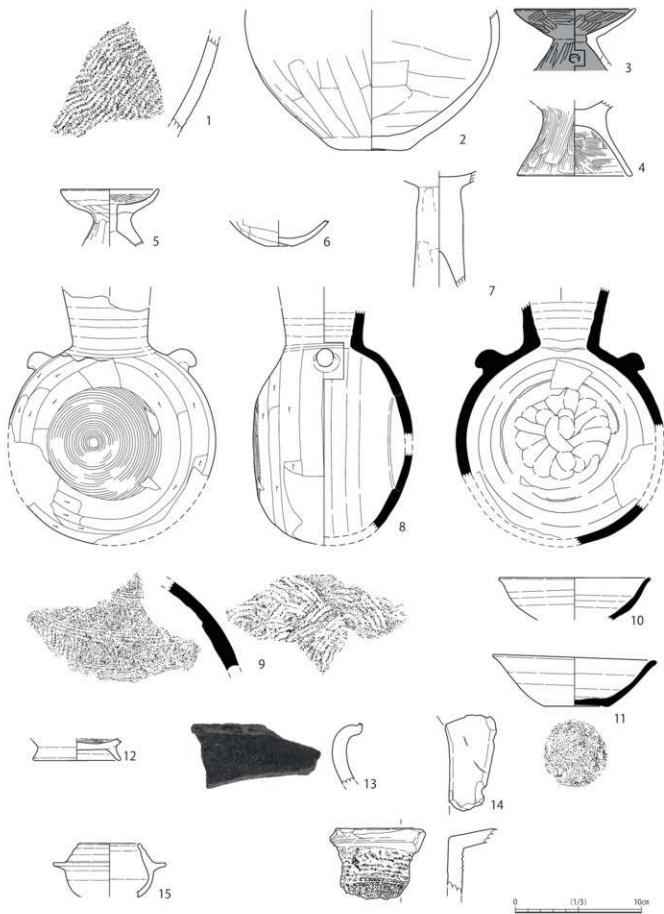
1. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子を少量含む。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや有り しまり有り ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
 3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや無し しまり有り ローム粒子をやや少量含む。白色粒子（火山灰と考えられる）少量含む。

0 (1/60) 2m

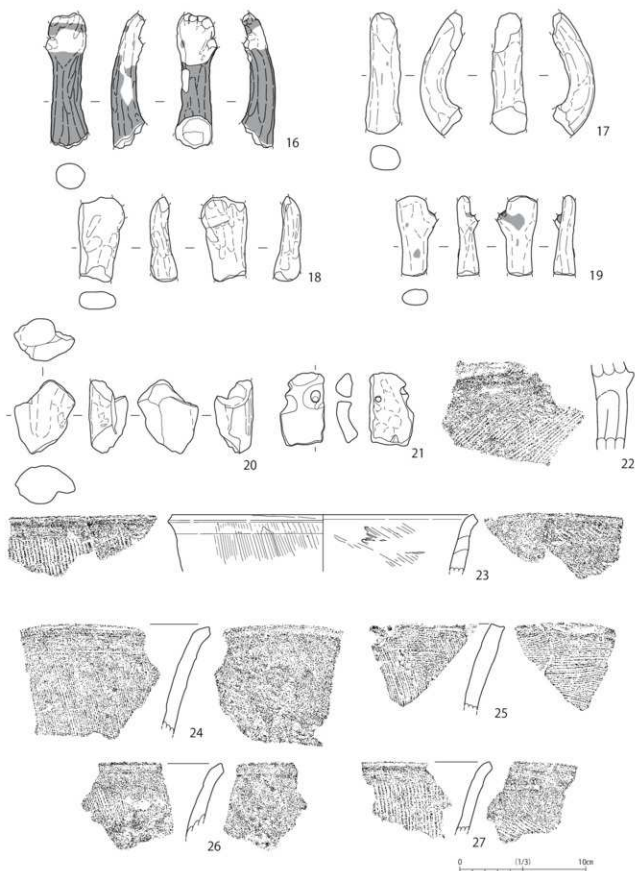
第43図 第7・8号溝跡実測図 (SD07・SD08)



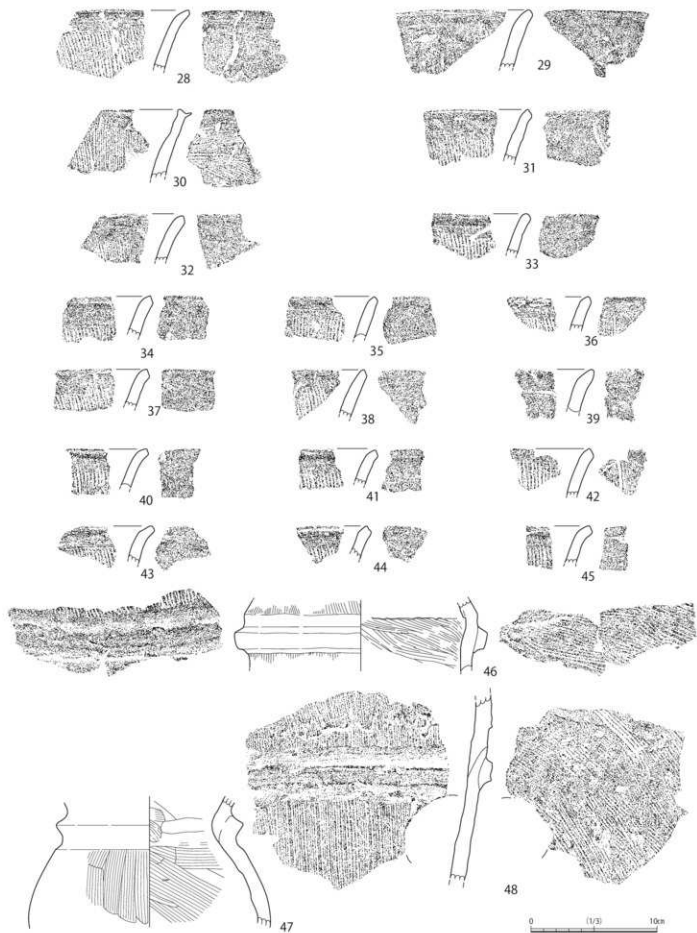
第 44 図 第 7 号溝跡ピット群実測図 (SD07)



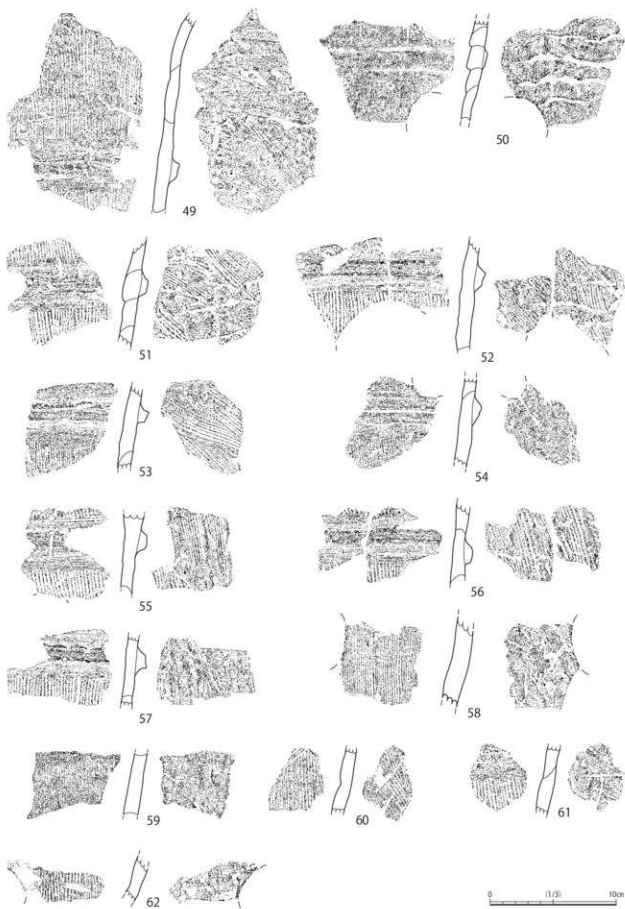
第45图 第7号沟跡出土遺物実測図(1)(SD07)



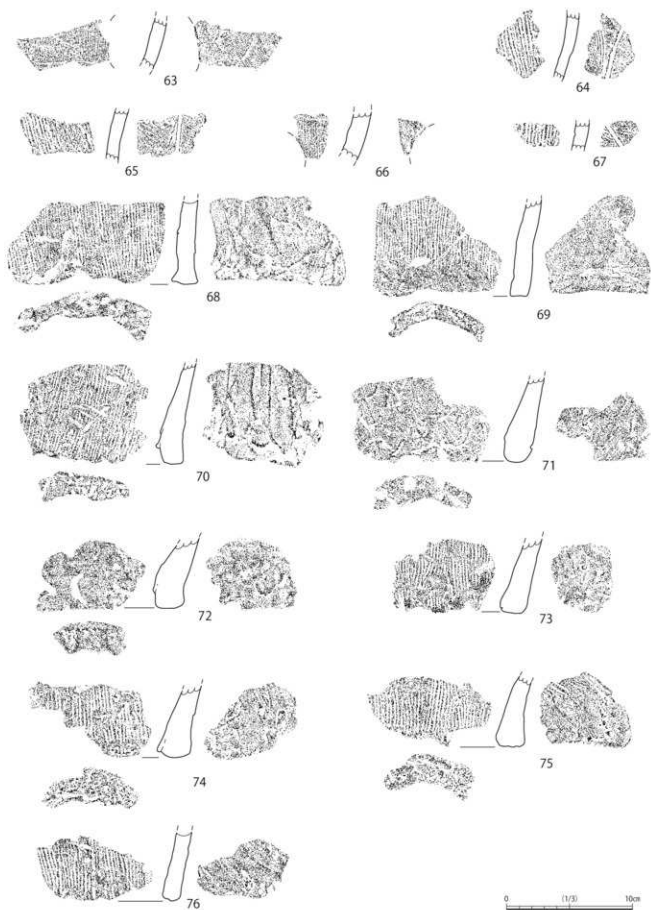
第46图 第7号沟迹出土遗物实测图(2)(SD07)



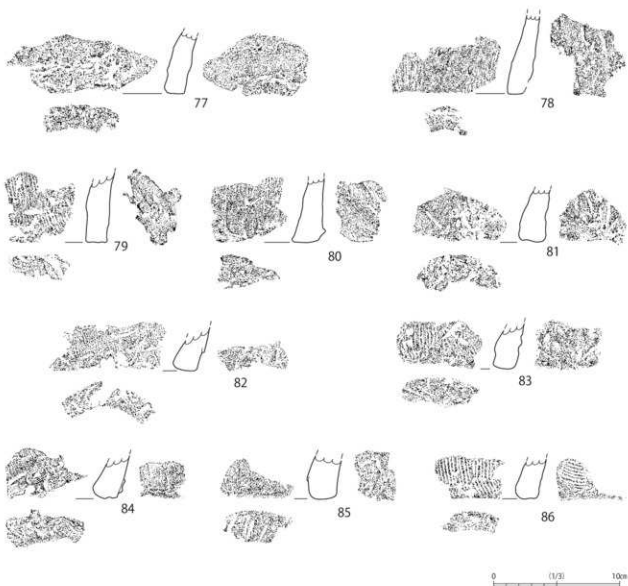
第47图 第7号清淤出土遗物实测图(3) (SD07)



第 48 图 第 7 号沟迹出土文物实测图 (4) (SD07)



第49图 第7号溝跡出土遺物実測図(5)(SD07)



第50图 第7号沟迹出土物夹测图(6)(SD07)

第15表 第7号溝跡出土遺物観察表

採回番号 探検番号	種別	部類	残存率 (%)	口径 (高さ 口径) (cm)	底径 (確定 底径) (cm)	部高 (残存 高さ) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
45-1 11SD07-1	縄文 土器	深鉢	5以下	—	—	(6.9)	1.8を地文とする。内面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・長石	良好	明赤褐色 (5YR5/6)	縄文 中前半
45-2 11SD07-2	土師器	壺	15	—	6.7	(11.1)	内外面非常に磨減が激しい。外面底部付近 縦ミガキの痕跡が認められる。高脚小作の 首着が激しい。	白色粒子・長石・ 小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	古墳前
45-3 11SD07-3	土師器	器台	30	0.0	—	(4.0)	外面内面横ミガキ。脚部外面縦ミガキ。 外面内面及び脚部外面は赤彩される。脚 部の円形透かしは2ヶ所と思われる。	白色粒子・黒色粒子 ・シャモット	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	古墳前
45-4 11SD07-4	土師器	白付甕	5以下	—	0.2	(6.0)	外面縦ハケ。内面肩位接合部から縦磨 ハケ調整後ナデ。	黒色粒子・赤色粒子 ・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
45-5 11SD07-5	土師器	器台	40	0.8	—	(4.5)	外面内面縦ミガキ後、口縁部内外面横ナ デ。脚部外面縦ミガキ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
45-6 11SD07-6	土師器	小型壺	15	—	2.0	(2.0)	内外面ナデ。底部外面窪む。	白色粒子・黒色粒子	良好	黄褐色 (2.5Y5/3)	古墳前
45-7 11SD07-7	土師器	高杯	30	—	—	(9.1)	中央の高杯の脚部。磨減が激しいが縦ミガ キされたものと思われる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	古墳前
45-8 12SD07-8	須恵器	甕	70	—	—	(20.1)	外面胴部に同心円状のカキ目を残す。胴部 に建杖の把手が付く。内面成形時の指痕 を残す。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	黒灰色 (2.5Y6/1)	6c末
45-9 12SD07-9	須恵器	甕	5以下	—	—	(7.7)	外面平行磨減のタタキ後、カキ目が落ちる。 内面同心円状の当て具痕あり。	白色粒子・黒色粒子	良好	暗青灰色 (5B4/1)	南北朝産 6c末
45-10 12SD07-10	須恵器	杯	10	(12.0)	—	(3.3)	内外面口クロナデ。	白色粒子・小礫	良好	オリーブ灰色 (2.5GY5/1)	東金土産 9c後
45-11 12SD07-11	須恵器	杯	60	(13.0)	5.1	(4.1)	内外面口クロナデ。底部外面回転糸切り 痕を残す。	白色粒子・石英・ 小礫	良好	桃色 (5Y5/2)	東金土産 9c後
45-12 12SD07-12	土師器	高台付 杯	20	—	7.0	(1.7)	内外面口クロナデ。底部内面同一方向に かなミガキ。底部外面回転糸切り後ナデ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	褐色 (5YR6/6)	10c
45-13 12SD07-13	陶器	甕	5以下	—	—	(4.8)	口縁部が短く上方に延びる。内外面磨減さ れる。	白色粒子・小礫	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	常滑産 4型式か 13c前
45-14 12SD07-14	土師質	火鉢	5以下	—	—	(5.2)	口縁部直下に6本一単位の間歯状工具によ る沈積が落ちる。内面横ナデ。	白色粒子・赤色粒子 ・石英	良好	にぶい黄褐色 (7.5R6/4)	中世以降
45-15 12SD07-15	土師質	ミニ チュア 土器	30	0.0	—	(4.1)	筋塗のミニチュア土器と思われる。内外面 横ナデ。	白色粒子・長石	良好	灰黄褐色 (10YR5/2)	中世以降
46-16 12SD07-16	埴輪	形象 人物	5以下	—	—	(10.6)	人物埴輪の右手。ナデ調整される。赤彩さ れる。	白色粒子・小礫	良好	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	6c前半
46-17 12SD07-17	埴輪	形象 人物	5以下	—	—	(9.6)	人物埴輪の腕。ナデ調整される。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
46-18 12SD07-18	埴輪	形象 人物	5以下	—	—	(6.8)	人物埴輪の右手。ナデ調整される。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
46-19 12SD07-19	埴輪	形象 人物	5以下	—	—	(6.3)	人物埴輪の左手。磨減・剥落している。赤 彩される。	白色粒子・小礫	良好	にぶい赤褐色 (10YR5/3)	6c前半
46-20 12SD07-20	埴輪	形象 不明	5以下	—	—	(5.8)	柱状の胎土に転り付けて形作っている。ナ デ調整される。	白色粒子・小礫	良好	褐色 (5YR6/6)	6c前半
46-21 12SD07-21	埴輪	甕	5以下	—	—	(5.7)	円形の穿孔が見られる。ナデ調整される。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
46-22 12SD07-22	埴輪	形象 不明	5以下	—	—	(4.0)	外面肩位のハケ。突部は断面削の狭い台形 状を呈する。委帯部分が肉厚に作られてい る。内面横ナデ。	白色粒子・赤色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
46-23 12SD07-23	埴輪	円筒	5以下	(23.8)	—	(4.5)	外面8本/2cm程の縦ハケ後、口縁部直下 ナデ。内面肩位のハケ調整後横ナデ。口 脚部横ナデされ、平皿に仕上げられる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
46-24 12SD07-24	埴輪	円筒	5以下	—	—	(9.7)	外面15本/2cm程の縦ハケ調整後、口縁部 直下横ナデ。内面肩位のハケ調整後横ナ デに仕上げられる。口脚部内面強い横ナ デで凹線状に窪む。	白色粒子・黒色粒子 ・長石・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
46-25 12SD07-25	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.0)	外面10本/2cm程の縦ハケ後、口縁部直 下横ハケ。内面縦ハケ。口脚部横ナデされ、 平皿に仕上げられる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
46-26 12SD07-26	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.3)	外面14本/2cm程の縦ハケ調整。内面肩 位のナデ後、口縁部内外面強い横ナデ。口 脚部平皿に仕上げられる。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半

探検番号	種別	部類	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (測定底径) (cm)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
46-27	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ後口縁部横ナデ、内面斜位のハケ後横ナデ。口唇部凹線状に窪む。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
12.SD07-27											
47-28	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ。内面斜位のナデ後、口縁部内外面強い横ナデ。口唇部やや丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	6c前半
12.SD07-28											
47-29	埴輪	円筒	5以下	-	-	(4.5)	外面縦ハケ調整後、口縁部直下横ハケ。溝溝が深い。内面斜位のナデ。口唇部横ナデされ平坦に仕上げる。	白色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
12.SD07-29											
47-30	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面14本/2cm程の縦ハケ調整後、口縁部直下横ナデ。内面斜位のハケ後横ハケ調整。口唇部強く横ナデされ窪む。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
12.SD07-30											
47-31	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面10本/2cm程の縦ハケ。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。口唇部丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・長石・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
12.SD07-31											
47-32	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面14本/2cm程の縦ハケ後、口縁部横ナデ。内面斜位のナデ後、口唇部横ナデ。口唇部平坦に仕上げる。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半
12.SD07-32											
47-33	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ調整。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。口唇部やや丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
12.SD07-33											
47-34	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。口唇部平坦に仕上げる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
12.SD07-34											
47-35	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ調整。内面横ナデ。口縁部内外面横ナデ。口唇部丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子・長石	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	6c前半
13.SD07-35											
47-36	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面10本/2cm程の縦ハケ。内面ナデ。ヘラ筋きざしが見られる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-36											
47-37	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ調整後、口縁部直下横ナデ。内面斜位のハケ調整後横ナデ。口唇部横ナデ平坦に仕上げる。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
13.SD07-37											
47-38	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面10本/2cm程の縦ハケ調整。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ口唇部丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-38											
47-39	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-39											
47-40	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ調整後、口縁部直下横ナデ。内面横ナデ。口唇部横ナデし平坦に仕上げる。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
13.SD07-40											
47-41	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ調整。内面横ナデ。口縁部内外面強い横ナデにより、内面に段差を持つ。口唇部やや丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-41											
47-42	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ。内面ナデ。口唇部内外面横ナデ。内面にヘラ筋きざしが見られる。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	6c前半
13.SD07-42											
47-43	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面8本/2cm程の縦ハケ。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。口唇部やや丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	6c前半
13.SD07-43											
47-44	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面縦ハケ調整。内面横ナデ後、口縁部内外面横ナデ。口唇部凹線状に窪む。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-44											
47-45	埴輪	円筒	5以下	-	-	-	外面縦ハケ調整。内面横ナデ後、口縁部内外面強い横ナデにより、内面凹差を持つ。口唇部やや丸味を帯びる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	6c前半
13.SD07-45											
47-46	埴輪	円筒	5以下	-	-	(5.6)	外面8本/2cm程の縦ハケ。突帯は断面底部が丸味を帯びる台形状を呈する。内面斜位のハケ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半
13.SD07-46											
47-47	埴輪	梨園形	5以下	-	-	(9.1)	外面11本/2cm程の縦ハケ調整。内面8本/2cmの斜位及び横ハケ調整。頸部は断面三角形の突帯を付す。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-47											
47-48	埴輪	円筒	5以下	-	-	(14.4)	外面10本/2cm程の縦ハケ調整。下部に粘土の盛り上がりが見られる。突帯は断面底部形状を呈し、上部を強く横ナデしたため、扁平になる。円形の透かし孔を持つ。内面10本/2cmの斜位のハケ調整。	白色粒子・黒色粒子・長石・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	6c前半
13.SD07-48											
48-49	埴輪	円筒	5以下	-	-	(15.5)	外面10本/2cm程の縦ハケ。突帯は断面底部が丸味を帯びる台形状を呈する。内面横線を残し、その上から斜位のハケ。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13.SD07-49											

探検番号 図説番号	種別	部類	残存率 (%)	口径 (測定 口径) (cm)	底径 (測定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
48-90	埴輪	円筒	5以下	—	—	(7.0)	外面 16 本/2cm 程の縦ハケ調整。非常に低い突帯が回り、円形の透かし孔を持つ。内面輪縁面を残す。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	褐色 (5YR6/8)	色調から生 出厚度か 6c前半
13-SD07-90	埴輪	円筒	5以下	—	—	(8.5)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。突帯は断面台形状を残す。内面輪縁面を残し、その上から斜位のハケ。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR5/4)	6c前半
48-51	埴輪	円筒	5以下	—	—	(8.4)	外面 8 ～ 10 本/2cm 程の縦ハケ。突帯は断面 端部が丸味を帯びる台形状を残す。内面 輪縁面を残し、その受けから斜位のハケ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13-SD07-51	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.6)	外面 10 本/2cm 程の縦ハケ。突帯は断面台 形状を残す。内面斜位のハケ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	褐色 (7.5YR5/6)	6c前半
48-52	埴輪	円筒	5以下	—	—	(7.0)	外面 12 ～ 14 本/2cm 程の縦ハケ調整。突帯 は台形状を残し、狭い平坦面に縦上の突帯 が見られる。円形の透かし孔が突帯に接し て穿たれている。内面ナデ調整。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13-SD07-52	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.3)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。突帯は断面台 形状を残す。内面輪ハケ。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR5/4)	6c前半
48-53	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.4)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。突帯は断面台 形状を残す。内面輪ハケ。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR5/4)	6c前半
13-SD07-53	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.1)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。突帯は断面台 形状を残す。内面輪ナデ。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
48-54	埴輪	円筒	5以下	—	—	(7.1)	外面 12 ～ 14 本/2cm 程の縦ハケ調整。円形 の透かし孔を持つ。内面斜位及び縦ナデ調 整。	白色粒子・黒色粒子 ・長石・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	6c前半
13-SD07-54	埴輪	円筒	5以下	—	—	(4.9)	外面 14 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面縦ナ デ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
48-55	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.1)	外面 10 本/2cm 程の縦ハケ。へう描き記号 が見られる。内面斜位のハケ。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半
13-SD07-55	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.4)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。内面ハケ調整 後ナデ。へう描き記号が見られる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半
48-56	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.6)	外面 10 本/2cm 程の縦ハケ調整。円形の透かし 孔を持つ。内面ナデ調整。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
13-SD07-56	埴輪	円筒	5以下	—	—	(4.0)	外面 15 ～ 16 本/2cm 程の縦ハケ調整。透かし 孔を持つ。内面斜位のナデ。	白色粒子・黒色粒子 ・長石	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	6c前半
48-57	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.2)	外面 8 ～ 10 本/2cm 程の縦ハケ。内面ハケ 調整後ナデ。内面にへう描き記号が見られ る。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR5/4)	6c前半
13-SD07-57	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.9)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。内面ハケ調整 後ナデ。へう描き記号が見られる。	白色粒子・小礫	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半
48-58	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.8)	外面 12 ～ 14 本/2cm 程の縦ハケ調整。円形 の透かし孔を持つ。内面ナデ調整。全体に 磨減している。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13-SD07-58	埴輪	円筒	5以下	—	—	(1.9)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ。内面ハケ調整 後ナデ。へう描き記号が見られる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
48-59	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.6)	外面 10 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面斜位及 び縦ナデ。底部凹凸がある。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	6c前半
13-SD07-59	埴輪	円筒	5以下	—	—	(7.6)	外面 10 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面斜位 のナデ後。最下端付近ナデ。	白色粒子・黒色粒子 ・長石・小礫	良好	明赤褐色 (2.5YR5/6)	色調から生 出厚度か 6c前半
48-60	埴輪	円筒	5以下	—	—	(8.0)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面強い縦 ナデ。底部凹凸がある。	白色粒子・石屑 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	6c前半
13-SD07-60	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.7)	外面 14 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面ナデ調 整。底部は凹凸が見られる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
48-61	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.5)	内外面ナデ調整。底部は凹凸が見られる。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	6c前半
13-SD07-61	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.9)	外面 8 ～ 9 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面斜 位のナデ後。最下端横ナデ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	6c前半
48-62	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.7)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面ハケ 調整後ナデ。底部凹凸が見られる。	白色粒子・黒色粒子 ・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
13-SD07-62	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.6)	外面 8 本/2cm 程の縦ハケ調整。内面斜位 のナデ。	白色粒子・黒色粒子 ・赤色粒子	良好	褐色 (7.5YR6/6)	6c前半

探検番号 図版番号	種別	部材	残存率 (%)	口径 (測定 口径) (cm)	底径 (測定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
49-76 14-SD07-76	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.3)	外面10本/2cm程の縦ハケ調整。内面斜位のナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
50-77 14-SD07-77	埴輪	円筒	5以下	—	—	(4.9)	外面縦ハケ調整。磨滅が激しい。縦ハケ後横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
50-78 14-SD07-78	埴輪	円筒	5以下	—	—	(6.2)	外面縦ハケ調整後、横ナデ。内面縦ナデ。	白色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	6c前半
50-79 14-SD07-79	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.8)	外面8本/2cm程の縦ハケ調整。内面斜位のナデ。底部平坦に仕上げられる。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
50-80 14-SD07-80	埴輪	円筒	5以下	—	—	(5.1)	外面ハケ調整。内面斜位のナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	6c前半
50-81 14-SD07-81	埴輪	円筒	5以下	—	—	(4.1)	外面15本/2cm程の縦ハケ調整。内面縦ナデ。底部凹凸が見られる。	白色粒子・黒色粒子・片岩	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
50-82 14-SD07-82	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.4)	外面15本/2cm程の縦ハケ調整。内面斜位のナデ。	白色粒子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	6c前半
50-83 14-SD07-83	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.6)	外面8本/2cm程の縦ハケ調整。内面斜位のナデ。底部平坦に仕上げられる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
50-84 14-SD07-84	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.4)	外面15～16本/2cm程の縦ハケ調整。内面縦ナデ。底部凹凸が見られる。	白色粒子・黒色粒子・小礫	良好	褐色 (7.5YR7/6)	6c前半
50-85 14-SD07-85	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.3)	外面ハケ調整。内面縦ナデ。断面折り返される。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半
50-86 14-SD07-86	埴輪	円筒	5以下	—	—	(3.1)	外面8本/2cm程の縦ハケ調整。内面ナデ調整後、最下部を横ハケ調整。底部はナデられ平坦になる。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	6c前半

第8号溝跡—SD08

遺構（第42・43図）

位置：D-4グリッドに位置する。重複関係：第1号方形周溝墓、第7号溝跡と重複する。第7号溝跡より古く、第1号方形周溝墓との先後関係は不明である。長軸方位：走行方位はN-14°-E。規模・形状：検出された長さは4.15m、上幅0.25～0.55mで、深さは0.23mである。ほぼ直線的な溝跡である。断面形は丸みを帯びる底面から緩やかに立ち上がる。覆土：2層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

遺構の位置や形状及び重複する他の遺構との先後関係から、平安時代と考えられる。

第9号溝跡—SD09

遺構（第51図）

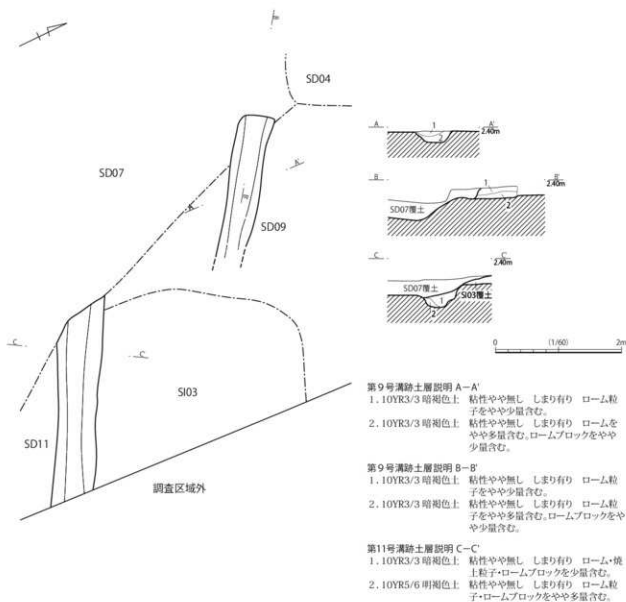
位置：D-4グリッドに位置する。重複関係：第7号溝跡と重複し、それより古い。長軸方位：走行方位はN-54°-Wである。規模・形状：検出された長さは2.23mで上幅は0.50m、深さは0.17mである。緩い屈曲がみとめられるが、断面は平坦な底面から斜めに短く立ち上がる。覆土：2層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

遺構の形状及び重複する他の遺構との先後関係から、古墳時代前期と考えられる。



第51図 第9・11号溝跡実測図（SD09・SD11）

第 10 号溝跡－SD10

遺構 (第 52 図 図版 4－4・5・8)

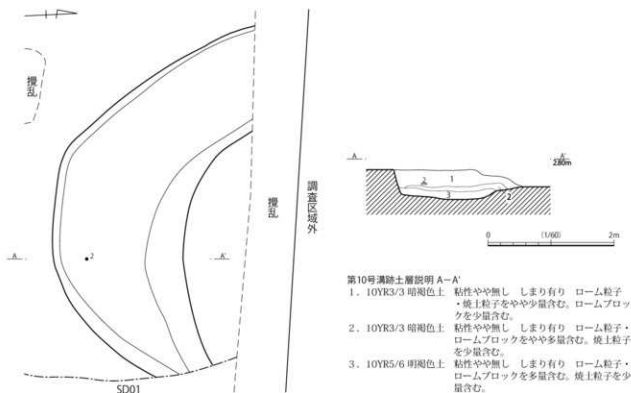
位置：C－1・2 グリッドに位置する。重複関係：第 1 号溝跡と重複するが、先後関係は不明である。長軸方位：不明。規模・形状：屈曲する溝跡で、検出された長さは約 6.30 m である。土幅は第 1 号溝跡と接する東側が最も狭く 0.87 m、そこから屈曲部に向かい徐々に幅を増して行き、北側に屈曲した後は溝幅はほぼ一定で 2.00 m 程である。深さは 0.39 m である。平坦な底面から北側では緩やかに、南側では斜めに直線的に立ち上がる。覆土：3 層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。人為的か自然堆積かは不明。

遺物 (第 53 図 第 16 表 図版 14)

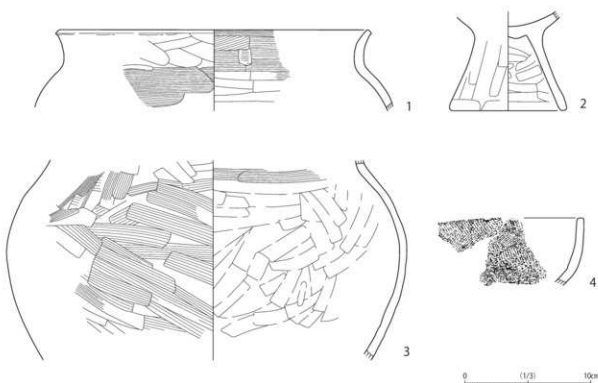
出土状況：遺物は覆土中から出土している。1～3 は甕である。1・3 は胎土と色調から、同一個体と思われる。4 は鉢で口縁部に縄文が施される。いずれも古墳時代前期の土師器であろう。

時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



第 52 図 第 10 号溝跡実測図 (SD10)



第 53 図 第 10 号溝跡出土遺物実測図 (SD10)

第 16 表 第 10 号溝跡出土遺物観察表

採掘番号 四角番号	種別	部材	残存率 (%)	口径 (部定 口径) (m)	底径 (部定 底径) (m)	器高 (残存 高) (m)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
53-1 14SD10-1	土師器	甕	5 以下	(25.0)	—	(6.1)	外面横ハケ後、口縁部横ナデ、内面横ハケを現す。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
53-2 14SD10-2	土師器	台付甕	5 以下	—	(9.4)	(7.8)	外面縦ナデ、内面横ナデ、接合部下方に空や突出する。	白色粒子・黒色粒子・小磯・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
53-3 14SD10-3	土師器	甕	15	—	—	(15.8)	外面上から下へ、斜位にハケ調整。内面縦部横ナデ、頸部ハケ目を現す。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
53-4 14SD10-4	土師器	鉢	5 以下	—	—	(5.2)	口縁部直下に華蓋引状織文が流る。口脣部にLRを施文。内面横ミガキ。	白色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前

第 11 号溝跡—SD11

遺構 (第 51 図)

位置：D-4 グリッドに位置する。重複関係：第 3 号住居跡、第 7 号溝跡と重複する。第 3 号住居跡より新しく、第 7 号溝跡より古い。長軸方位：走行方位は N-63°-W。規模・形状：検出された長さは 2.91 m、上幅 0.61 ~ 0.72 m、深さは 0.36 m で、直線的な溝跡である。覆土：2 層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物

出土状況：本遺構から遺物は出土していない。

時期

遺構の位置や形状及び重複する他の遺構との先後関係から、平安時代と考えられる。

第3節 土坑

第1号土坑—SK01

遺構（第54図 図版5—8）

位置：D—3グリッドに位置する。長軸方位：長軸方位はN—70°—Eである。規模・形状：第2号溝跡に囲まれた内側に存在する。長軸0.85m、短軸0.65m、深さは0.36mで、平面形は、東側が突出する隅丸方形を呈する。丸みを帯びる底面から緩やかに立ち上がる。覆土：3層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物

出土状況：土師器の小片が出土しているが、図化し得るものは無かった。

時期

遺構の位置や形状から、古墳時代前期と考えられる。

第2号土坑—SK02

遺構（第54図 図版6—1）

位置：D—3グリッドに位置する。長軸方位：長軸方位N—45°—Wである。規模・形状：長軸0.75m、短軸0.58m、深さ0.39m、平面形態は、楕円形を呈する。断面形は、南東側を除き、丸みを帯びる底面からやや内湾しながら立ち上がる。南東側は他所に比べ緩やかに立ち上がる。

遺物

出土状況：土師器の小片が出土しているが、図化し得るものは無かった。

時期

時期は不明である。

第3号土坑—SK03

遺構（第54図 図版6—2・3）

位置：A・B—3グリッドに位置する。重複関係：第7号溝跡と重複し、それより古い。長軸方位：長軸方位N—82°—Eである。規模・形状：長軸4.16m、短軸1.72m、深さ0.60m、平面形は略楕円形を呈する。断面形は平坦な底面から、非常に緩やかに立ち上がる。

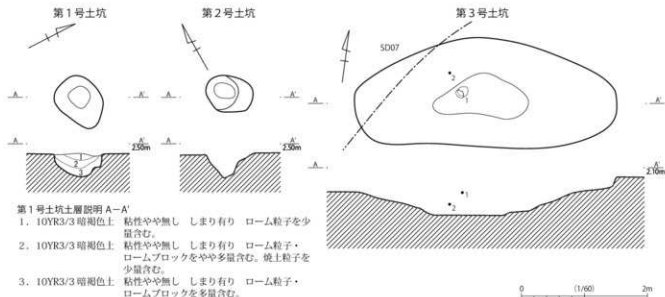
備考：軸方位は異なるが第1号方形周溝墓の北西溝に接するように築かれていることから、何らかの関係があったものと思われる。

遺物（第55図 第17表 図版15）

出土状況：遺物は覆土中から出土している。1は覆土の上層から出土したほぼ完形に近い甕で、口縁部を南西側に向け出土した。覆土形成の過程で人為的に配置されたものと思われる。2・3は甕の口縁部、4は壺の底部である。5は小型器台の口縁部。6は口縁部が折り返される壺。7は続十王台式となる壺の頸部である。

時期

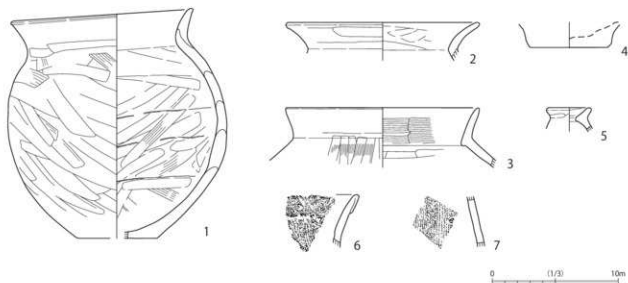
出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



第54図 第1～3号土坑実測図 (SK01・SK02・SK03)

第1号土坑土層説明 A-A'

- 10YR3/3 暗褐色土 粘性や砂無し しまり有り ローム粒子を少量含む。
- 10YR3/3 暗褐色土 粘性や砂無し しまり有り ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子を少量含む。
- 10YR3/3 暗褐色土 粘性や砂無し しまり有り ローム粒子・ロームブロックを多量含む。



第55図 第3号土坑出土遺物実測図 (SK03)

第17表 第3号土坑出土遺物観察表

採回番号	種類	器種	残存率 (%)	口径 (測定口径) (cm)	底径 (測定底径) (cm)	総高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
55-1	土師器	甕	90	14.5	6.4	18.2	外面ハケ調整後、胴部中位は横位、下下は斜位のナデ。内面底部付近ハケ調整、胴部横ナデ。口縁部内外面強い横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
55-2	土師器	甕	5以下	(15.4)	—	<3.0	内面ハケ調整後、口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	明赤褐色 (5YR5/6)	古墳前
55-3	土師器	甕	5以下	(15.4)	—	<4.7	外面胴部上端縦ハケ。口縁部横ナデ。内面口縁部横ハケ。	白色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	褐色 (7.5YR6/6)	古墳前
55-4	土師器	甕	5以下	—	(6.2)	<2.0	内外面磨滅が激しい。外面裡かにミガキの痕跡が認められる。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (7.5YR6/6)	古墳前
55-5	土師器	甕台	10	3.6	—	<1.8	受け部内外面横ナデ。中央孔やや歪む。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	灰黄褐色 (10YR4/2)	古墳前
55-6	土師器	甕	5以下	—	—	—	外面頸部縦ハケ。口縁部折り返され、横ナデ。内面横ナデ。外面赤彩画あり。	黒色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (7.5YR7/6)	古墳前
55-7	土師器	甕	5以下	—	—	—	スリットを作った8本一単位位の縦横文により縮込前後、同一工具で横走する文様を描いている。内面縦かなハケを残す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	続土台式古墳前

第4節 井戸

第1号井戸跡—SE01

遺構 (第56図 図版6-4)

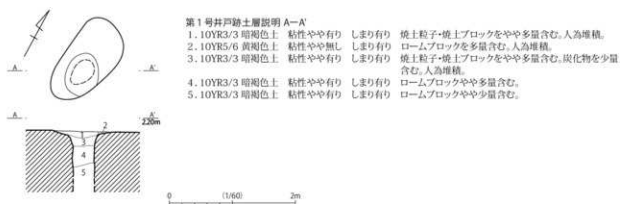
位置：D・E-2グリッドに位置する。規模・形状：長軸1.43m、短軸0.79m、深さは0.72mまで確認できた。平面形は南北に長い不整楕円形を呈する。ほぼ垂直に立ち上がった後、確認面付近で漏斗状に広がる。覆土：5層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は4・5層が自然堆積によるもので、その上の1～3層は人為堆積によるものと考えられる。

遺物

出土状況：土師器の小片が出土しているが、図化し得るものは無かった。

時期

時期は不明である。



第56図 第1号井戸跡実測図 (SE01)

第5節 方形周溝墓

第1号方形周溝墓—SZ01

遺構（第57～60図 図版6-5～8、7-1～4）

位置：A～D-3～5グリッドに位置する。重複関係：第6号住居跡と重複しそれより新しい。第8号溝跡とも重複するが、その先後関係は不明である。規模・形状：周溝の内辺は直線的であり、隅はやや丸味を帯びる。外辺は北側から東側には緩やかな弧を描き隅も丸味を帯びる。北東の外辺は中央付近から南側では急激に内側に切り込み、溝幅を減じ調査区外へ延びる。西側の外辺は谷部への変換点付近であるためか、乱れている。

四隅のうち確認できたのは東隅と西隅で、北隅は攪乱により壊され、南隅は調査区外に位置している。東隅はやや丸味を持つが、直角に近い。一方西隅はやや開き気味で鈍角になる。西隅外辺は第7号溝跡と一体化してしまい不明確である。おそらく北西から延びた溝は西隅で鈍角に南側に曲がり、徐々に溝幅を広げていくようである。南西辺は、方形周溝墓主軸ライン手前でくびれ、溝幅を減じ、調査区外へと延びる。

方台部は長軸19.75m、短軸14.75mで長方形を基調とし、南西側が張り出し、前方後方形に近い形状を呈している。方台部は攪乱が激しく盛土の痕跡を確認することはできなかった。但し方形周溝墓に先立ち同所には住居跡が存在していた。特に第5号住居跡の1層としたものに関しては、方形周溝墓構築に伴う盛土の一部の可能性がある。

周溝部は溝上幅の狭い南西部分で底面が幅狭になるが、その他のところでは総じて幅広である。この幅広の底面から内湾あるいは外反気味に立ち上がる。立ち上がりの内外で目立った違いを見出せない。覆土：7層に分層した。堆積状況はレンズ状の自然堆積である。またC-C'・E-E'で見られるように基本層序のA～C層の堆積が見られることから、溝が完全に埋まりきったのはかなり後のことであったと思われる。

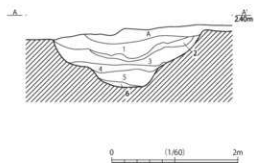
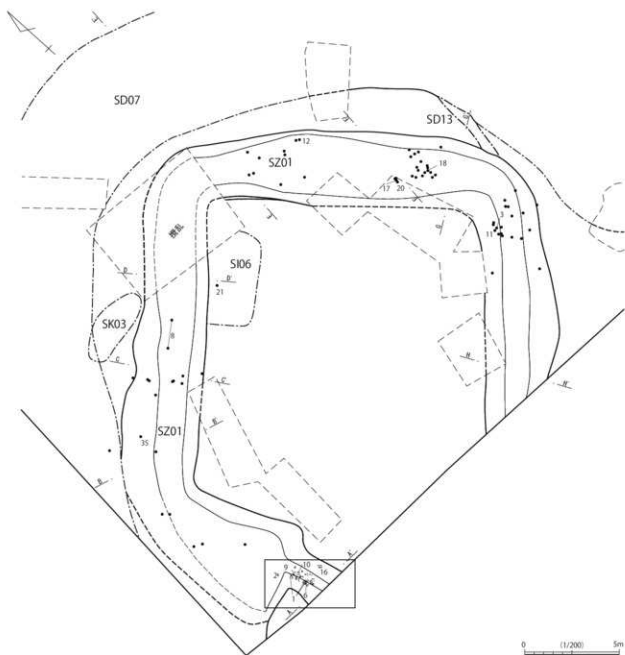
遺物（第61・62・63図 第18表 図版15・16）

出土状況：遺物は、覆土中層から上層にかけて出土している。特に周溝南西側の張り出し部の中層からはまとまって出土している。同所では土器とともに焼土も検出されている。その他の場所では東側隅付近にやや集中して遺物が出土している。

1・2・6・9・10・16は周溝南西側の張り出し部の中層から出土した。1～11、27～30は壺である。2は頸部の屈曲部には3個一対の円形浮文が付されている。3は頸部の屈曲部に輪積痕を残し、その上に刺突文が巡る。4はバレススタイルの壺である。8・11は底部に木葉痕が見られる。29・30は櫛歯状工具で縦区画と区画内に充填する波状文とを描いた続十王台式の壺である。12～16は甕である。17～19・31は高環である。19はバレススタイルの高環である。20～23は器台である。24は鉢、25・26は埴である。いずれも古墳時代前期の土師器である。35は緑色凝灰岩製の勾玉である。32～34は縄文土器であるが流れ込みであろう。

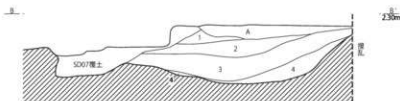
時期

出土遺物から、古墳時代前期と考えられる。



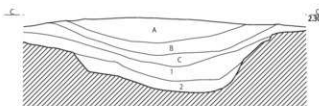
- 第1号方形周溝墓土層説明 A-A'
- | | | | |
|-----------------|--------|-------|---------------------------------|
| A. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・焼土粒子を少量含む。 |
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | 焼土粒子をやや少量含む。ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | 焼土粒子を多量含む。炭化物粒子を少量含む。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |
| 4. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックを多量含む。炭化物粒子を少量含む。人為堆積。 |
| 5. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロック・炭化物粒子を少量含む。 |
| 6. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックをやや多量含む。 |

第57図 第1号方形周溝墓実測図(1)・遺物分布図(SZ01)



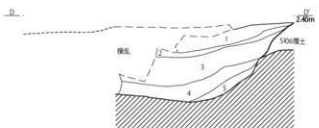
第1号方形周溝墓土層説明 8-B'

- | | | | | |
|----|--------------|--------|-------|---|
| 1. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ロームブロックをやや少量含む。 |
| 2. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ロームブロックをやや多量含む。ローム粒子をやや少量含む。人為堆積。 |
| 3. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ロームブロックを多量含む。ローム粒子をやや少量含む。焼土粒子を少量含む。人為堆積。 |
| 4. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |



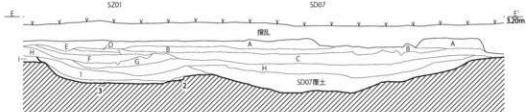
第1号方形周溝墓土層説明 C-C'

- | | | | | |
|----|--------------|--------|-------|----------------------------|
| A. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。 |
| B. | 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックを多量含む。ローム粒子をやや多量含む。 |
| C. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 1. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・炭化物粒子を少量含む。 |
| 2. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを少量含む。 |



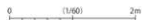
第1号方形周溝墓土層説明 D-D'

- | | | | | |
|----|--------------|--------|-------|---|
| 1. | 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子・白色粒（火山灰と考えられる）を少量含む。人為堆積。 |
| 2. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。焼土粒子（火山灰と考えられる）を少量含む。 |
| 3. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | 焼土粒子をやや少量含む。ローム粒子を少量含む。 |
| 4. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を少量含む。 |
| 5. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性有り | しまり有り | ロームブロックをやや多量含む。ローム粒子をやや少量含む。 |

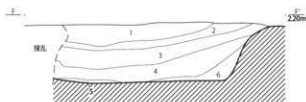


第1号方形周溝墓土層説明 E-E'

- | | | | | |
|----|--------------|--------|-------|-----------------------|
| A. | 基本層序を参照 | | | |
| B. | 基本層序を参照 | | | |
| C. | 基本層序を参照 | | | |
| D. | 基本層序を参照 | | | |
| E. | 基本層序を参照 | | | |
| F. | 基本層序を参照 | | | |
| G. | 基本層序を参照 | | | |
| H. | 基本層序を参照 | | | |
| I. | 基本層序を参照 | | | |
| 1. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 2. | 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや少量含む。 |
| 3. | 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。 |

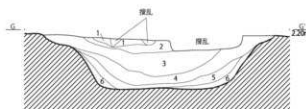


第58図 第1号方形周溝墓実測図(2)(SZ01)



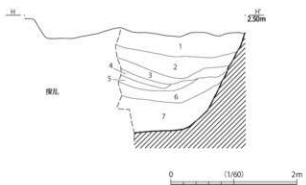
第1号方形周溝墓土層説明 F-F

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|---------------------------------|
| 1. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックを多量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロック・焼土粒子を少量含む。 |
| 3. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 4. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・焼土粒子を少量含む。 |
| 5. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。 |
| 6. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックを多量含む。 |



第1号方形周溝墓土層説明 G-G

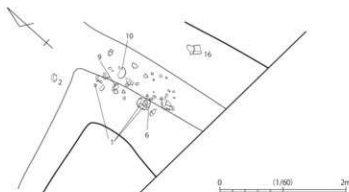
- | | | | |
|-----------------|--------|-------|---------------------------------|
| 1. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・ロームブロック多量含む。焼土粒子を少量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロック・焼土粒子を少量含む。 |
| 3. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 4. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子・焼土粒子を少量含む。 |
| 5. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子をやや少量含む。ロームブロックを少量含む。 |
| 6. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックを多量含む。 |



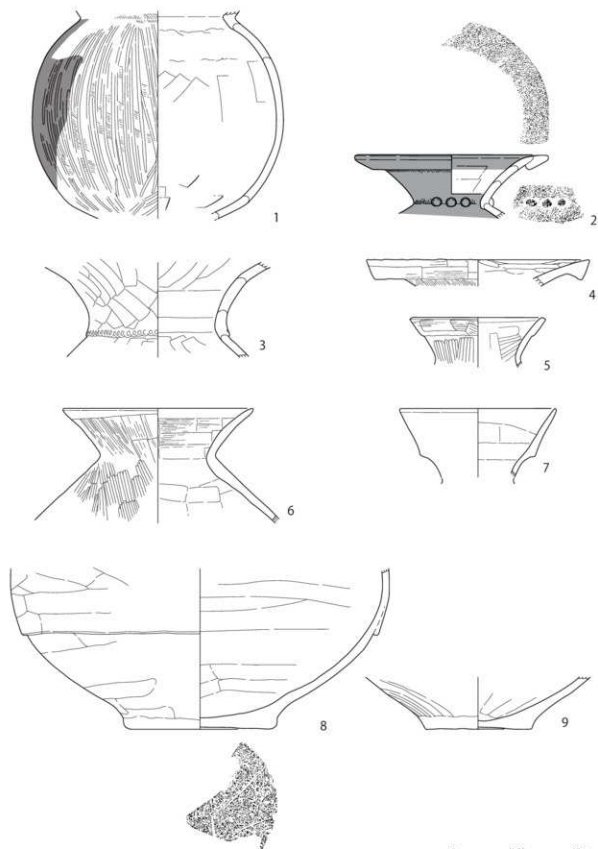
第1号方形周溝墓土層説明 H-H

- | | | | |
|-----------------|--------|-------|---|
| 1. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ロームブロックを多量含む。 |
| 2. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックをやや多量含む。焼土粒子・白色粒子(火山灰と考えられる)を少量含む。 |
| 3. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子・ロームブロックを多量含む。焼土粒子を少量含む。 |
| 4. 10YR5/6 明褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 5. 10YR3/2 黒褐色土 | 粘性やや有り | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |
| 6. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ロームブロックを少量含む。 |
| 7. 10YR3/3 暗褐色土 | 粘性やや無し | しまり有り | ローム粒子を少量含む。 |

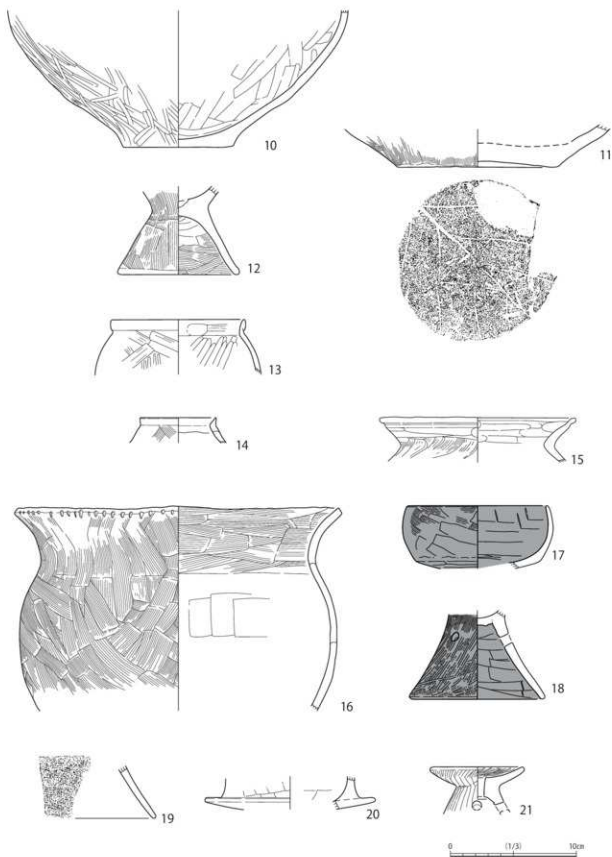
第59図 第1号方形周溝墓実測図(3)(SZ01)



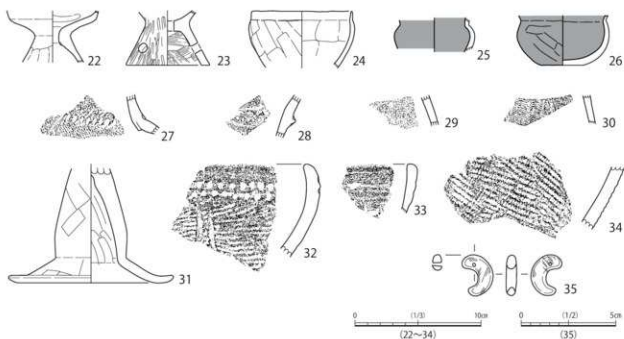
第60図 第1号方形周溝墓微細図(SZ01)



第 61 图 第 1 号方形周溝墓出土遺物實測圖 (1) (SZ01)



第 62 图 第 1 号方形周溝墓出土遺物實測圖 (2) (SZ01)



第 63 図 第 1 号方形周溝墓出土遺物実測図 (3) (SZ01)

第 18 表 第 1 号方形周溝墓出土遺物観察表

検出番号 図版番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定 口径) (cm)	底径 (推定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
61-1 15-SZ01-1	土師器	甕	15	—	—	(16.4)	外面斜位のハケ調整後、縦ミガキ。内面横ナデ。頸部付近輪轆面を残す。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
61-2 15-SZ01-2	土師器	甕	10	(15.4)	—	(5.0)	口縁部折り返される。胴部上部に1本が施した後、顔面部に3個一列の円形浮文を付す。頸部無文部は赤彩される。口縁部内部に1本を施文する。	白色粒子・黒色粒子・灰石	良好	褐色 (7.5YR7/6)	古墳前
61-3 15-SZ01-3	土師器	甕	5以下	—	—	(7.5)	外面頸部下端に輪轆面を残し、その上に対列が施る。ナデ調整される。内面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	褐色 (7.5YR6/6)	古墳前
61-4 15-SZ01-4	土師器	甕	5以下	(17.0)	—	(2.1)	外面頸部縦ハケ。内面縦ハケ。外面赤彩される。ハレス造りと思われる。	白色粒子・チャート・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
61-5 15-SZ01-5	土師器	甕	5以下	(10.2)	—	(3.9)	外面頸部縦ハケ後、口縁部折り返し。口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
61-6 15-SZ01-6	土師器	甕	20	(15.0)	—	(9.1)	外面口縁部から頸部縦ハケ、胴部縦ナデ。内面胴部横ナデ。口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
61-7 15-SZ01-7	土師器	甕	5以下	(12.2)	—	(5.5)	口縁部内外面赤彩される。	黒色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (5YR6/6)	古墳前
61-8 15-SZ01-8	土師器	甕	10	—	(11.0)	(12.7)	外面ハケ調整後ナデ。胴部下位に輪轆面を残す。内面横ナデ。底部に木炭面を残す。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
61-9 15-SZ01-9	土師器	甕	5以下	—	8.4	(4.1)	外面縦ミガキ。内面ナデ。外面赤彩される。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
62-10 16-SZ01-10	土師器	甕	5以下	—	8.8	(10.8)	外面斜位及び縦ミガキ。内面ナデ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
62-11 16-SZ01-11	土師器	甕	5以下	—	12.6	(3.0)	外面底部付近縦ハケ後、横ミガキ。内面被熱により割れ。底部外面に木炭面を残す。	白色粒子・黒色粒子・チャート・シャモット	良好	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	古墳前
62-12 16-SZ01-12	土師器	付付費	5	—	9.6	(7.0)	外面縦ハケ。内面横ハケ。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	明褐色 (7.5YR5/6)	古墳前
62-13 16-SZ01-13	土師器	甕	5以下	(10.4)	—	(4.3)	口縁部折り返される。内外面ナデ。	白色粒子・黒色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
62-14 16-SZ01-14	土師器	甕	5以下	(6.0)	—	(2.0)	外面斜位のハケ調整。内面輪轆面を残す。	黒色粒子・赤色粒子	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前

探検番号	種別	階層	残存率 (%)	口径 (測定口径) (m)	底径 (測定底径) (m)	器高 (残存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
62-15	土師器	台付甕	5以下	(15.4)	—	(3.5)	外面割部斜位のハケ調整後、口縁部内外面横ナデ。S字状口縁付付篋。	白色粒子・黒色粒子・黒雲母	良好	赭灰黄色 (2.5Y5/2)	古墳前
16-SZ01-15											
62-16	土師器	甕	10	(13.0)	—	(16.1)	外面口縁部から胴部縦ハケ後割部斜位及び横ハケ。口縁部にナゼミを付す。内面横ハケ後、胴部横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	にがい黄褐色 (10YR5/4)	古墳前
16-SZ01-16											
62-17	土師器	高坏	30	(11.0)	—	(5.0)	輪郭を示す内面外部である。内外面ハケ調整後、ミガキ。内面赤彩される。	白色粒子・黒色粒子	良好	にがい褐色 (7.5YR6/4)	古墳前
16-SZ01-17											
62-18	土師器	高坏	50	—	10.8	(7.0)	外面ハケ調整後、縦ミガキ。内面ハケ調整後横ナデ。胴部中央やや上、等間隔に円形透かしが3ヶ所あけられる。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	明褐色 (10YR6/6)	古墳前
16-SZ01-18											
62-19	土師器	高坏	5以下	—	—	—	外面非常に細い沈痾で透灰文と縦線文(8本以上)による横線文を描く。ハレスタイルの高坏。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	黄灰色 (2.5Y4/1)	古墳前
16-SZ01-19											
62-20	土師器	器台	5	—	—	(2.6)	所遺北陽系の特徴な器台。受け部ミガキを施す。	白色粒子・黒色粒子	良好	褐色 (5YR6/6)	古墳前
16-SZ01-20											
62-21	土師器	器台	30	7.5	—	3.7	受け部内外面横ミガキ。胴部外面縦ミガキ。透かしは、4孔と思われる。受け部に焼成時の黒煙が認められる。	白色粒子・黒色粒子・シャモット	良好	にがい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
16-SZ01-21											
63-22	土師器	器台	25	—	—	(4.0)	内外割減が激しい。	白色粒子・黒褐色土・辰石	良好	褐色 (7.5YR4/3)	古墳前
16-SZ01-22											
63-23	土師器	器台	30	—	(6.1)	(4.3)	外面縦ミガキ、内面横ハケ。受け部内外面及び胴部外面赤彩される。円形透かしは等間隔に3孔。	白色粒子・黒色粒子	良好	にがい赤褐色 (2.5YR4/4)	古墳前
16-SZ01-23											
63-24	土師器	鉢	15	(8.0)	—	(4.5)	外面縦ハケ後口縁部内外面横ナデ。	白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にがい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
16-SZ01-25											
63-25	土師器	皿	10	—	—	(2.7)	内外面赤彩される。	白色粒子・黒色粒子	良好	にがい黄褐色 (10YR7/3)	古墳前
16-SZ01-24											
63-26	土師器	皿	35	—	3.2	3.9	内外面割減が激しい。	黒色粒子・シャモット	良好	褐色 (7.5YR7/6)	古墳前
16-SZ01-26											
63-27	土師器	甕	5以下	—	—	—	胴部外れ部を抜き取らぬ引縄文が施され、その上に木口状工具による刺突列。	白色粒子・赤色粒子・シャモット	良好	にがい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
16-SZ01-27											
63-28	土師器	甕	5以下	—	—	—	胴部に断面三角形の隆帯を巡らし、上下に竹貫による刺突を巡らす。	黒色粒子・シャモット	良好	にがい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
16-SZ01-28											
63-29	土師器	甕	5以下	—	—	—	外面7本一単位の縦線状工具により縦位に区画した後、波状文を施す。	白色粒子・黒色粒子・石炭	良好	にがい黄褐色 (10YR7/4)	続十王台式古墳前
16-SZ01-29											
63-30	土師器	甕	5以下	—	—	—	外面縦線状工具により縦区画した後、波状文を充填する。内面割減が激しい。	白色粒子・黒色粒子	良好	黄褐色 (2.5Y7/3)	続十王台式古墳前
16-SZ01-30											
63-31	土師器	高坏	50	—	(13.1)	(9.4)	外面胴部縦ミガキ。胴部横ナデ。	白色粒子・赤色粒子	良好	褐色 (5YR6/8)	古墳前
16-SZ01-31											
63-32	縄文土器	深鉢	5以下	—	—	(7.3)	口縁部に沿って円形刺突が2列通り、以下LRを地文に平行沈線が重なる。	白色粒子・辰石・小礫	良好	明褐色 (7.5YR5/6)	加賀川EII式縄文中
16-SZ01-32											
63-33	縄文土器	深鉢	5以下	—	—	(3.8)	口縁部直下に沈線が1条通りそこから平行線が垂下される。	白色粒子・黒色粒子	良好	にがい褐色 (7.5YR5/4)	称名寺2式縄文後
16-SZ01-33											
63-34	縄文土器	深鉢	5以下	—	—	(4.9)	地文LRを縦線文。	白色粒子・赤色粒子・小礫	良好	赤褐色 (5YR4/6)	—
16-SZ01-34											
63-35	石製品	勾玉	—	縦 2.15	横 1.6	厚 0.5	所謂「C」字状の勾玉で、尾部に比べ道部が細くなる。道部の穿孔は中心よりやや下部に位置している。表面は細かな研削が見られるが、腹の部分はそれ以前の擦削が残っている。	—	—	—	緑色凝灰岩
16-SZ01-35											

第6節 古墳

第1号古墳（南原8号墳）－SS01

遺構（第64図 図版7-5）

位置：C・D-2・3グリッドに位置すると想定される円墳である。重複関係：僅かに残存する周溝の痕跡は第5・11号溝跡と重複し、これらより新しい。規模・形状：墳丘は認められず周溝もその痕跡を僅かに確認できるに過ぎない。想定される周溝の外周径は20m前後と思われる。

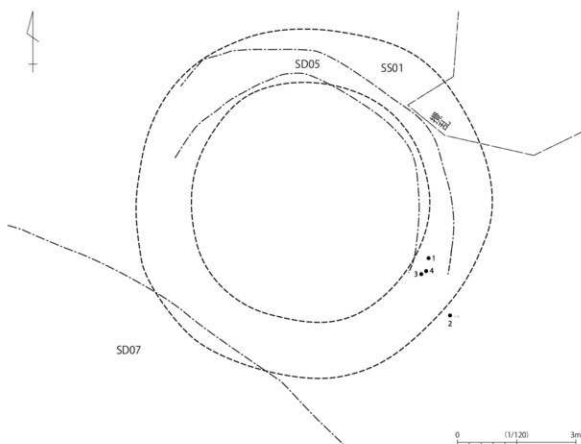
備考：前述したように第7号溝跡の外周に沿って埴輪が集中して流れ込んだ様子が伺われることから、崩れた墳丘から同溝へ埴輪が流れ込んだものと思われる。

遺物（第65・66図 第19表 図版17・18）

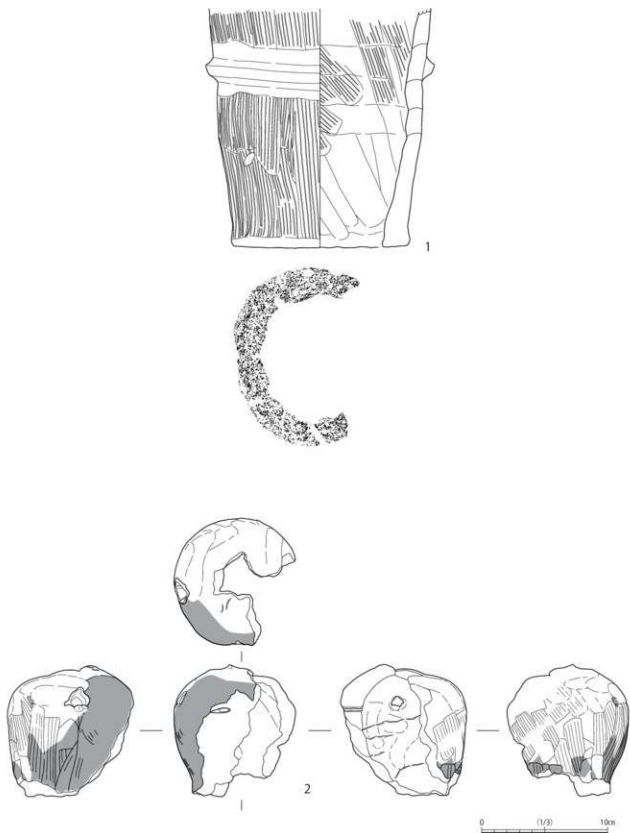
出土状況：遺物はいずれも第5号溝跡の第1層に相当する浅い位置から出土している。1は円筒埴輪で、6世紀前半のものである。2は人物埴輪で、女性の頭部であり赤彩痕がある。遺構確認面で検出した。3は鶏形埴輪の頭部から頸部である。貼付表現された鶏冠・嘴・肉髯や、穿孔で表現された目の他に、刺突で表現された耳穴がみられる。4は鶏形埴輪の尾部から円筒部であり、3と同一個体である。3・4は近接して出土している。この鶏形埴輪は5世紀末から6世紀初頭のものと考えたい。

時期

出土遺物から、古墳時代後期と考えられる。



第64図 第1号古墳遺物分布図（SS01）



第65图 第1号古墳出土遺物実測図(1)(SS01)



第 66 图 第 1 号古坟出土遗物实测图 (2) (SS01)

第 19 表 第 1 号古墳出土遺物観察表

探検番号 図版番号	種別	器種	残存率 (%)	口径 (測定 口径) (cm)	底径 (測定 底径) (cm)	器高 (残存 高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
65-1 17SSD1-1	埴輪	円筒	10	—	(14.2)	18.9	外面 8 本 /2cm の縦ハケ調。突帯は断面 台形状を呈し横ナデされる。内面輪縁が 残す。中径以上は 8 本 /2 cm の斜色のハケ 調整。下位は斜位のナデ及び微細面が見る。	白色粒子・黒色粒 子	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	6c 前
65-2 17SSD1-2		形象 人物	5 以下	—	—	—	人物輪縁女子の顔の部分。赤彩される。耳 には粘土で耳飾を表したと思われる。	白色粒子・黒色粒 子・赤色粒子・小 礫	良好	赤褐色 (10R4/4)	6c 前
66-3 18SSD1-3	埴輪	形象 器・ 腹部～ 腹部	—	—	—	—	腹部から腹部が遺存する。中央で腹部から 腹部にむけて、内側接合し、成形している。 内面は輪縁・微細面・斜り面を残す。外 面は横ナデされる。羽は洗擦で表取される。 腹部は露冠・嘴・内側は粘土を粘付表取さ れている。嘴は先端部に洗擦で切込みがな される。目は穿孔で表取される。内側の縁 には斜突で耳穴が表取される。	白色粒子・黒色粒 子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	5c 末 ～6c 前
66-4 18SSD1-4		形象 器・ 尾部～ 円筒部	—	—	—	—	3 ことの接合点は長い同一個体の尾部から円 筒部である。尾部は円筒部から連続して成 形し、ナデ調整され、中央に仕上げている。 円筒部は外面縦ハケ後、断面台形状の突帯 を粘付、その上下を横ナデする。突帯に接 するように円筒の透かし孔を持つ。内面は 縦位及び斜位のナデ。	白色粒子・黒色粒 子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	5c 末 ～6c 前

第 7 節 火葬墓

第 1 号火葬墓—FP01

遺構 (第 67 図 図版 7—6)

位置：B—4 グリッドに位置する。長軸方位：N—79°—E。規模・形状：長軸 1.00 m、短軸 0.75 m、深さ 0.26 m で平面形は不整形形を呈する。断面形は北東側をのぞき平坦な底面から直線的に斜めに立ち上がる。北東側は緩やかにやや凹凸を持って立ち上がる。壁は被熱しており、確認面で厚さ約 0.02 m の焼土層が見られた。この焼土層は、底面に向かうにつれ徐々に幅を減ずる。覆土：4 層に分層した。人為的か自然堆積かは不明。覆土中には焼土粒子や炭化粒子は多量に認められたが、骨片は検出できなかった。

備考：壁際に焼土壁が巡る構造から、骨片は検出していないが、火葬墓と思われる。その場合、北東側が焚口であろう。

遺物

出土状況：土師器の小片が出土しているが、図化し得るものは無かった。

時期

遺構の形状から、平安時代と考えられる。



第 67 図 第 1 号火葬墓実測図 (FP01)

第8節 ピット

第1号ピットーP01

遺構 (第68図 図版7-7)

位置: D-2 グリッドに位置する。長軸方位: N-31°-W。規模・形状: 長軸0.45 m、短軸0.39 m、深さ0.47 mである。平面形は略円形で、やや丸みを帯びる底面から直線的に立ち上がる。覆土: 3層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

備考: 当初覆土の類似から第2号ピットと組み合わせたり、掘立柱建物跡等を想定して周辺を精査したが、他のピットを検出することができなかった。

遺物

出土状況: 本遺構から遺物は出土していない。

時期

覆土の類似から、第2号ピットと近い時期即ち、古墳時代前期以前の所産である。

第2号ピットーP02

遺構 (第68図)

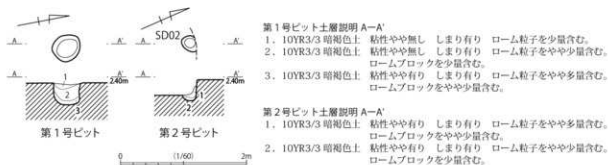
位置: D-3 グリッドに位置する。重複関係: 第2号溝跡と重複し、それより古い。長軸方位: N-74°-E。規模・形状: 径約0.28 m、深さ0.33 mである。平面形は略円形を呈する。丸みを帯びる底面から直線的に立ち上がる。覆土: 2層に分層した。堆積状況から遺構内の覆土は自然堆積によるものと考えられる。

遺物

出土状況: 本遺構から遺物は出土していない。

時期

第2号溝跡より古いことから、古墳時代前期以前の所産である。

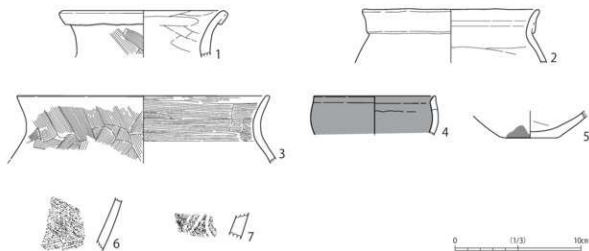


第68図 第1・2号ピット実測図 (P01・P02)

第9節 その他の出土遺物

遺構外出土遺物（第69図 第20表 図版18）

本調査地点での遺構外の出土遺物として、土師器6点と縄文土器1点を図示した。



第69図 遺構外出土遺物実測図

第20表 遺構外出土遺物観察表

図版番号	出土遺構	種別	器種	残存率 (%)	口径 (推定口径) (cm)	底径 (推定底径) (cm)	器高 (現存高) (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
69-1	表土一括	土師器	甕	5以下	(13.4)	—	(3.7)	内面及び頸部外面ハケ調整。口縁部は折り返し口縁部を平坦に仕上げた。	黒色粘子・長石・砂粒	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	古墳前
69-2	表土一括	土師器	甕	5以下	(14.1)	—	(4.2)	折り返し口縁外面に僅かに歯状面を残す。全体的に器面は磨滅している。	白色粘子・シヤモット	普通	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
69-3	表土一括	土師器	甕	5以下	(20.0)	—	(5.3)	外面頸部斜位にハケ調整。内面横位のハケ調整後、口縁部内外面横ナズ。口縁部やや丸味を持つ。	白色粘子・黒色粘子・小礫	良好	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	古墳前
69-4	表土一括	土師器	無頸甕	5以下	(9.0)	—	(3.1)	内外面横ミガキ。外面赤彩される。口縁部磨滅する。	黒色粘子・シヤモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	古墳前
69-5	表土一括	土師器	甕	5以下	—	4.6	(2.1)	内外面磨滅が激しい。外面僅かに縦ミガキの痕跡が認められる。	黒色粘子・シヤモット	良好	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	古墳前
69-6	表土一括	土師器	甕	5以下	—	—	(4.2)	外面輪郭不明の滑加菜による羽状縄文を強く。内面明確な横ハケ。	白色粘子・黒色粘子	良好	浅黄色 (2.5Y7/3)	続上王台式古墳前
69-7	表土一括	縄文土器	深鉢	5以下	—	—	—	先端丸い棒状工具により斜線及び同心円文を描く。	白色粘子・黒色粘子・長石	良好	褐色 (7.5YR6/6)	堀之内2式縄文後

第 21 表 遺物集計表

	S01		S02		S03		S04		S05		S06		S07	
	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)
土師器	257	1,940	227	1,006	15	55	296	3,115	863	7,136	283	2,474	28	144
須恵器														
埴輪	5	36	23	251	1	7								
陶器														
鏡片	2	423			1	4			4	550				
その他			1(木製品)		26		1(土製品)		7	2(縄文)	31	1(土師)	31	
小計	264	2,399	251	1,283	17	66	297	3,122	869	7,717	284	2,505	28	144

	S08		SD01		SD02		SD03		SD04		SD05		SD06	
	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)
土師器	25	155	133	1,656	45	206	42	546	144	1,785	74	909	31	337
須恵器									2	21				
埴輪			1	32			1	9	1	20				
陶器									1	62				
鏡片			2	427										
その他	1(鉄製品)		10(鉄製品)		9		1(陶器)		13		1(磁器)		7	
小計	26	165	137	2,124	45	206	44	568	148	1,888	75	916	31	337

	SD07		SD08		SD09		SD10		SD11		SK01		SK02	
	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)
土師器	2,869	25,353					72	946			15	90	6	7
須恵器	131	2,611												
埴輪	192	23,171					1	39						
陶器	8	507												
鏡片	31	533					1	11						
その他	4(鉄製品)		90											
	1(縄文)		21											
小計	3,236	52,286					74	996			15	90	6	7

	SK03		SE01		SZ01		SS01		FP01		ビット1		ビット2	
	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)
土師器	65	524	6	56	2,384	39,134	88	978	8	46				
須恵器					7	111								
埴輪					30	550								
陶器														
鏡片	1	6			14	289								
その他					2(鉄製品)		20							
					1(縄文)		27							
					1(磁玉)		12							
小計	66	530	6	56	2,439	40,143	88	978	8	46				

	遺構外 (A区)		遺構外 (B区)	
	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)
土師器	48	573	170	2,487
須恵器	3	15	3	124
埴輪	2	23	2	17
陶器	2	84	2	23
鏡片	1	9	22	826
その他	1(磁器)	23	1(縄文)	
			1(鉄製品)	
小計	57	727	201	3,492

第4章 まとめ

1 各時代・時期の様相

今回の発掘調査では、古墳時代前期の住居跡8軒、方形周溝墓1基、溝跡6条、土坑2基、古墳時代後期の円墳1基、平安時代の火葬墓1基、溝跡5条、その他時期不明の井戸跡1基、土坑1基、ピット2基を検出した。また、これらの遺構に伴って古墳時代前期の土師器、玉類の未製品、古墳時代後期の須恵器、埴輪、平安時代の須恵器、中世の陶器を多数検出した。

以下に今回の発掘調査の成果を踏まえ、古墳時代前期から平安時代まで、時代・時期ごとの様相について述べる。

(1) 古墳時代前期

a. 住居跡

古墳時代前期の住居跡は8軒検出した。いずれも当該期において一般的な隅丸方形を呈するものである。第5・6号住居跡からは4本主柱と思われる柱穴配置を確認することができたが、他の住居跡の柱穴配置は不明である。壁周溝は第4・5・6・7号住居から検出したが、いずれも掘り込みが浅く、溝幅も狭いため、これらは土止め用の板材の設置に用いたものと考えられる。

住居跡に付随する施設は、第1・2・3・4号住居跡からは炉跡が、第6号住居跡からは貯蔵穴が検出された。また、第6号住居跡の貯蔵穴の隣からは、床面上に貼った粘土塊に挟まれるような状態で、逆位で設置された甕を検出した。この粘土塊に設置された土器は、住居に伴う施設として使用されたことは間違いないと思われるが、これが当時においてどのような機能を持っていたのかについては今後の検討を要する。

本調査で検出した住居跡の共通点は、いずれの住居跡もほぼ同じ方位角で建てられているという点である。この住居方位については、隣接する第8・9次発掘調査区、ひいては南原遺跡全体で検出されている住居跡についても当てはまる傾向である。住居跡の入口部は、第1・3・4号住居跡で検出された炉跡がいずれも住居跡の北西辺寄りに位置していることや、第5・6号住居跡の南東辺付近で入口施設の痕跡の可能性があるピットを検出していることから、南東方向に向いていたものと推定できる。南原遺跡で検出されている「周溝を有する建物跡」の多くが、その開口部を南東方向に有していることから、当該期の住居や建物を建てる際に、一定の方位規制が働いていた可能性を指摘できる。

住居跡出土遺物で特筆すべきものに、第2号住居跡から出土した緑色凝灰岩製の玉類未製品がある。本資料は、玉類製作にあたっての荒削り→形削り→調整→研磨・穿孔の各種工程のうち、形削り工程の段階にあると思われる資料である。

これまでの研究では、玉作工房跡の認定条件には、①竪穴住居などの工房となる空間的な範囲を持つ施設が存在すること、②その工房内に玉作に関連する工作用の施設が敷設されていること、③施設内から製作に必要な工具類が出土すること、④玉作の製作工程が復元できる未製品と共に、製作工程で生じる剥片類や原石が出土することの4点が挙げられている(寺村1996)。そして、これらの認定条件を満たす古墳時代前期の明確な玉作工房としては、東松山市反町遺跡(福田2012)や桶川市

前原遺跡（宮井 2010）が挙げられる。

戸田市内では、鍛冶谷・新田口遺跡から勾玉や管玉、またこれらの未製品が複数点出土している（西口ほか 1986）。福田氏は、これらの鍛冶谷・新田口遺跡の緑色凝灰岩製・滑石製玉作資料を検討した結果、同遺跡内に緑色凝灰岩製と滑石製の双方の玉類を製作する工房が2箇所所在し、小型の玉類は集落内の竪穴住居跡や周溝を有する建物跡へ、大型のものは集落内の方形周溝墓や未知の出現期古墳へ供給したと推定している（福田 2007）。

本調査で検出した第2号住居跡は、大部分が後世の掘削行為により破壊を受けていたことから、住居跡の付属施設の所在は不明であり、製作工程で生じる剥片類や工具の出土もなかった。したがって、本資料をもって第2号住居跡を「玉作工房跡」と認定することはできない。しかしながら、第2号住居跡が「工房」ではなくとも、本調査地点から玉類の未製品が出土したという事実は、近隣に勾玉を製作した工房が所在し、周辺集落へ玉類を供給していた可能性を示唆する。さらには、第1号方形周溝墓から出土した緑色凝灰岩製の勾玉についても、南原遺跡内に所在した玉作工房から供給されたものであった可能性を指摘できる。

b. 溝跡

溝跡は6条検出した。全体の形状を確認できたものがなかったため「溝跡」として報告するが、第1・2・5・10号溝跡は溝が弧を描くように湾曲することからも、これらはこれまで本市で「周溝状遺構」として報告している遺構と同種の遺構であると考えられる。

上記の周溝状遺構は、及川氏・飯島氏による問題提起以来、それが「方形周溝墓」なのか、「周溝を有する建物跡」なのかどうかと議論されてきた経緯がある（及川 1998・1999・2001、飯島 1998）。戸田市内では鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡、南町遺跡、前谷遺跡で同種の遺構が多数検出されており、これらの中には周溝内側に柱穴や竪穴の所在が確認され、それが「周溝を有する建物跡」であった可能性を傍証する事例も存在する。一方で、これらの周溝状遺構の大多数が「建物跡」であった証拠の一つである柱穴や掘り込み等を伴わない（検出されない）という問題点も同時に提示されることとなった。

本調査で検出した当該期の溝跡でも、それが建物跡であったことを直接的に示すような証拠を検出することはできていない。しかしながら、後述する方形周溝墓とはその形態や規模、出土遺物等の様相が一線を画すことから、これらが方形周溝墓ではなく、「周溝を有する建物跡」であった可能性が高いと考える。

本調査区において、当該期の溝跡が北東半に集中し、竪穴住居跡が南西半で集中して検出されたことは、「周溝を有する建物」と「竪穴住居」の立地差を検討する上で重要であると考えられる。本調査区南東部に近接する第6次調査区では、当該期の竪穴住居跡が8軒検出された一方、周溝を有する建物跡は1基のみしか検出されていない。このことから、南原遺跡南西部では、本調査区中央部と第6次調査区の北側周辺に「周溝を有する建物」の立地境界が存在した可能性を指摘できる。戸田市北東部に所在する前谷遺跡では、4次に渡る発掘調査で「周溝を有する建物跡」と思われる周溝状遺構が11基検出されているが、当該期の竪穴住居跡は1軒も検出されていないこと、事業団による約12,000㎡に及ぶ鍛冶谷・新田口遺跡調査区においては、北西部と南東部では周溝状遺構が群集す

る一方で竪穴住居跡の検出数が少ないことも、「周溝を有する建物」の立地を考える上で参考となる。これが周溝状遺構の機能・性格によるものなのか、または时期的な偏差によるものなのかについては今後の検討を要する。

c. 方形周溝墓

方形周溝墓は1基検出した。第1号方形周溝墓は、周溝外周縁までの規模は25m以上、方台部規模は14～16mを測り、市内で検出された方形周溝墓の中では最大規模のものであると言える。出土遺物は多様性に富み、在地系、畿内系、東海地方系、北陸地方系、下総台地系の各種土器に加え、勾玉や統十王台式に比定できる土器片が出土した。出土遺物量は比較的多く、特に周溝南西端の張り出し部からは焼土とともに遺物が集中して出土した。

市内でこれまでに検出された方形周溝墓で方台部規模が14mを超えるものは、鍛冶谷・新田口遺跡事業団調査第74号方形周溝墓、同遺跡同調査第7号方形周溝墓、南原遺跡第8・9次調査3号周溝墓の3基のみである。

方形周溝墓の認定基準は、福田氏によって「①方台部が直線的な辺を持つ。②平面形は全周、一隅切れ、四隅切れがある。③施設としての溝中土坑がある。④幅が1m以上、深さが50cmに満たないような広く浅いものは少ない。⑤壺の出土比率が高い。⑥出土土器の完形率が高い。⑦出土土器の出土位置がコーナーや陸橋部際、特定の周溝に偏る。⑧整然とした群構成をなす」の8点が提示されている（福田2014）。本調査で検出した方形周溝墓を含め、方台部規模が14mを超す先述の方形周溝墓は、上記認定基準の内いずれも①・②・④・⑦の4点を満たす。これらが弥生墳墓の系譜上にある「墓」であったことを明確に裏付ける周溝内の墳丘や埋葬施設の検出はないが、他の周溝を有する建物跡を含む周溝状遺構とはその形態・規模・出土遺物の様相が一線を画すことから「墓」であったと判断して差支えないものとする。また、第1号方形周溝墓の周溝内から、副葬品として埋納された可能性がある勾玉が出土したことや、何らかの葬送儀礼の痕跡の可能性がある遺物・焼土の集中分布域を検出したことは、本遺構が「墓」であったことを裏付けるものとする。

(2) 古墳時代後期

古墳時代後期では、円墳1基を検出した。本遺構は、後世の攪乱によって周溝等の明確なプランを確認することはできなかったが、埴輪の出土位置や僅かに残存する周溝の痕跡から古墳であると判断したものである。

第1号古墳（南原8号墳）に帰属する遺物には、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪がある。

人物埴輪は、頭部のみ出土である。頭部は側頭部から顔面部が赤彩されているが、右目部・右耳部を除き他の人体表現を確認することはできない。糸状耳飾りの痕跡が僅かに認められることから、女子埴輪であると考えられる。

鶏形埴輪は戸田市域では初めての出土事例である。鶏頭部から頸部、円筒部の出土であり、体部は欠損している。本資料は、鶏冠や大きな肉垂などの表現から、雄鶏を表したものと考えられる。なお、第7号溝跡からも鶏形の可能性がある埴輪片が1点出土しているが、破片資料のため詳細は不明である。

第1号古墳から出土した鶏形埴輪の表現の内、特徴的な点は①耳の表現、②鶏冠から嘴の表現であ

る。通常、雄鶏の耳は目の後下方にあり、耳羽が耳穴を覆いその下方に耳袋が垂れ下がっている。鶏形埴輪の耳の表現は「ニワトリの耳羽を写したのから始まり、耳羽に耳孔を追加したもの、耳孔だけ」というように変容していくとされるが（賀来 2009）、その位置は概ね実物の鶏と同じ位置に表現される。一方、本資料で“耳孔”を表現したと思われる穿孔は、目の下方、肉垂の脇に施されている。さらには、鶏冠と嘴が連続的かつ一体的に表現されている点は、実際の鶏の形態や他の写実的な鶏形埴輪の部位表現と様相が異なる。

本資料のような、非写実的で表現が形式化された鶏形埴輪は、賀来氏が提案する「実物モデル」（実際の鳥を見本としてつくられた埴輪）、「埴輪モデル」（鳥形埴輪を見本としてつくられた埴輪）でいうと、後者に該当する（賀来前掲）。同様のことは、“正面に目が表現された”南原遺跡第8次発掘調査出土の馬形埴輪（岩井・若松 2015）にも当てはめることができ、南原遺跡の5世紀後半から6世紀前半に築造された古墳に設置された動物形埴輪において共通する属性と言えるかもしれない。

埼玉県内では、これまでに10例の鶏形埴輪が確認されており、これらの多くが西暦500年前後の比較的古い段階の古墳から出土している（山崎・高田 2000）。本資料もまた、5世紀末から6世紀初頭に比定できる資料である。これまでの鶏形埴輪出土遺跡は県北半に集中していたことから、県南端の荒川低地上から本資料が出土したことは重要であるといえる。

鶏形埴輪の意義については、①被葬者の再生（西田 1998）、②首長霊の継承とその復活（清水 1994）、③被葬者の魂の守護（澤田 2000）、④悪霊を防ぐ呪的設備（橋本 1996）など諸説あるが、未だ定説はない。なぜ、南原遺跡の小規模な円墳に鶏形埴輪が設置されたのかについては今後の検討を要する。

（3）平安時代

平安時代では、火葬墓1基、溝跡5条を検出した。

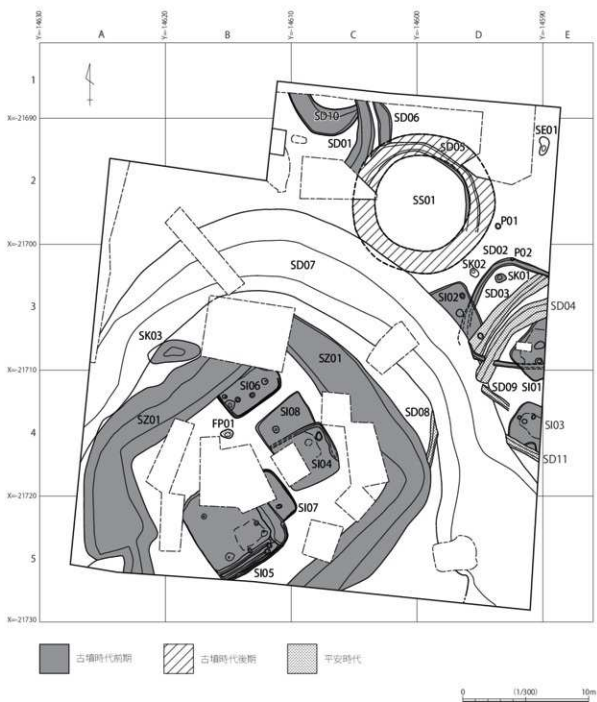
第1号火葬墓は、その形状から暫定的に平安時代に帰属するものと判断したものであるが、遺構に伴う遺物の出土はないため、詳細は不明である。南原遺跡をはじめ、戸田市全域においてもこれまで平安時代の火葬墓は検出されていないため、今後の事例増加に期することとせざるを得ない。

溝跡は、いずれも部分的な検出であったため、今回の調査ではこれらの機能を推定できるような成果を得ることはできなかった。溝跡から出土した当該期の遺物には、第3号溝跡の須恵器杯、第4号溝跡の須恵器壺、土師器杯があり、さらに後述する第7号溝跡からは平安時代の須恵器杯や土師器高台付杯が出土した。

南原遺跡では、第10次調査区や第3次調査E区で、平安時代の竪穴住居跡や土坑群、溝跡が検出されている。このことから、平安時代の集落の中心は南原遺跡の範囲の北半であったものと考えられる。一方で、本調査区が位置する南原遺跡の南半でも、単発的にはあるが平安時代の井戸跡や溝跡が検出されており、平安時代の人々の生活圏の広さを窺うことができる。

2 第1号方形周溝墓と第7号溝跡について

発掘調査では、第7号溝跡が古墳周溝である可能性を考慮しながら掘削を進めたが、①床面直上から9世紀代の須恵器が出土したこと、②埴輪片が出土する地点が溝跡の北部縁辺、すなわち第1号古



第70図 時代別遺構図

墳周辺に所在すること、③溝の南東端・南西端が谷と一体化し、平面形が規格的な円形とはならないこと、以上の3点から本遺構が古墳周溝ではなく、平安時代に埋没した溝跡であると判断した。一方で、本遺構覆土からは6世紀代に比定できる須恵器や、形象埴輪を含む埴輪片が大量かつ散逸的に出土している点には留意する必要がある、第7号溝跡が和光市吹上原遺跡第3次A・B区・第4次調査区2号墳（鈴木ほか2015）や川島町三竹遺跡事業団調査第1号古墳（細田ほか2011）のような、方形周溝墓（周溝）を囲うように築造された古墳の周溝であった可能性を捨て去ることはできないことを補記しておく。

第7号溝跡で特筆すべきは、その検出位置である。本遺構は、第1号方形周溝墓とほぼ重複することなく、これを取り囲むように形成されている。また、第1号方形周溝墓の覆土において基本層序A～C層の堆積を確認していることから、本遺構が形成された当時も第1号方形周溝墓の周溝は埋没せずに残っていたものと思われる。残念ながら遺構の性格を明らかにするような資料は検出することができなかったが、橋脚痕であった可能性があるピットの検出や、本遺構の溝両端が谷に向かって続くことから、本溝跡が排水用の溝としての機能を有していた可能性を考慮することができる。さらに、第7号溝跡が第1号方形周溝墓を破壊せずに、取って迂回するように形成されたことは、それが物理的障害であったか、または守るべき対象であったかは不明であるが、第7号溝跡を掘削した人々が第1号方形周溝墓の存在を認識していたことを示すことに他ならないと考える。

3 南原遺跡における土地利用の変遷

南原遺跡は昭和44年の発掘調査以来、13回に渡る発掘調査を重ねてきた。これらの調査により、遺跡の南西部に古墳時代後期の古墳群が所在したことが明らかとなり、また遺跡の全域において弥生時代後期後半から古墳時代前期の集落が広く点在することが明らかとなった。

ここでは、今回の第12次発掘調査の成果を踏まえ、以下に南原遺跡の土地利用の変遷を6期に分し、概説する。

(1) 第1期（弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭）

南原遺跡において集落が形成され始める時期である。これに先行する時代・時期の遺構は、これまでの調査において検出されていない。第1期の集落は、竪穴住居や周溝を有する建物が構造物の中心であり、その疎密はあるが南原遺跡全域に広がっていたと考えられる。既に指摘されているように、竪穴住居群が先行し、周溝墓（周溝を有する建物跡）群が後続するという集落構造の変遷も想定できるが（早田ほか2010）、詳細については今後の各遺構の重複関係、共時性の精査が必要となる。

(2) 第2期（古墳時代前期前半）

第2期は、南原遺跡南西部（第8・9・12次調査区）に大型の方形周溝墓が築造される時期である。本調査区と第8・9次調査区からは、それぞれ1基ずつ、約30mの間隔を空け2基の大型方形周溝墓が検出されている。これらの大型方形周溝墓は、重複する竪穴住居跡や周溝を有する建物跡を破壊して築造されていることが判明している。周辺において後続する時期の居住痕跡の検出数が急激な減少を見せることから、この2基の大型方形周溝墓の築造が、南原遺跡南西部が「集落の居住域」から「墓域」へと変容する画期となったものと考えられる。

(3) 第3期（古墳時代中期）

第3期の検出遺構数は急激に少なくなり、第2次調査B区で竪穴住居跡3軒、第9次調査で井戸跡が1基、第10次調査区で竪穴住居跡1軒、土坑2基が検出されるのみとなる。南原遺跡南西部における居住痕跡検出数の急激な減少は、その背景に第2期における居住域から墓域への変容があると考えられる。

(4) 第4期（古墳時代後期）

遺跡南西部において小規模な円墳が築造される。これまでに検出された古墳は、本調査第1号墳（南原8号墳）を含めると8基を数える。これらの内、埴輪を伴う古墳は、南原1・7・8号墳であり、いずれも形象埴輪を伴うものである。当該期の居住痕跡は、遺跡中央部の第3次調査B区で竪穴住居跡1軒と屋外竈1基が検出されたのみであり、遺跡南西部からは居住痕跡を確認できていない。このことから、古墳時代後期においても南原遺跡南西部が「墓域」として認識され続け、古墳築造の場として選定されていたことがわかる。また、南原2・4・5号墳の開口部が南西方向を向くのも、古墳時代前期の大型方形周溝墓からの伝統であった可能性を指摘できる。

(5) 第5期（奈良～平安時代）

遺跡全域に渡って遺構・遺物が検出されるようになる。しかしながら、集落の中心は竪穴住居跡2軒が検出された10次調査区や土坑群が検出された3次E区など、遺跡中央から北側であったものと考えられる。

(6) 第6期（中世）

中世の遺構・遺物も遺跡全域で検出されている。特徴的な遺構には、直線的で長大な溝跡が挙げられる。遺跡南半ではこれらの溝は南西—北東あるいは南東—北西に延び、区画溝として機能する。そして、この区画内に第11次調査で多数検出されたように掘立柱建物跡が構築される。遺跡北半でも類似の溝跡が見られる。これらの溝跡は、ほぼ東—西へ走るものと思われるが、未調査部が多く詳細は不明である。中世に南原遺跡周辺に存在した可能性がある「戸田城」との関連性を含め、今後の検討を要する。

結語

今回の発掘調査によって、古墳時代前期から平安時代に生きた人々の生活を理解する上で大きな成果を得ることができた。また、本調査区を含む南原遺跡南西部において、ここが居住域から墓域へと変容する画期を見出すことができたのは大きな成果であると言える。

当時の人々がここ南原遺跡周辺でどのような生活を営み、また、どのような社会や文化を築いていたのかについては、周辺の調査や他の遺跡との比較によって明らかになっていくものと考えられる。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 2012 『南原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 396 集
公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』19
群馬県立歴史博物館
- 岩井聖吾・坂上直嗣・山寄裕子
2013 『南原遺跡Ⅻ』 戸田市文化財調査報告ⅩⅧ 戸田市教育委員会
- 岩井聖吾・若松良一
2015 「付篇 南原遺跡第 8 次発掘調査出土の埴輪について」
『前谷遺跡Ⅳ』 戸田市文化財調査報告ⅩⅩ 戸田市教育委員会
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に—」『青山考古』15 青山考古学会
- 1999 「関東地方の低地遺跡の再検討（2）—「周溝を有する建物跡」と方形周溝墓および今後の集落研究への展望—」『青山考古』16 青山考古学会
- 2001 「低地遺跡の検討（3）—「周溝を有する建物跡」の再検討—」『青山考古』18
青山考古学会
- 賀来孝代 2009 「鳥形埴輪の表現—表現におけるふたつのモデル—」『埴輪研究会誌』13 埴輪研究会
- 小島清一 1991 『南原遺跡Ⅴ』 埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第 3 集 戸田市遺跡調査会
1996 『南原遺跡Ⅵ』 埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第 5 集 戸田市遺跡調査会
- 澤田文夫 2000 「古墳上の鶏形埴輪の方位について—古代に鶏は朝鳥であったか?—」
『動物考古学』15 動物考古学会
- 堀野 博 1969 『南原（高知原）遺跡第 1 次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告Ⅲ 戸田市教育委員会
1972 『南原（高知原）遺跡第 2・3 次発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告Ⅴ
戸田市教育委員会
1981 「第 2 章第 2 節 南原遺跡」『戸田市史 資料編 1 原始・古代・中世』 戸田市
- 清水眞一 1994 「鶏形埴輪についての一考察—鎌向遺跡巻野内坂田地区の鶏形埴輪の持つ意義—」
『橿原考古学研究所論集』11 橿原考古学研究所
- 鈴木一郎・中岡貴裕・麻生順司・坪田弘子・斎藤武士・御代七重・西本正憲・太田雅晃
2015 『吹上原遺跡（第 2 次 A 区～第 6 次調査）』和光市埋蔵文化財調査報告書 59
和光市遺跡調査会・和光市教育委員会
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』 国学院大学研究報告 3
- 西口正純・山本 禎・鈴木仁子・金井由美子
1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 62
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 西田親史 1998 「鶏形埴輪と古墳祭祀」『多摩考古』28 多摩考古学会
1999 「関東地方における鶏形埴輪の諸問題」『動物考古学』12 動物考古学会

- 2000 「続・鶴形埴輪の諸問題—中部・東北地方の出土事例を中心に—」
『動物考古学』15 動物考古学会

橋本博文ほか

- 1999 『堂ヶ作山古墳Ⅲ』会津若松市文化財調査報告 50
堂ヶ作山古墳調査団・会津若松市教育委員会

早田利宏・河野一也・井 博幸

- 2010 『南原遺跡Ⅸ』戸田市文化財調査報告XⅦ 戸田市教育委員会

福田 聖

- 2000 『方形周溝墓の再発見』ものが語る歴史3 同成社
2007 「鍛冶谷・新田口遺跡の玉作資料」『研究紀要』20 戸田市立郷土博物館
2012 『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 393
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2014 『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房

細田 勝・大屋道剛

- 2011 『三竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 384
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

宮井英一

- 2010 『前原／大沼』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 373
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

山崎 武・高田大輔

- 2000 「鴻巣市出土の鶴型埴輪—安養寺古墳群及び生出土塚遺跡出土例について—」
『埴輪研究会誌』4 埴輪研究会

写 真 图 版



1 遺跡遠景



2 遺跡全景



1 第1号住居跡全景（南西より）



2 第1号住居跡炉遺物出土状況（南より）



3 第1号住居跡ピット①遺物出土状況（東より）



4 第2号住居跡全景（北西より）



5 第2号住居跡炉（南より）



6 第3号住居跡全景（南西より）



7 第3号住居跡炉遺物出土状況（南東より）



8 第4号住居跡全景（A区南西より）



1 第4号住居跡全景 (B区南東より)



2 第4号住居跡炉 (南より)



3 第5号住居跡全景 (北西より)



4 第5号住居跡掘り方遺物出土状況 (南東より)



5 第5号住居跡焼土・炭化物 (北西より)



6 第6号住居跡全景 (南西より)



7 第6号住居跡粘土塊 (南西より)



8 第6号住居跡粘土塊・遺物出土状況 (北東より)



1 第7号住居跡全景（北西より）



2 第7号住居跡掘り方遺物出土状況（北東より）



3 第8号住居跡全景（南西より）



4 第1・5・6・10号溝跡全景（西より）



5 第1・5・6・10号溝跡全景（南西より）



6 第5号溝跡全景（南より）



7 第5号溝跡全景（北西より）



8 第10号溝跡遺物出土状況（東より）



1 第2・3・4号溝跡全景（南西より）



2 第4号溝跡遺物出土状況（東より）



3 第7号溝跡全景（A区北より）



4 第7号溝跡全景（B区東より）



5 第7号溝跡遺物出土状況（東より）



6 第7号溝跡遺物出土状況（東より）



7 第7号溝跡遺物出土状況（人物埴輪の腕）（北東より）



8 第1号土坑全景（南より）



1 第2号土坑全景（南より）



2 第3号土坑全景（東より）



3 第3号土坑遺物出土状況（B区北東より）



4 第1号井戸跡全景（A区西より）



5 第1号方形周溝墓全景（A区西より）



6 第1号方形周溝墓全景（B区東より）



7 第1号方形周溝墓全景（B区北東より）



8 第1号方形周溝墓全景（B区北より）



1 第1号方形周溝墓周溝くびれ部（北より）



2 第1号方形周溝墓遺物出土状況（勾玉）（東より）



3 第1号方形周溝墓遺物出土状況（A区南から）



4 第1号方形周溝墓遺物出土状況（A区北から）



5 第1号古墳遺物出土状況（西より）



6 第1号火葬墓全景（B区東より）



7 第1号ピット全景（南より）



第1号住居跡出土遺物



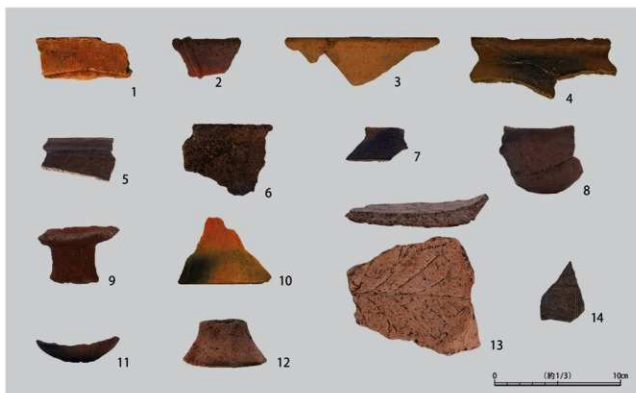
第2号住居跡出土遺物



第3号住居跡出土遺物



第4号住居跡出土遺物



第5号住居跡出土遺物



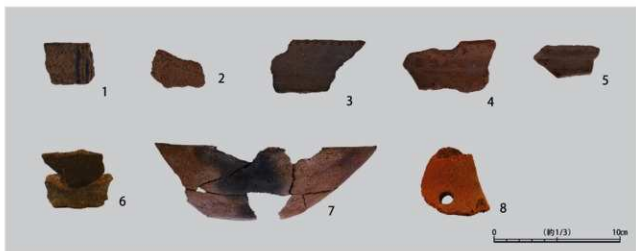
第6号住居跡出土遺物



第7号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物



第1号溝跡出土遺物



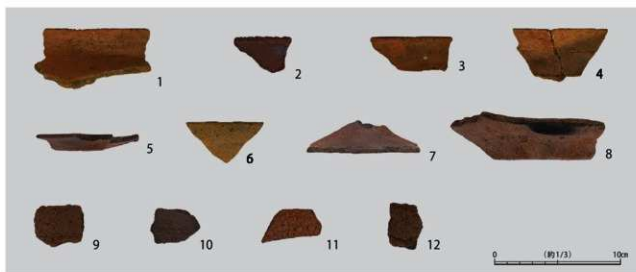
第2号溝跡出土遺物



第3号溝跡出土遺物



第4号溝跡出土遺物



第5号溝跡出土遺物



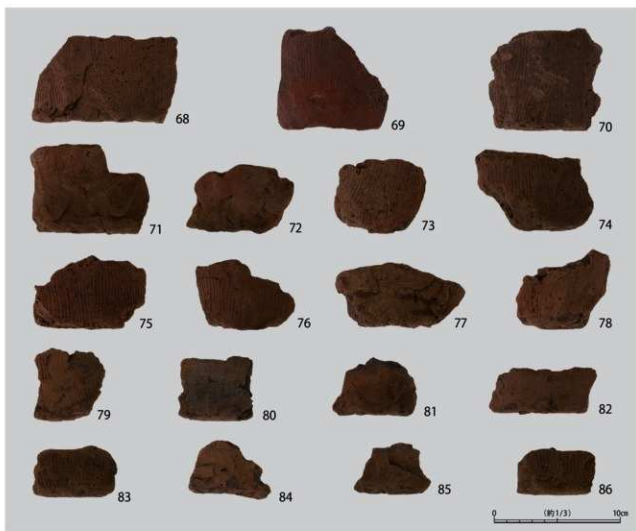
第7号溝跡出土遺物(1)



第7号满迹出土遺物(2)



第7号满迹出土遺物(3)



第7号溝跡出土遺物(4)



第10号溝跡出土遺物



第3号土坑出土遗物



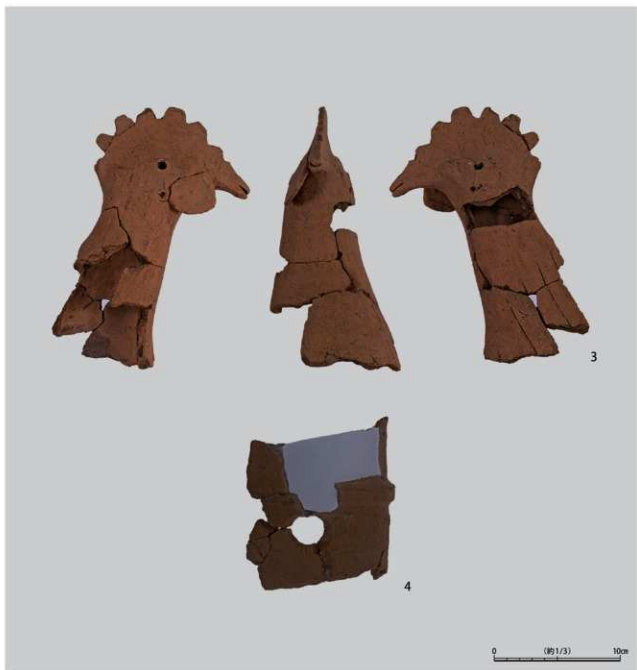
第1号方形周满墓出土遗物(1)



第1号方形周满墓出土遗物(2)



第1号古墳出土遺物(1)



第1号古墳出土遺物(2)



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみはらいせきじゅうに まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしよ							
書名	南原遺跡Ⅻ 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	戸田市文化財調査報告							
シリーズ番号	25							
編著者名	岩井聖吾、柏山 滋、宅間清公							
編集機関	戸田市教育委員会							
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田 1-18-1 Ⅻ 048 (441) 1800							
発行年月日	2016 (平成 28) 年 3 月 15 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南原遺跡 第12次調査	戸田市南町 2314番1、2	11224	06-002	35° 80° 42°	139° 67° 18°	13.4.2 ～ 13.6.29	1,527	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
南原遺跡	集落跡 円墳	古墳時代前期	住居跡 8軒 溝跡 6条 土坑 2基 方形周溝墓 1基	土師器、 石製品(勾玉)	方形周溝墓の方台部は南東側に張り出し部を有する。張り出し部の西側周溝からは埴土を伴い土器が集中的に出土している。			
			古墳時代後期	古墳(円墳) 1基	埴輪(円筒・形象)	形象埴輪は、人物と鶏が出土している。		
		平安時代	溝跡 5条 火葬墓 1基	土師器、須恵器				
要約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である南原遺跡の範囲に属し、JR 埼京線戸田公園駅から南西約 500 m の戸田市南町 2314-1、2 に位置する。</p> <p>南原遺跡は、荒川によって形成された平坦な沖積地(荒川低地)に氾濫や流路変更によって発達した微高地(自然堤防)上に立地している。調査の結果、古墳時代前期の住居跡 8 軒、溝跡 6 条、土坑 2 基、方形周溝墓 1 基、古墳時代後期の円墳 1 基(南原 8 号墳)、平安時代の溝跡 5 条、火葬墓 1 基、土坑 1 基、井戸跡 1 基、ピット 2 基を検出した。</p>							

戸田市文化財調査報告 XXV

南原遺跡 XII

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行・編集

埼玉県戸田市教育委員会

〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1

TEL 048 (441) 1800

印刷

関東図書株式会社

埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

発行日

平成28年3月15日